

広域農道沿海南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

# 崩先地下式横穴群

県営広域営農団地農道整備事業沿海南部地区  
串間市七ツ橋工区工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

1993

宮崎県教育委員会

「崩先地下式横穴群」正誤表

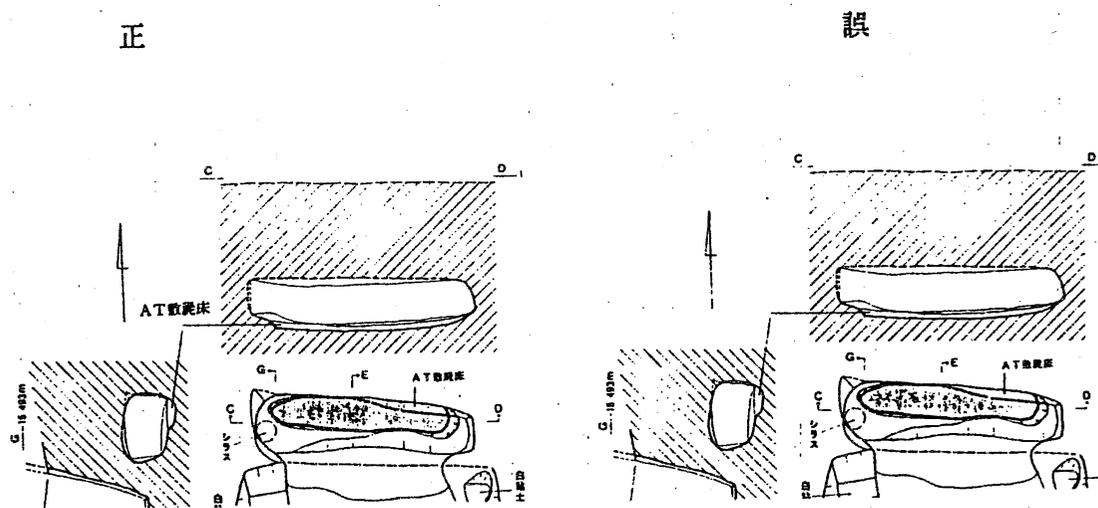
ページ	行	誤	正
1	図版IV	(1) 羨門施設	閉塞施設
2	序	1 宮崎県教育委員会	宮崎県教育委員会
3	図版目次	図版3 地下式横穴全景	地下式横穴群全景
4	図版目次	図版3 (1) 地下式横穴全景	地下式横穴群全景
5	表目次	表2 申間市の地下式横穴群一覧表	申間市の地下式横穴
6	1	25 主査面高哲郎(開発との調査)	主査面高哲郎(開発との調整)
7	5	8 今から6,500年から11,000年にかけての時期には	今からおよそ6,500年から11,000年前にかけての時期には
8	5	9,10 水田が営まれているが	そこでは水田が営まれているが
9	5	15 崩先地下式横穴	崩先地下式横穴群
10	6	17 弱小古墳群	小規模古墳群
11	14	13 幅90cm、長さ210cm深さ84cmの規模をもつ。	幅111cm、長さ235cm、深さ84cmの規模を持つ。
12	14	18 幅158cm、高さ32cm、羨道の奥行20cmの規模を持つ。	幅158cm、高さ32cm、羨道の奥行10cmの規模を持つ。
13	19	6 X線観察にとると	X線観察によると
14	19	9 全長16,2cm最大刃部幅3,9cm	全長16,2cm、最大刃部幅3,9cm
15	22	1 赤ホヤ層上面で幅84cm、長さ132cm、深さ84cmの規模を持つ。	赤ホヤ層上面で幅128cm、長さ198cm、深さ84cmの規模を持つ。
16	25	15 幅100cm、長さ192cm、深さ94cmの規模を持つ。	幅145cm、長さ237cm、深さ94cmの規模を持つ
17	28	11,12 赤ホヤ層上面で幅150cm、長さ250cm、深さ86cmの規模を持つ。	赤ホヤ層上面で幅147cm、長さ249cm、深さ86cmの規模を持つ。
18	28	29 最も残りの良い遺体は	最も残りの良い4号の遺体は
19	33	24,25 この地下式横穴では、玄室内に屍床を掘込んだり、特別に火山灰を敷いた痕跡は	この地下式横穴では、明瞭な屍床掘り込みは見られなかったものの、AT火山灰

《このレコードは次ページに続きます。》

「崩先地下式横穴群」正誤表

ページ	行	誤	正
19			認められなかった。が敷かれていた痕跡が確認できた。
20	34	13,14 床面には幅28cm、長さ150cm程の長楕円形AT火山灰層上面が露出していた。この部分は深さ2~6cm程が柔らかく、屍床として掘削された可能性が高い。	床面には幅28cm、長さ150cm程の長楕円形で、深さ2~6cm程度の柔らかい部分があり、AT火山灰が認められた。
21	34	26 方位N-78°-Wである。	方位はN-78°-Wである。
22	41	8 中央にかけた斜に下がり、	中央にかけて斜に下がり、
23	43	13 長さ170cm以上	推定長180cm前後
24	45	18 AT火山灰見られなかった唯一の	AT火山灰が見られなかった唯一の
25	45	29 幅108cm、現存長215cm、深さ50cmの規模を持つ。	幅133cm、現存長210cm、深さ50cmの規模を持つ。
26	45	30 竪穴部だけに限れば、崩先地下式横穴群で最大の規模である。	(削除)
27	49	7,8 深さはテラスからおよそ35cmを計る。	深さはテラスからおよそ36cmを計る。
28	49	11 第33図1	第32図1
29	53	14,15 稜は沈線ぎみに甘い。口縁部に稜を持つが甘い。	天井部と体部の境には、沈線状の稜を持ち、口縁端部にも稜を持つが甘い。
30	55	6	
31	58	23 3,5,6,11号(4号は、	3,5,6,11号(3号は、

37~38ページ 第20図 地下式横穴6号平面図・断面見通図・土層図



広域農道沿海南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

# 崩先地下式横穴群

県営広域営農団地農道整備事業沿海南部地区  
串間市七ツ橋工区工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

1993

宮崎県教育委員会



地下式横穴群全景（真上から）



(1) 地下式横穴群全景（東から）



(2) 地下式横穴群全景（北から）



(1) 地下式横穴 1号羨門閉塞状況



(2) 地下式横穴 1号羨門閉塞状況 (目張除去後)



(3) 地下式横穴 2号竪坑・羨門閉塞状況



(4) 地下式横穴 4号羨門閉塞状況



(5) 地下式横穴 4号羨門閉塞状況 (目張除去後)



(6) 地下式横穴 4号人骨検出状況



(7) 地下式横穴 7号竪坑土層断面



(8) 地下式横穴 10号竪坑土層断面



(1) 地下式横穴 5号竪坑・羨門施設・玄室（玄室天井部除去後）



(2) 地下式横穴 1号羨門・玄室（玄室床面はA T火山灰）



(3) 地下式横穴 3号竪坑・玄室（天井部除去後 玄室床面はA T火山灰）



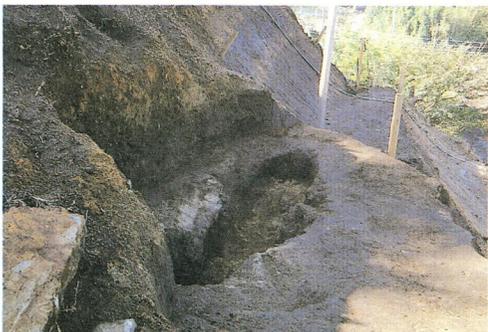
(4) 地下式横穴 4号玄室（天井部除去後 玄室床面はA T火山灰）



(5) 地下式横穴 7号竪坑・玄室（天井部除去後 玄室床面はA T火山灰）



(6) 地下式横穴 9号竪坑・玄室（玄室床面はA T火山灰）



(7) 石蓋土墳墓全景（石蓋除去後 白く見えるのはシラス）



(8) 崩先遺跡土層断面

# 序

宮崎県教育委員会は、県営広域営農団地農道整備事業沿海南部地区工事に先立って、路線予定地内にある遺跡の事前調査を実施しています。それら調査記録の最初の刊行となる本報告書では、平成2年に調査した、串間市崩先地下式横穴群の記録を掲載しました。

本書が、社会教育・学校教育の場において広く活用され、学術研究の基礎資料として役立つことを期待いたします。

調査に際して御協力いただいた地元の方々、串間市教育委員会、南那珂農林振興局に深甚の謝意を表するしだいです。

平成5年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

# 例 言

1. 本書は、南那珂農林振興局の依頼により、県営広域営農団地農道整備事業沿海南部2期地区七ツ橋工区工事に先立って、1990年10月から12月にかけて、宮崎県教育委員会が実施した、串間市大字西方字崩先7364番地外に所在する崩先地下式横穴群の発掘調査報告書である。
2. 遺物の整理、実測、トレースは飯田博之、押川保子、棧陽子、久木田知代子、杉尾愛恵、富永優子、松浦由美、森美知子が行った。遺物の整理、実測、トレースを除く、報告書作成に関する総ての作業は石川悦雄が行った。  
本書の執筆は、面高哲郎（第I章1）、石川悦雄が担当した。
3. 本書で使用した方位は総て磁北である。（真北との偏差は西偏約 $5.5^{\circ}$ である。）
4. 調査において、特別調査員として以下の方々にお世話になった。人骨の取り上げを長崎大学医学部第2解剖学教室の松下孝行助教授、分部哲秋講師、佐伯和信助手にお願いし、地下式横穴閉塞石の石材鑑定を穴戸章氏にお願いした。
5. 調査の記録類、出土遺物等は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターにおいて保管している。
6. 地下式横穴1号、4号、石蓋土壙墓の埋葬人骨については、諸般の事情により、第2集以降に掲載する予定である。
7. 地下式横穴の部位記述について、方位を使用すると共に、竪坑、羨門は玄室に向って、玄門部、玄室は竪坑に向って左右とする。玄室長辺を奥壁とする。

# 本文目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査体制 .....	1
3. 調査日誌抄 .....	2
第Ⅱ章 環境 .....	5
1. 地理的環境 .....	5
2. 歴史的環境 .....	5
第Ⅲ章 地下式横穴の調査 .....	14
1. 地下式横穴1号 .....	14
2. 地下式横穴2号 .....	19
3. 地下式横穴3号 .....	25
4. 地下式横穴4号 .....	28
5. 地下式横穴5号 .....	33
6. 地下式横穴6号 .....	34
7. 地下式横穴7号 .....	34
8. 地下式横穴8号 .....	41
9. 地下式横穴9号 .....	43
10. 地下式横穴10号 .....	45
11. 地下式横穴11号 .....	45
第Ⅳ章 その他の遺構と遺物 .....	49
1. 石蓋土壙墓 .....	49
2. 円形土壙 .....	49
3. 土師器 .....	50
4. 包含層出土の縄文土器・弥生土器 .....	50
第Ⅴ章 崩先1号墳の所在確認調査 .....	53
1. 1号墳の周溝と周溝出土須恵器 .....	53
2. 牛舎横の畑で表採した須恵器 .....	55

第VI章 まとめ	56
1. 若干の考察	56
(1) 閉塞石の採石地	56
(2) 桜島とAT、シラスとベンガラ	56
(3) 頭位と副葬品の配置	57
(4) 地下式横穴分布の特徴	58
2. まとめ	61

## 挿 図 目 次

第1図 串間市古墳分布図 (1/75,000)	7
第2図 志布志湾沿岸古墳分布図 (1/75,000)	9
第3図 崩先遺跡発掘調査区及び周辺地形図 (1/1,500)	15
第4図 崩先地下式横穴群分布図 (1/300)	17
第5図 地下式横穴1号竪坑平面図・羨門閉塞図 (1/30)	19
第6図 地下式横穴1号竪坑平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	20
第7図 地下式横穴1号平面図・断面見通図 (1/30)	21
第8図 地下式横穴1号出土直刀・鉄鏃 (1/4、1/2)	22
第9図 地下式横穴2号竪坑平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	23
第10図 地下式横穴2号平面図・断面見通図 (1/30)	24
第11図 地下式横穴2号出土刀子 (1/2)	25
第12図 地下式横穴3号竪坑平面図・土層図 (1/30)	26
第13図 地下式横穴3号平面図・断面見通図 (1/30)	27
第14図 地下式横穴3号周辺出土高坏 (1/3)	28
第15図 地下式横穴4号竪坑平面図・羨門閉塞図 (1/30)	29
第16図 地下式横穴4号竪坑平面図・断面見通図・土層断面図 (1/30)	30
第17図 地下式横穴4号平面図・断面見通図 (1/30)	31
第18図 地下式横穴4号出土刀子 (1/2)	33
第19図 地下式横穴5号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	35
第20図 地下式横穴6号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	37
第21図 地下式横穴7号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	39
第22図 地下式横穴8号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)	42

第23図	地下式横穴9号出土剣 (1/3) .....	43
第24図	地下式横穴9号平面図・断面見通図 (1/30) .....	44
第25図	地下式横穴10号平面図・断面見通図・土層図 (1/30) .....	46
第26図	地下式横穴11号竪坑平面図 (1/30) .....	47
第27図	石蓋土壙墓平面図・断面見通図 (1/30) .....	48
第28図	石蓋土壙墓出土刀子 (1/2) .....	50
第29図	崩先遺跡A地区出土高坏 (1/3) .....	50
第30図	円形土壙平面図・土層図 (1/30) .....	51
第31図	崩先遺跡出土縄文・弥生土器 (1/3) .....	52
第32図	崩先1号墳周溝出土須恵器 (1/3) .....	53
第33図	崩先1号墳周溝 (1/200) .....	54
第34図	崩先遺跡牛舎横畑表採須恵器 (1/3) .....	55
第35図	玄室長軸方向による地下式横穴のグルーピング .....	59
第36図	閉塞施設と副葬品の関係 .....	59

## 巻頭カラー図版目次

- 図版Ⅰ 地下式横穴群全景 (真上から)
- 図版Ⅱ (1) 地下式横穴群全景 (東から)  
(2) 地下式横穴群全景 (北から)
- 図版Ⅲ (1) 地下式横穴1号羨門閉塞状況  
(2) 地下式横穴1号羨門閉塞状況 (目張除去後)  
(3) 地下式横穴2号竪坑・羨門閉塞状況  
(4) 地下式横穴4号羨門閉塞状況  
(5) 地下式横穴4号羨門閉塞状況 (目張除去後)  
(6) 地下式横穴4号人骨検出状況  
(7) 地下式横穴7号竪坑土層断面  
(8) 地下式横穴10号竪坑土層断面
- 図版Ⅳ (1) 地下式横穴5号竪坑・閉塞施設・玄室 (玄室天井部除去後)  
(2) 地下式横穴1号羨門・玄室 (玄室床面はA T火山灰)  
(3) 地下式横穴3号竪坑・玄室 (天井部除去後 玄室床面はA T火山灰)  
(4) 地下式横穴4号玄室 (天井部除去後 玄室床面はA T火山灰)

- (5) 地下式横穴7号竖坑・玄室（天井部除去後 玄室床面はA T火山灰）
- (6) 地下式横穴9号竖坑・玄室（玄室床面はA T火山灰）
- (7) 石蓋土墳墓全景（石蓋除去後 白く見えるのはシラス）
- (8) 崩先遺跡土層断面

## 図 版 目 次

- 図版 1 (1) A地区（地下式横穴群）発掘調査前全景（東から）  
(2) A地区遠景（台地下から）
- 図版 2 (1) 地下式横穴群全景（東から 上は善田川と志布志湾）  
(2) 地下式横穴群全景（北から）
- 図版 3 (1) 地下式横穴全景（南東から 左は善田川）  
(2) 地下式横穴全景（真上から）
- 図版 4 (1) 地下式横穴9号・8号・1号（左から）  
(2) 地下式横穴1号・2号・3号・4号（左から）
- 図版 5 (1) 地下式横穴3号・4号・5号（左から）  
(2) 地下式横穴7号・6号（左から）
- 図版 6 (1) 石蓋土墳墓（北から）  
(2) 地下式横穴群全景（西から）
- 図版 7 (1) 地下式横穴1号竖坑（南から）  
(2) 地下式横穴1号羨門閉塞石検出状況
- 図版 8 (1) 地下式横穴1号羨門閉塞石目張粘土除去後  
(2) 地下式横穴1号玄室（奥壁際に直刀・鉄鏃）
- 図版 9 (1) 地下式横穴1号直刀・鉄鏃副葬状況  
(2) 地下式横穴1号竖坑（西から）  
(3) 地下式横穴2号竖坑埋土と羨門閉塞石（西から）
- 図版 10 (1) 地下式横穴2号竖坑・羨門閉塞石（南から）  
(2) 地下式横穴2号竖坑・羨門閉塞石（西から）  
(3) 地下式横穴2号玄室（天井部除去後 西から）
- 図版 11 (1) 地下式横穴3号竖坑（北から）  
(2) 地下式横穴3号竖坑（東から）
- 図版 12 (1) 地下式横穴3号竖坑・羨門

- (2) 地下式横穴3号玄室(天井部除去後)
- 図版13 (1) 地下式横穴3号竖坑・羨道・玄室(天井部除去後)
  - (2) 地下式横穴4号竖坑埋土と羨門閉塞石検出状況(西から)
  - (3) 地下式横穴4号竖坑・羨門閉塞石(東から)
- 図版14 (1) 地下式横穴4号竖坑・羨門閉塞石(南から)
  - (2) 地下式横穴4号羨門閉塞石検出状況
- 図版15 (1) 地下式横穴4号羨門閉塞石(目張粘土除去後)
  - (2) 地下式横穴4号玄室人骨検出状況
- 図版16 (1) 地下式横穴4号玄室・刀子副葬状況(天井部除去後)
  - (2) 地下式横穴5号竖坑・羨門(南から)
- 図版17 (1) 地下式横穴5号竖坑(西から)
  - (2) 地下式横穴5号竖坑・閉塞施設・玄室(天井部除去後)
- 図版18 (1) 地下式横穴5号玄室・閉塞施設(東から 天井部除去後)
  - (2) 地下式横穴6号竖坑・玄室(天井部は崩壊)
- 図版19 (1) 地下式横穴6号竖坑・玄室(西から)
  - (2) 地下式横穴6号玄室(天井部除去後)
- 図版20 (1) 地下式横穴6号竖坑土層断面図
  - (2) 地下式横穴6号竖坑・閉塞施設・玄室(天井部除去後)
- 図版21 (1) 地下式横穴6号竖坑・閉塞施設・玄室(東から 天井部除去後)
  - (2) 地下式横穴7号竖坑・羨門
- 図版22 (1) 地下式横穴7号竖坑・羨門(北から)
  - (2) 地下式横穴8号竖坑(南から)
  - (3) 地下式横穴8号竖坑・羨門(西から)
- 図版23 (1) 地下式横穴9号竖坑・玄室・剣副葬状況(南から)
  - (2) 地下式横穴9号竖坑・玄室・剣副葬状況(西から)
- 図版24 (1) 地下式横穴10号竖坑土層断面図
  - (2) 地下式横穴10号竖坑・玄室(南から 天井部除去後)
- 図版25 (1) 地下式横穴10号竖坑・玄室(西から 天井部除去後)
  - (2) 地下式横穴10号竖坑・玄室(東から 天井部除去後)
- 図版26 (1) 地下式横穴11号竖坑(北から 半壊)
  - (2) 石蓋土墳墓埋土・蓋石検出状況(北から)
- 図版27 (1) 石蓋土墳墓墓頭・蓋石検出状況(東から)
  - (2) 石蓋土墳墓頭蓋骨片・刀子検出状況(北から)

- 図版28 (1) 石蓋土壙墓頭蓋骨片・刀子検出状況（東から）  
(2) 石蓋土壙墓（西から）  
(3) 石蓋土壙墓（南から）
- 図版29 (1) 円形土壙  
(2) 崩先1号墳（円墳）遠景
- 図版30 (1) 崩先1号墳周溝検出状況（墳丘はすでに削平）  
(2) 崩先1号墳周溝検出状況
- 図版31 地下式横穴群副葬鉄器
- 図版32 崩先遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器
- 図版33 崩先遺跡出土須恵器・崩先1号墳周溝出土須恵器

## 表 目 次

表1 串間市及び志布志湾沿岸古墳地名表 .....	11
表2 串間市の地下式横穴群一覧表 .....	60

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 1. 調査に至る経緯

宮崎県南那珂農林振興局では、沿海南部地域を 3 地区に分けて広域農道の建設を進めている。昭和59年 3 月、宮崎県農業振興課より 3 期地区（日南市寺村～日南市山ノ口・北郷町昼野～北郷町谷合）建設予定地内の文化財の所在について照会があった。昭和59年 6 月、照会地内の分布調査を実施した際、南那珂農林振興局より 2 期地区内の串間市善田原台地の分布調査依頼があり、両地域同時に調査を実施した。その結果、善田原台地の道路予定地周辺には、墳丘が消滅し詳しい位置は不明であったが、かつて古墳が存在していた箇所があり、さらに、ほぼ全域にわたって土器片等の遺物が散布していることが確認された。

分布調査により善田原台地上が遺跡の密集地であることが判明したため、遺跡の保存について振興局と協議を行った。しかし、路線変更が不可能であったため、台地上については道路予定地全域を発掘調査することになり、昭和62・63年度は唐人町遺跡、平成元年度に別府ノ木遺跡、平成 2 年度に崩先遺跡の調査を実施した。

## 2. 調査体制

### 調査主体

宮崎県教育委員会

教育長 児 玉 郁 夫

教育次長 増 井 彬 宏

高 山 義 孝

### 調査担当部局

文化課長 梨 岡 孝

課長補佐 片野坂 次 彦

### 庶務担当

主幹兼庶務係長 小 倉 茂 光

主査 長 友 広 海

### 調査担当

埋蔵文化財係長 岩 永 哲 夫（総括）

主査 面 高 哲 郎（開発との調査）

主任主事 石 川 悦 雄（調査担当）

### 特別調査員

長崎大学医学部第二解剖学教室助教授 松 下 孝 行（人骨の取り上げ、研究）

講師 分 部 哲 秋 (同上)

助手 佐 伯 和 信 (同上)

元県教育委員会文化課埋蔵文化財係職員 穴 戸 章 (地下式横穴閉塞石石材鑑定)

#### 調査作業

加藤チズコ、加藤リツ子、河野キサエ、河野キヌエ、河野サカエ、河野ハツヨ  
河野フク、河野フジ子、河野ヤス子、河野レイコ、城フミ子、武田マスマ  
田中キク、田中チサ子、田中ヨシ子、那須ケサラ、水野スミ子、安山フヂ子、  
安山ミキ

#### 整理作業

押川保子、棧 陽子、久木田知代子、富永優子、杉田愛恵、松浦由美、森 美知子、  
飯田博之 (県文化課埋蔵文化財係)

#### 調査協力

串間市教育委員会、宮崎県南那珂農林振興局

### 3. 調査日誌抄

1990. 9.21 南那珂農林振興局と調査の打ち合せ。
- 10.11 発掘調査開始。A地区の表土剥ぎ。
- 10.17 A地区西半部清掃。地下式横穴1、2、4号の竪坑、円形遺構、ピットP1 (後に地下式横穴8号)、P2～4を検出。
- 10.18 地下式横穴3、5号の竪坑検出。
- 10.22 A地区東半部の表土剥ぎ。地下式横穴1～5号の竪坑土層掘り上げ清掃、写真撮影。土層セクション実測開始。
- 10.29 地下式横穴1～5号竪坑清掃。午後雨で作業中止。土層断面実測。
- 10.30 地下式横穴1～5号の竪坑写真撮影。A地区東半部で地下式横穴6、7号竪坑検出。A地区西端部で法面工事中に石蓋土壌を発見。さらに地下式横穴閉塞石と思われる板石が散乱していたため、工事を中止させ、精査するも、すでに痕跡を留めず。
- 10.31 A地区西端部地下式横穴の探査。地下式横穴1、2、4号の閉塞石撮影。6、7号竪坑土層断面写真撮影。B地区表土剥ぎ開始。
11. 1 B地区精査。赤ホヤ層上面で遺構確認できず。A地区測量基準杭設定。地下式横穴9号検出。1号竪坑平面図実測。
11. 2 A地区、地下式横穴1号竪坑エレベーション実測。B地区赤ホヤ層除去開始。

- C地区表土剥ぎ開始。
11. 5 A地区、地下式横穴9号清掃、写真撮影。4号竖坑実測。3、5～7号玄室発掘。B地区、赤ホヤ層下精査。遺構、遺物無し。C地区表土剥ぎ終了。
11. 6 A地区、地下式横穴4号竖坑実測。9号写真撮影。B地区、赤ホヤ層下精査。遺構等確認できず、B地区調査終了。C地区、赤ホヤ層上面精査。
11. 7 A地区、地下式横穴2号の竖坑写真撮影。実測。閉塞石取り外し。頭蓋骨片確認。4号、人骨確認。C地区、赤ホヤ層上面精査。遺構無し。
11. 8 A地区、長崎大学医学部第二解剖学教室による地下式横穴2、4号人骨取り上げ作業。C地区、赤ホヤ層除去作業。
11. 9 雨で作業中止。
- 11.10 A地区、石蓋土墳墓実測。C地区、赤ホヤ層除去作業。
- 11.13 A地区空撮（スカイサーベイ）。C地区赤ホヤ層除去作業。
- 11.14 A地区、地下式横穴9号実測。C地区赤ホヤ層除去作業。
- 11.15 A地区、地下式横穴9号実測終了。石蓋土墳墓石蓋取外し、写真撮影。
- 11.16 A地区、石蓋土墳墓実測終了。頭蓋骨片、刀子取り上げ。1/100遺構配置図測量（協和測量）。A地区西半部、工事引渡し。
- 11.19 A地区、道路法面再工事のため南側調査区を拡張。西端部法面で閉塞石を伴う地下式横穴1基と黒色土の落込み1つを確認するが、足場が確保できず、未調査のまま法面に残す。C地区の作業は一時中断。
- 11.20 A地区、拡張区表土除去。雨のため、午前中で作業中止。地下式横穴8号実測。
- 11.21 A地区、拡張区表土除去。地下式横穴6、8号実測。
- 11.22 A地区、拡張区精査。遺構確認できず。祖母死去により3時で作業中止。
- 11.26 A地区、地下式横穴8号実測終了。畑取り付け道路部分表土除去作業。西端部法面で新たに落込み1基を確認。C地区、桜島火山灰層まで試掘坑を入れる。
- 11.27 A地区、地下式横穴6号実測終了。玄室断面写真撮影。1号写真撮影。C地区、土層観察トレンチ掘削。
- 11.28 A地区、地下式横穴1号実測。C地区、土層写真撮影。桜島火山灰層上下の精査。遺構遺物確認できず。
- 11.30 A地区、地下式横穴1号実測。取り付け道路部分拡張。C地区、土層実測。C地区調査終了。
12. 1 A地区、取り付け道路部分精査。地下式横穴10号検出。1、2号実測。
12. 3 A地区道路土手除去作業。地下式横穴1号副葬直刀写真撮影。2号実測。

12. 4 A地区、道路土手除去作業。地下式横穴11号竖坑検出。2号写真撮影、実測終了。5号実測。
12. 5 A地区、地下式横穴5号実測、写真撮影終了。A'地区表土剥ぎ開始。
12. 6 A地区、地下式横穴7号実測。10号断面写真撮影。A'地区表土剥ぎ。
12. 7 A地区、地下式横穴7号実測。A'地区赤ホヤ層上面精査。遺構確認できず。
- 12.10 A地区、地下式横穴7号写真撮影。4号、写真撮影実測。
- 12.11 A地区、地下式横穴4号実測。
- 12.13 A、A'地区発掘作業終了。地下式横穴4号実測。来年度工事地区試掘開始。
- 12.14 特別調査員宍戸章氏、地下式横穴閉塞石石材調査。試掘地遺構遺物確認できず。所在不明になっていた崩先古墳の周溝の一部を確認。
- 12.15 A地区、地下式横穴3号、10号写真撮影。工事予定地試掘終了。崩先古墳の周溝検出作業。
- 12.17 雨。A地区、地下式横穴10号実測。リース器材撤収。
- 12.18 崩先古墳周溝写真撮影。埋め戻し。地下式横穴10号実測。調査事務所撤収。発掘調査終了。
- 12.26 発掘器材撤収。

## 第Ⅱ章 環 境

### 1. 地理的環境 (第1図)

崩先地下式横穴群は、串間市街地の南西、福島川と善田川に挟まれ浸食された、上位シラス台地である福島台地の一角をなし、通称善田原と呼ばれるシラス台地の南端に所在する。台地は遺跡の西端部分ではほぼ垂直に近く浸食されており、崩先と言う名称にふさわしい地形を呈している。台地上は黒ボク土が表層をなしていて、薩摩芋やタバコ等の栽培を主とした畑作が営まれている。遺跡の調査中、桜島-薩摩テフラの上位、赤ホヤ層下位で水成砂層が見られ、今から6,500年から11,000年にかけての時期には、ほぼ台地の高さに善田川の水位が達していた時期があったことがわかる。台地は周辺を善田川と福島川による沖積地に取り囲まれ、水田が営まれているが、最近では宅地化が進行している。遺跡の標高はおよそ16m、台地下の水田との比高は約10mあり、眼下には善田川河口や志布志湾が展望できる。

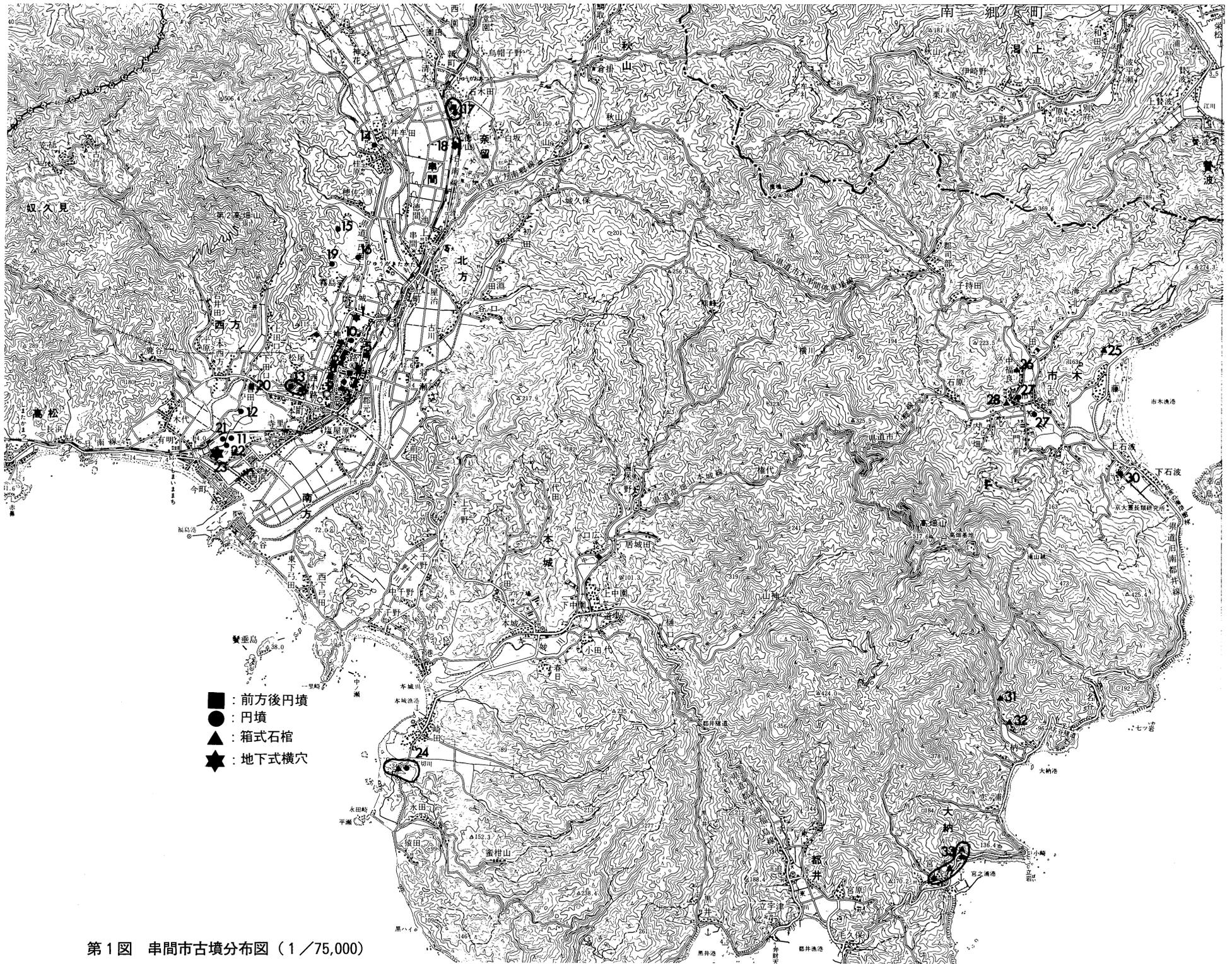
### 2. 歴史的環境 (第1、2図、表1、2)

農地整備に伴って調査が比較的行われるようになった縄文時代の遺跡を別にすれば、串間市域における、遺跡の様相はあまり解明が進んでいない。したがって、そこから導かれる歴史像も輪郭がはっきりせず、崩先地下式横穴を取囲む環境としての古墳時代は、古墳の分布を中心に構成せざるを得ない。

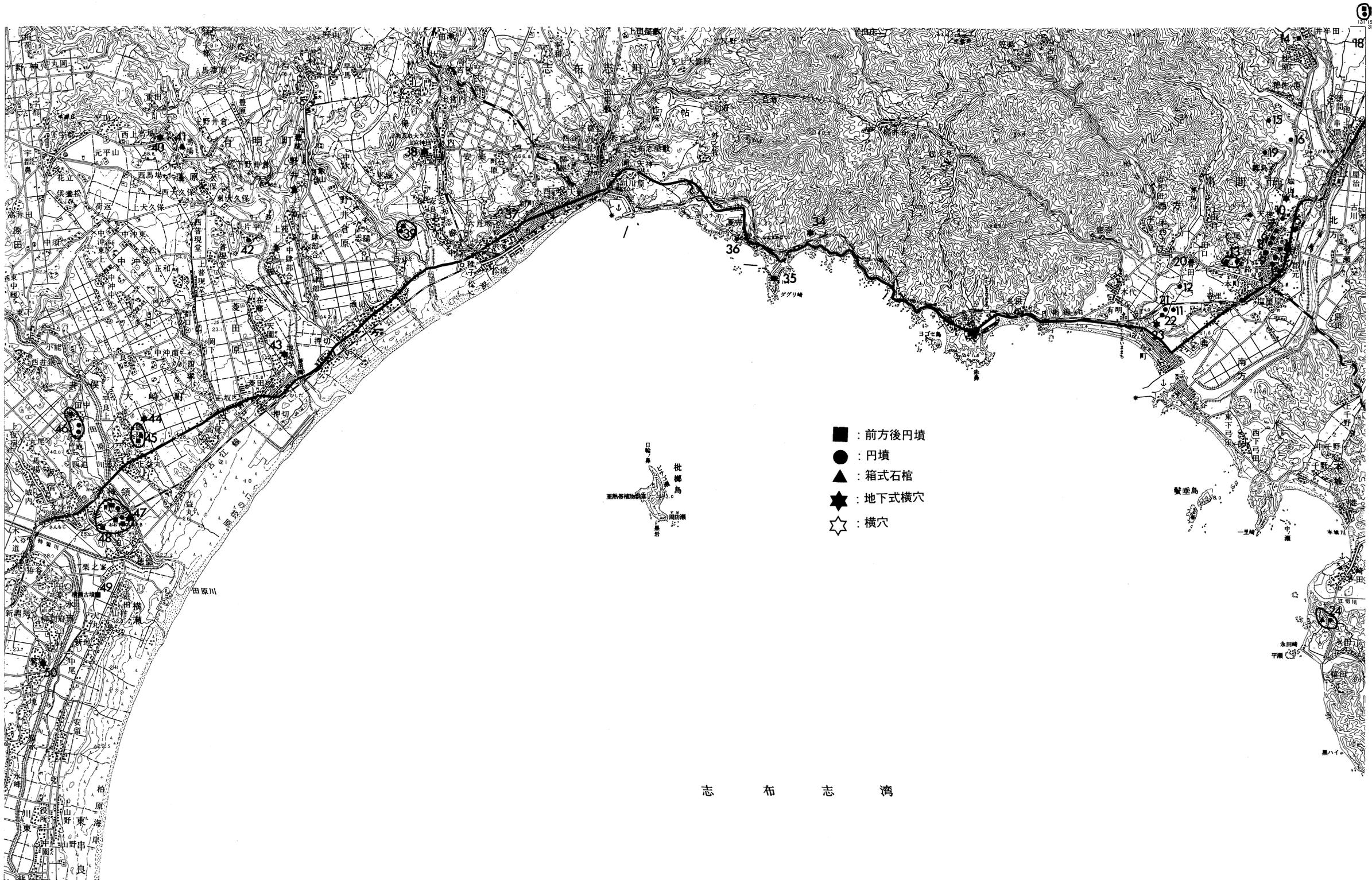
串間市に於ける古墳時代墓の在り方は、墳墓の構成と立地によって二つの類型に大別される。一つは福島川流域の河岸段丘やシラス台地に分布する平野に臨む古墳群で、前方後円墳を含む高塚を中心とし、周囲に地下式横穴や箱式石棺が分布する。一つは浦に流入する小規模河川が形成した、小規模可耕地に臨む海岸部の古墳群で、円墳を主とした少数の高塚を中心として、周囲に箱式石棺が分布するものである。後者には市木古墳群、都井(北園)古墳群、本城古墳群があり、宮ノ浦箱式石棺群も、高塚は今の所確認されていないがこのタイプの候補と考えられる。志布志湾東端から日向灘沿岸に点在するこれらの古墳群以外にも、黒井、都井、といった浦に臨んだ丘陵上にも、同様の古墳群が存在する可能性があり、小地域に割拠する在地集団の存在がその背後に伺える。彼等は水運を通して結ばれていた可能性もあり、とりわけ有力な古墳群が見られないことから、比較的对等な関係を維持していたと考えられる。この地域の古墳、箱式石棺もその時期、内容が知られているものが少ないが、藤浦1号墳(箱式石棺)には六窓の鏝を持つ頭椎大刀柄が伴い、7世紀前半代の時期が与えられ、川原石積の石室を持つ本城古

墳群では6世紀後半以降の須恵器が採集されているので、古墳時代後期に前記の状況の展開を見た地域と考えておきたい。一方、前者の類型では、4号（剣城塚）、5号（毘沙門塚）、10号（万多城塚）の前方後円墳の首長墓系列を持つ福島古墳群を中心として、単独の前方後円墳と3基の円墳から構成される徳山古墳群、数基の円墳のみから構成されている善田原（崩先）古墳群といった小古墳群が取囲む状況が認められる。これらの古墳群もその内容はほとんど判っていない。前方後円墳の首長墓系列を持つ有力な古墳群である福島古墳群は、その周辺に福島1号“墳”（南畑地下式横穴）という地下式横穴を有するが、その内容は全く判らない。銭亀塚を含む善田原古墳群は、かろうじて数基の古墳の時期が判明している唯一の古墳群である。銭亀塚は平石積石室を主体部として持つ円墳（一説には前方後円墳）で、墳丘に須恵器片、主体部内外に長頸鏃、耳環、雁木玉、ガラス小玉などを伴い、6世紀後半以降の古墳と見られる。崩先1号墳は周溝からMT15～TK10型式の須恵器蓋坏が出土しているので6世紀前半代に比定できる。あるいは崩先2号墳に伴うものかとも考えられる牛舎横の畑から表採された須恵器はMT85型式で、推測まじえれば、善田原古墳群は6世紀を通して造営された古墳群であると言える。徳山古墳群は内容がまったく判らないが、全長70m近い前方後円墳を5世紀代に、円墳を6世紀代と仮定すれば、6世紀代には前方後円墳の造営が見られなくなる古墳群と見ることができる。6世紀代の造営と考えられる徳山地下式横穴群、崩先地下式横穴群は、そうした弱小古墳群の周辺に、独立した占地をもって、維持されたと思われる。

志布志湾沿岸に目を広げてみれば、串間市域と類似した在り方よりも異なった在り方を示す地下式横穴群の存在の方が目に付く。志布志湾沿岸の大隅地方にはおよそ400基程の高塚古墳が知られている。その内20基前後が前方後円墳である。地下式横穴は1986年の集成で約80基が知られている。これらの墳墓は、古墳群の構成によって、高塚のみで構成される古墳群、地下式横穴のみで構成されるもの、その両者が混在するものの3つに類型化されている。全長80m以上の規模を持つ前方後円墳は、単独墳である飯盛山古墳（80m以上、5世紀前半）、横瀬古墳（134m、5世紀中葉）、高塚だけで古墳群が構成され、前方後円墳の首長墓系列をなす唐仁古墳群の主墳である唐仁大塚（150m、5世紀後半）と、単独墳もしくは地下式横穴を混在させない特徴があり、大古墳は墳丘の規模を増大させながら、志布志湾岸を南に移動する傾向にある。地下式横穴を混在させる古墳群は、前方後円墳の首長墓系列を持つ塚崎古墳群の39号墳で71m、神領古墳群の6号墳で43mと最大70m級であり、そのほとんどが50m以下の前方後円墳および円墳で構成される。混在型の地下式横穴群のなかでも規模の大小があり、原田古墳群、岡崎古墳群など円墳（方墳1基）のみで構成される古墳群との混在も見られる。混在型地下式横穴群のもう一つの特徴は、妻入りで軽石製石棺を持つ、5世紀末から6世紀初頭に位置付けられる古相のものから、平入りで小規模な6世紀後半の新相の地下式横穴まで変遷が見られることと、高塚古墳、就中前方後円墳の最盛期以降に地下式横穴の造営が盛んになることである。



第1図 串間市古墳分布図 (1/75,000)



志 布 志 湾

第2図 志布志湾沿岸古墳分布図 (1/75,000)

串間市及び志布志湾沿岸古墳地名表 (1)

【表1】

分布	古墳名	通称	所在地	種別	内部主体	時期	指定	全長(径)m	遺物	備考
1	福島古墳1号	南畑下式畿穴	串間市西方南畑	地下式横穴			県指定解除			宅地、削平
2	福島古墳2号		串間市西方南畑	円墳			県指定			墳丘わずかに残
3	福島古墳3号	長清見塚	串間市西方桑ノ木	円墳			県指定			墓地
4	福島古墳4号	剣城塚	串間市西方桑ノ木	前方後円墳			県指定	60		
5	福島古墳5号	昆沙門塚	串間市西方桑ノ木	前方後円墳			県指定	21		前方部削平
6	福島古墳6号		串間市西方家巡	円墳			県指定解除			市営住宅、墳丘削平
7	福島古墳7号		串間市西方家巡	円墳			県指定解除			市営住宅、墳丘削平
8	福島古墳8号		串間市西方家巡	円墳			県指定解除			宅地、墳丘削平
9	福島古墳9号	霧島塚	串間市西方家巡	円墳			県指定			前方部削平
10	福島古墳10号	万多城塚	串間市西方石仏	前方後円墳			県指定解除			宅地、墳丘削平
11	福島古墳11号		串間市西方東原	円墳			県指定解除			宅地、墳丘削平
12	福島古墳12号		串間市西方中ノ坂	円墳			県指定解除			畑、墳丘削平
13	福島古墳13号	松尾古墳	串間市西方善田原	円墳			県指定解除			土取、削平
14	福島古墳14号		串間市西方合宗	円墳			県指定解除			土取、削平
15	福島古墳15号	松尾古墳	串間市西方合宗	円墳			県指定解除			土取、削平
16	福島古墳16号		串間市西方合宗	円墳			県指定解除			畑、墳丘削除
17	福島古墳17号	桂原古墳	串間市西方胡麻科	円墳			県指定解除			畑、墳丘削除
18	福島古墳18号		串間市西方胡麻科	円墳			県指定解除			畑、墳丘削除
19	福島古墳19号		串間市西方上高野	円墳			県指定解除			畑、墳丘削除
20	徳山古墳群	石木田古墳	串間市西方上高野	円墳			県指定解除			畑、墳丘削除
21	徳山古墳		串間市奈留徳山	前方後円墳1、円墳3、箱式石棺						
22	徳山地下式畿穴群		串間市奈留徳山	前方後円墳				69		
23	王子谷古墳		串間市奈留水瀧	地下式横穴12以上						8 基程度破壊、4 基調査
24	銭亀塚		串間市西方畑王子谷							詳細不明
25	朋先1号墳		串間市西方善田	円墳？	平石横石室	6世紀後半以降				調査
26	朋先2号墳		串間市西方善田原	円墳		6世紀前半				丸玉、竊玉、小玉、鉄鏝、磨片、ガンギ玉
27	朋先地下式畿穴群		串間市西方朋先	円墳？		6世紀末？				須恵器MT15~TK10
28	本城古墳群	鬼ヶ城古墳群	串間市西方朋先	地下式横穴11、石蓋土壊墓1						墳丘削平、周溝確認
29	本城古墳1号	鬼ヶ城古墳	串間市崎田	円墳7、箱式石棺群			県指定			調査削平
30	本城古墳2号	鬼ヶ城古墳	串間市崎田江切込入	円墳	横穴式石室		県指定			
31	本城古墳3号		串間市崎田松崎	円墳			県指定			
32	本城古墳4号		串間市崎田松崎	円墳			県指定			
33	本城古墳5号		串間市崎田松崎	円墳			県指定			
34	本城古墳6号		串間市崎田松崎	円墳			県指定			
35	本城古墳7号		串間市崎田永田	円墳			県指定			墳丘削平
36	市木古墳	藤浦1号墳	串間市崎田永田	円墳						金銅装束頭椎大刀柄(六窓透鏢)
37	市木古墳2号	藤浦2号墳	串間市市木藤浦	箱式石棺		7世紀前半				直刀2
38	市木古墳3号	桂松古墳	串間市市木藤浦	箱式石棺			県指定解除			みかん畑、削平
39	市木古墳4号	蛭田古墳	串間市市木桂松	箱式石棺			県指定			墳丘ほとんどの削平
40	市木古墳5号	本宮古墳	串間市市木蛭田	円墳			県指定解除			市木小敷地、削平
41	市木古墳6号	本宮古墳	串間市市木本宮	箱式石棺			県指定解除			水田、墳丘裾削平
42	市木古墳7号	砂子田古墳	串間市市木砂子田	円墳			県指定			水田、削平

串間市及び志布志湾沿岸古墳地名表 (2)

分布	古墳名	通称	所在地	種別	内部主体	時期	指定	全長(径)m	遺物	備考
31	都井古墳1号	北園古墳	串間市大納北園	箱式石棺			県指定解除			畑、削平
32	都井古墳2号	北園古墳	串間市大納北園	箱式石棺			県指定解除			畑、削平
33	都井古墳3号	北園古墳	串間市大納北園	箱式石棺			県指定解除			箱式石棺数基あり
	宮ノ浦古墳	宮ノ浦古墳	串間市大納宮ノ浦	箱式石棺						詳細不明
	鳥羽古墳		串間市大納鳥羽	円墳						詳細不明
	毛久保古墳		串間市郡井森の谷	前方後円墳						詳細不明
	湊普門寺古墳		串間市本城湊	箱式石棺						詳細不明
34	打出谷地下式横穴		志布志町夏井打出谷	地下式横穴						男女3体埋葬
35	飯盛山古墳	ひょうたんの塚古墳	志布志町夏井飯盛山	前方後円墳	石棺?			80	埴輪、ガラス勾玉、ガラス小玉、ガラス丸玉、土師器	削平
36	夏井古墳		志布志町夏井堀之内	円墳						削平
37	六月坂土版横穴墓		志布志町安楽六坂	横穴墓		奈良?				
38	宮馬場地下式横穴		志布志町安楽宮馬場	地下式横穴	石棺?				鏡、土器、直刀	
39	小牧古墳群		志布志町安楽小牧	前方後円墳1、円墳3		6世紀~7世紀初頭		40	須恵器、土師器	
40	馬場地下式横穴群		有明町蓬原馬場	地下式横穴6					剣、鉞、三角鏃	
	原田古墳群		有明町原田大塚	円墳5、方墳1、地下式横穴1						未調査
	原田地下式横穴		有明町原田大塚	地下式横穴	軽石製石棺				刀子	妻入り、女性一体埋葬
41	馬場古墳									
42	片平古墳									
43	地心寺地下式横穴群		大崎町桑田地心寺	地下式横穴2						断面確認
44	飯塚地下式横穴群		大崎町飯塚	地下式横穴4	軽石製石棺他					
45	飯隈古墳群		大崎町飯隈	前方後円墳1、円墳8、地下式横穴4						削平
45	飯塚8号墳		大崎町飯塚	前方後円墳						
46	田中古墳群		大崎町井俣・神領	円墳3						
47	神領地下式横穴1号		大崎町横瀬竜相	地下式横穴	軽石製石棺				内向式鏡、イモ貝製銅、鉞、骨製かんざし	妻入り
47	神領地下式横穴2号		大崎町神領天子丘	地下式横穴	軽石製石棺					形状不詳
47	神領地下式横穴3号		大崎町横瀬竜相	地下式横穴						妻入り板閉塞
47	神領地下式横穴4号		大崎町横瀬竜相	地下式横穴						妻入り
47	神領地下式横穴5号		大崎町横瀬天子ノ前	地下式横穴						妻入り
48	神領古墳群		大崎町神領・横瀬	前方後円墳4、円墳9、地下式横穴5						
48	神領6号墳		大崎町神領天子丘	前方後円墳	箱式石棺			43	日光鏡、変形獣帯鏡、剣、刀子	
48	神領11号墳		大崎町横瀬竜相	前方後円墳				30		北半削平
48	神領13号墳		大崎町横瀬竜相	前方後円墳				21		前方部削平
48	神領16号墳		大崎町横瀬竜相	前方後円墳	軽石製箱式石棺			34		前方部一部削平
49	横瀬古墳		大崎町横瀬エサイ	前方後円墳	軽石製石棺			134	埴輪IV、須恵器TK73直刀、短甲	
50	鷲塚地下式横穴		大崎町永吉鷲塚	地下式横穴	軽石製横穴				刀子1	平入り
	後迫古墳群		大崎町野方	円墳2						

地下式横穴群が単独で構成されるもののうち、海岸部の地下式横穴は、地応寺地下式横穴、宮馬場地下式横穴、鷺塚地下式横穴など単独もしくは数基の小規模なものが多く、宮ノ上地下式横穴群、上ノ原地下式横穴群など10数基で構成される地下式横穴群は少し内陸部に立地しているものが多い。

串間市域の地下式横穴と高塚古墳群の関係を志布志湾沿岸地域における両者の関係から見れば、70m以下の前方後円墳もしくは小規模円墳で構成される古墳群との関係で、志布志湾沿岸部地下式横穴の在り方が類似し、5世紀後半から6世紀の妻入りで軽石製石棺を持つ地下式横穴が欠如する点、混在と縁辺という立地の点で相違が見られる。周辺に従属的に造営されたという側面を重視するか、あるいは独立して排他的に造営された側面を重視するかの違いで、串間市域における地下式横穴群の評価が異なってくる。端的に述べれば、地下式横穴が、前方後円墳－円墳－地下式横穴という序列に組込まれた墓制なのか、そういった枠組みの外にある墓制なのかということである。これは今の所、仮定の上立った仮説の一選択肢の域を出ない議論であるが、志布志湾沿岸部でも志布志町以南の地下式横穴造営集団は、5世紀の段階で既に前方後円墳体制のなかに取込まれ、前方後円墳－円墳－地下式横穴という序列に組込まれたのに対し、串間市域の地下式横穴造営集団は、大古墳の欠如に反映された比較的弱体な古墳造営集団の支配力に組込まれるのが遅れ、6世紀段階に従属するものの、その内部にまでは取込まれず、異分子視された従属とも言うべき状況が、縁辺部の排他的立地に示されているように思われる。

#### <参考文献>

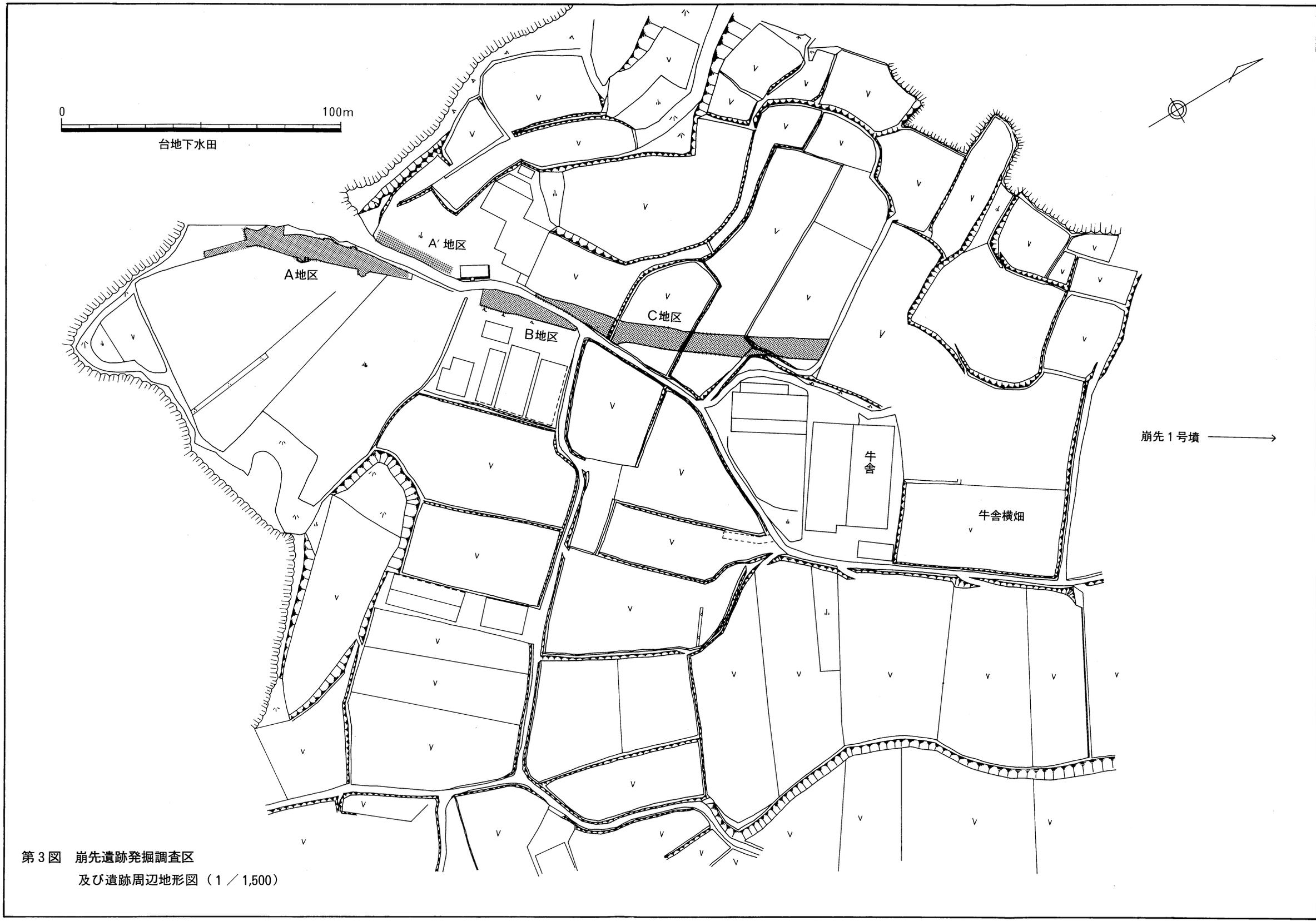
1. 『串間市遺跡詳細分布調査報告書』(I)、(II) 串間市教育委員会 1990、1991
2. 石川恒太郎 「福島町銭亀塚調査報告」『日向遺跡調査報告書』第二号 宮崎県教育委員会 1959
3. 石川恒太郎「串間市市木箱式石棺調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第五号 宮崎県教育委員会 1960
4. 石川恒太郎「串間市徳山の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16号 宮崎県教育委員会 1972
5. 石川恒太郎『串間市郷土史』串間市役所 1974
6. 河口貞徳『日本の古代遺跡38 鹿児島』保育社 1988
7. 池畑耕一「第10章大隅」『前方後円墳集成 九州編』山川出版社 1992
8. 『岡崎4号墳・1号地下式横穴』串良町教育委員会 1986
9. 『神領地下式横穴群5号』大崎町教育委員会 1988
10. 『天神原地下式横穴群』吾平町教育委員会 1989
11. 『地下式横穴墓から見た古墳時代 一資料一』宮崎考古学会・鹿児島県考古学会 1986

### 第三章 地下式横穴の調査

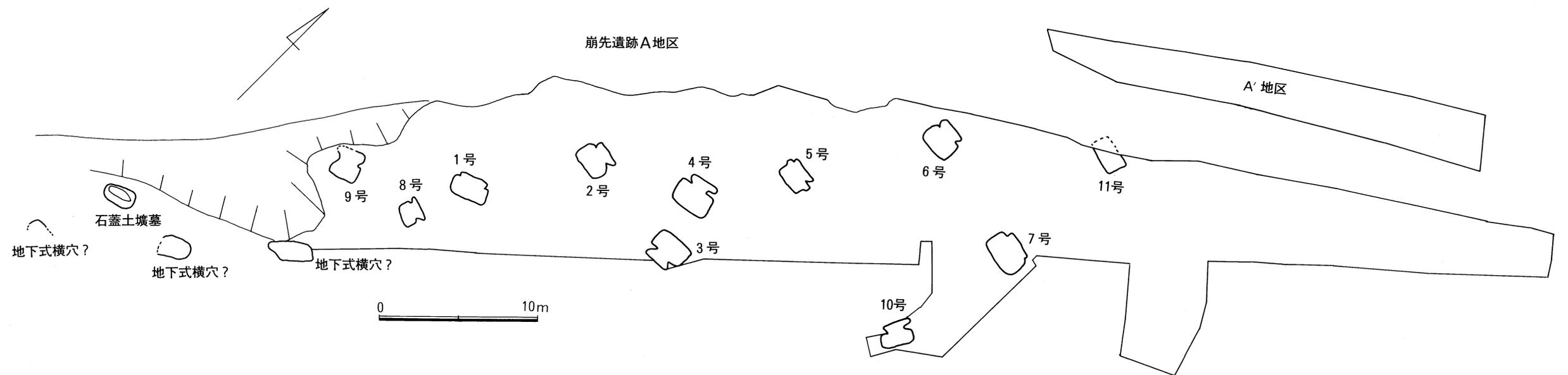
発掘調査は道路工事予定地幅約10m、長さ約230mの区域で実施した。調査区は地形や道路等でA、A'、B、C地区に区分した(第3図)。そのうちA'、B、C地区では顕著な遺構は検出されなかったが、A地区西半部に於て、地下式横穴1基と石蓋土壙墓1基を検出し、調査した。調査できたものの他に、道路法面工事中に3基の地下式横穴もしくは石蓋土壙墓と思われる黒色土の落込みを確認した。そのうちの1基には、直立した閉塞石と推定される板石が確認できた。この3基については、10m以上の急傾斜であり、足場の確保が難しく、安全性を考慮して未調査のまま法面に保存した。又、休日に進められた同じ法面工事中に、2箇所から板石が掘出されたが、連絡を受けた時点ではすでに削平が進行しており、明確に地下式横穴と確認することはできなかった。

#### 1. 地下式横穴1号(第5~7図、図版Ⅲ(1)、(2)、Ⅳ(2)、4、7~9)

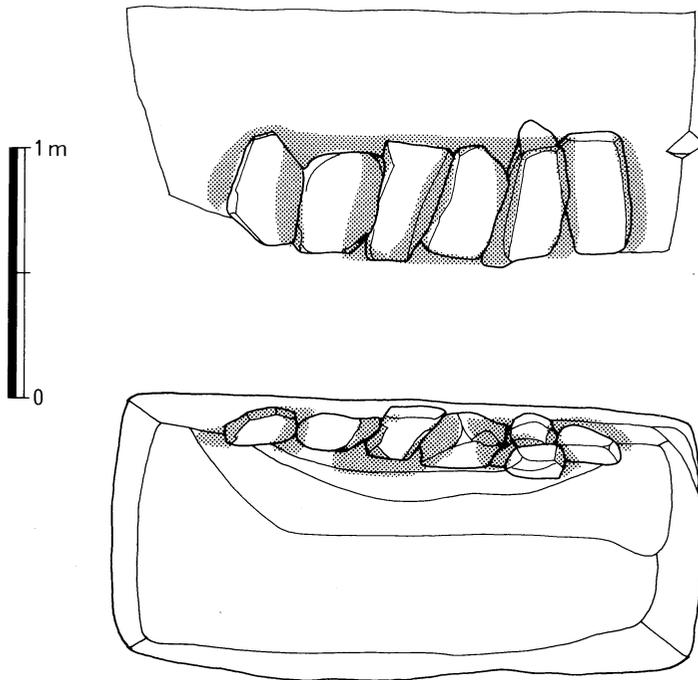
1号はA地区の南西部分で検出した。8号の北東およそ3m、2号の西6m地点にある。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、検出面である赤ホヤ層上面では幅90cm、長さ210cm深さ84cmの規模を持つ。(実際の竪坑掘削面と考えられる黒色土からの深さは110cm前後である。)長軸方向の方位はN-111°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑東北隅は坑底から40cmの位置に三日月状の掘り残しが一段あり、足掛の可能性がある。竪坑の中央部から羨門部にかけて斜に一段落ちており、そのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状は略長方形を呈し、幅158cm、高さ32cm、羨道の奥行20cmの規模を持つ。羨道は開きぎみに玄室に接続していて、左袖部では羨道と玄室の区別が明瞭ではない。羨門部は幅25~30cm、長さ40cm~60cmほどの板石6枚を縦位置に並べて閉塞され、精選のそれほど良好でない白色粘土で目張りされていた。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられている。床面平面形は長方形を呈し、幅44cm、長さ186cm、高さ40cmの規模を持つ。長軸方向の方位はN-110°-Wである。床面には幅36cm、長さ176cm、深さおよそ6cm程の長楕円形を呈するAT火山灰層上面が露出していた。この部分は5cmほどの深さで柔らかく、あるいは屍床を意識して掘り込まれている可能性がある。AT自体は屍床を越えて玄室東端部にまで敷かれていた。既に腐朽していた遺体はAT上に安置されていたと見られ、副葬の直刀一振りと鉄鏃一本はこのAT面に置かれていた。屍床西端にはAT上に径20cm、厚さ10cm程のシラスが敷かれ、その上にさらに赤色顔料が散布されていた。赤色顔料は屍床東端にも散布が見られた。奥壁、両側壁、及び天井長軸方向は湾曲して掘削されていたが、天井部短軸方向には直線的に整形されている。竪坑の埋め戻しは、まず閉塞石を



第3図 崩先遺跡発掘調査区  
及び遺跡周辺地形図 (1 / 1,500)



第4図 崩先地下式横穴群分布図 (1/300)



第5図 地下式横穴1号竪坑平面図・羨門閉塞図(1/30)  
(アミかけ部は粘土による目張り)

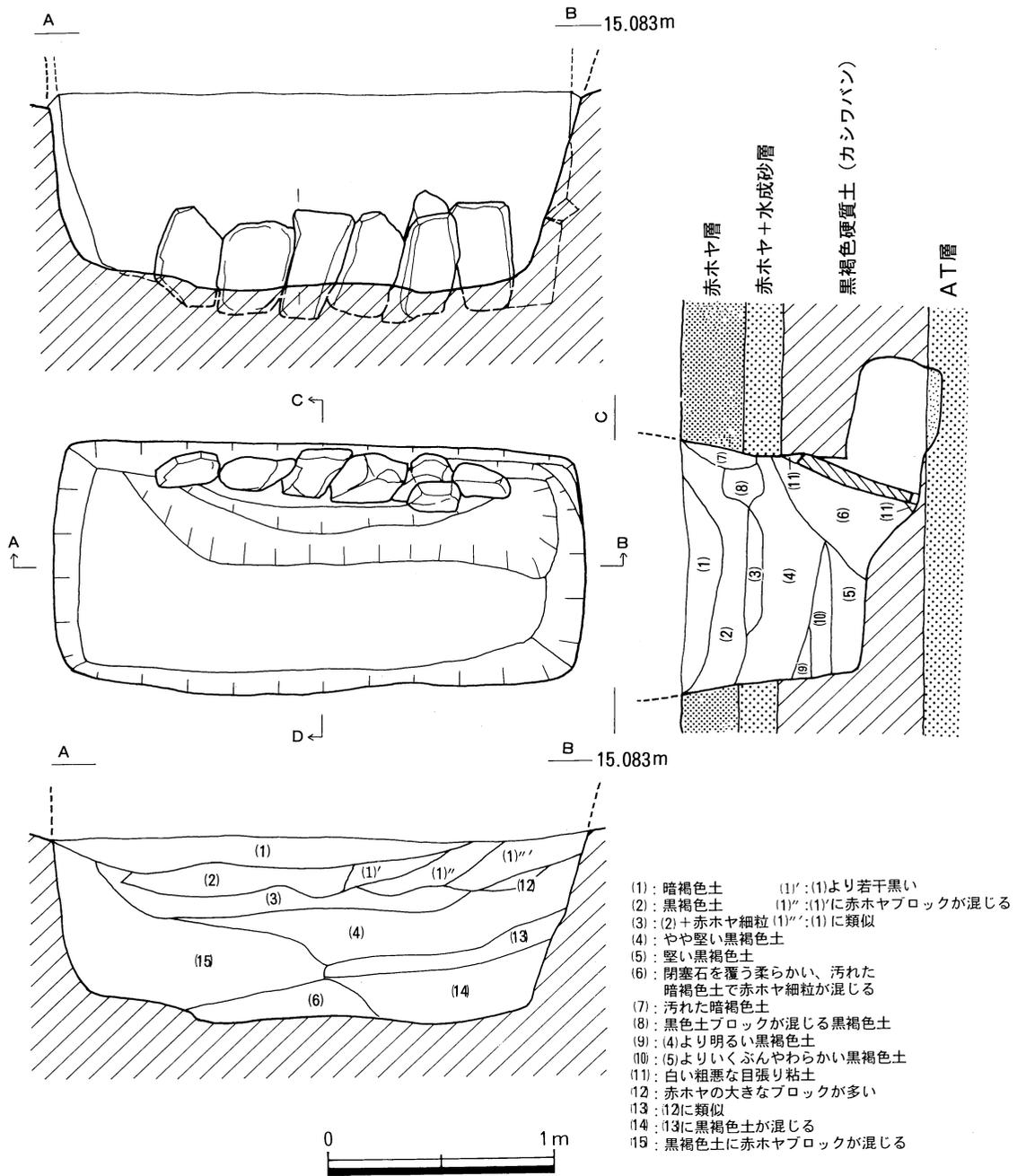
掘削当時の柔らかい暗褐色土で覆った後、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。

遺物(第8図、図版31) 直刀一口と鉄鏃一本が副葬されていた。直刀は玄室のほぼ中央部奥壁際に玄室長軸方向に平行に置かれていた。切先は西、刃部は羨道側に向いていた。全長70.5cm、刃部長58.5cm、最大刃幅2.7cm、背厚0.5~0.7cm、茎長12cm、茎幅2cmを計る。X線観察にとると、関はほぼ直で、目釘穴は茎尻から5.6cmの位置に一つあいている。明確な鑄は見られず平造りと判断される。木質など刀装具の痕跡は肉眼では認められないが、刀身中央部付近に布の錆化した部分が観察される。

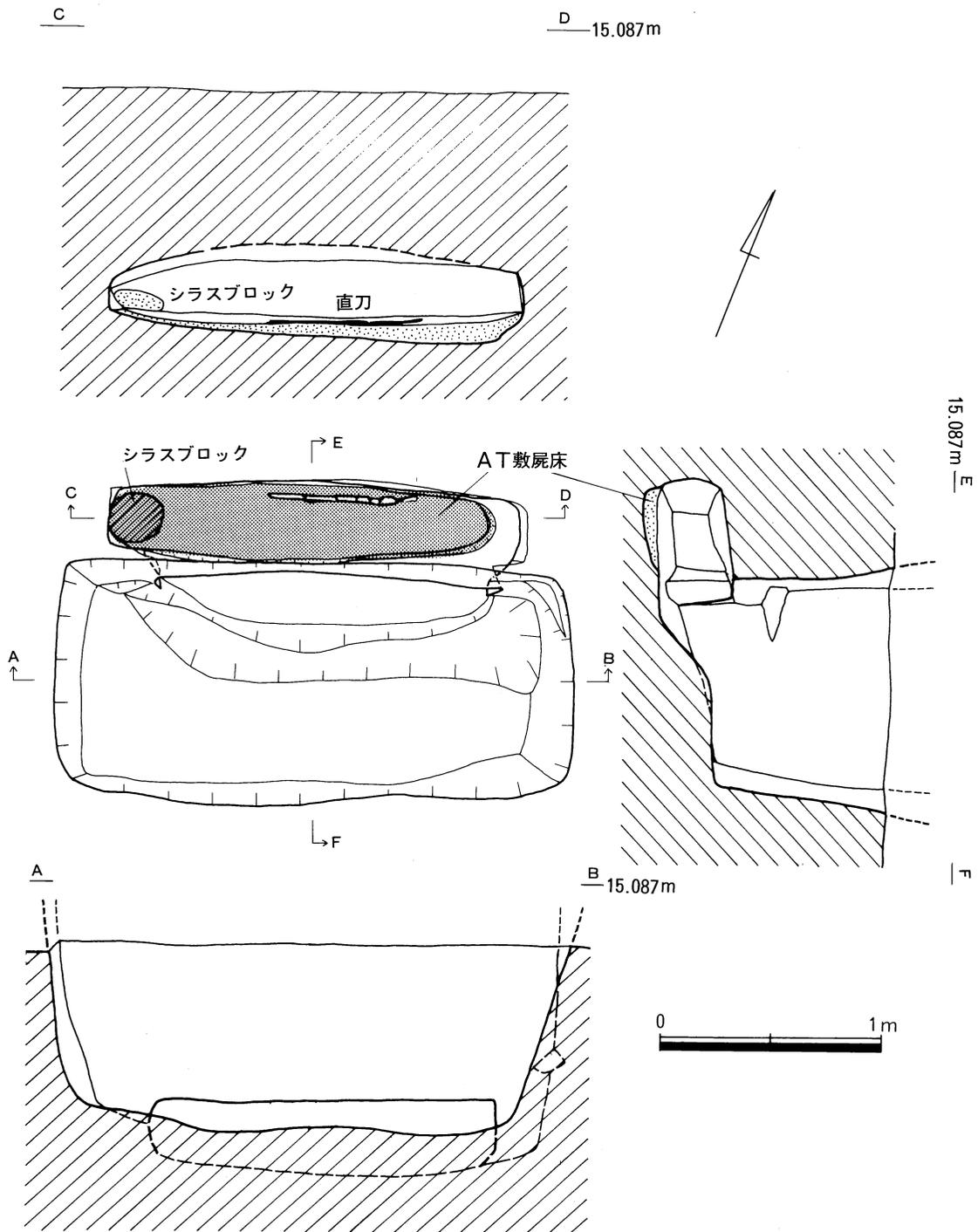
鉄鏃は刃部を西に向けて、直刀の上に重ねて置かれていた。全長16.2cm最大刃部幅3.9cmを計る大型の圭頭鏃である。

## 2. 地下式横穴2号(第9、10図、図版Ⅲ(3)、4(2)、9(3)、10)

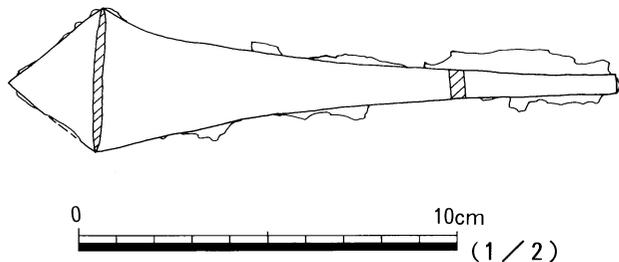
1号の北東およそ8mの地点にある。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、遺構検出面である



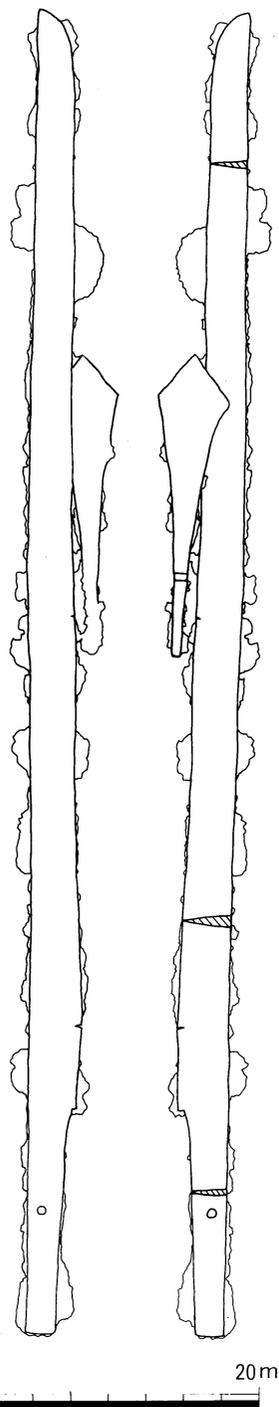
第6図 地下式横穴1号竪坑平面図・断面見通図・土層図 (1/30)



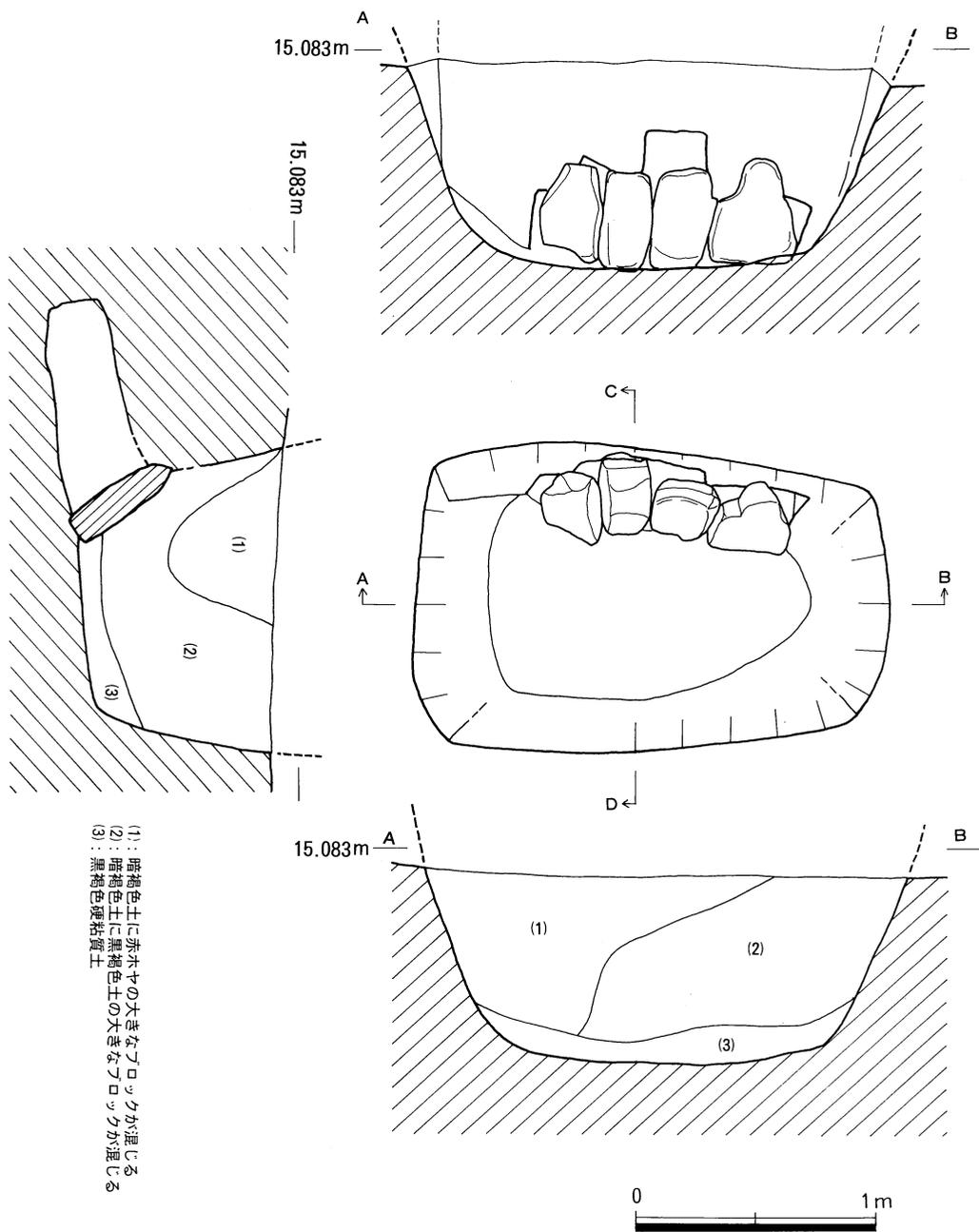
第7図 地下式横穴1号平面図・断面見通図(1/30)



赤ホヤ層上面で幅84cm、長さ132cm、深さ84cmの規模を持つ。  
 (実際の竪坑掘り込み面である黒色土からの深さはおよそ110cm  
 前後と考えられる。)長軸方向の方位はN-80°-Wである。  
 四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。羨門部は斜に一段落ちて  
 おり、そのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状は略長方  
 形を呈し、幅110cm、高さ30cm、羨道の奥行20cmの規模を持つ。  
 羨道はいったん狭まりそこから開きぎみに玄室に接続していて、  
 袖部では羨道と玄室の区別が明瞭ではない。羨門部は幅20~36  
 cm、長さ40cm内外で厚さ10cm程の板石4枚を縦位置に並べて閉  
 塞されていたが、板石は羨門部を完全には覆いきれてなく、粘  
 土による目張りも確認できなかった。玄室は竪坑の北側に平入  
 りで設けられている。床面平面形は、東側が幾分狭まった略長  
 方形を呈し、幅44cm、長さ170cm、高さ28cmの規模を持つ。長  
 軸方向の方位はN-78°-Wである。床面には最大幅45cm、長  
 さ166cm、深さおよそ4cm程の長楕円形を呈する屍床が掘りこ  
 まれていて、そこにAT火山灰が敷かれていた。遺体はAT上  
 に安置されていて、頭蓋骨片が屍床西端に残存していた。副葬  
 の刀子一口は遺体左側と推定される屍床中央奥壁寄りに、長軸  
 平行に置かれていた。奥壁、両側壁、及び天井短軸方向はほぼ  
 直線的に掘削されていたが、天井部長軸方向では西端から中央  
 部にかけて水平に整形しそこで一段高くし、東端まで斜に削ら  
 れている。玄室の掘削には幅7cm程の刃部が真っ直ぐで鋭利な  
 工具が使用され、掘削の方向は、上下ではなく  
 水平である。打撃による掘削のため、玄室壁に  
 はギザギザ掘削痕が残っている。おそらく工具  
 として鉄斧が使用されたと考えられる。竪坑の

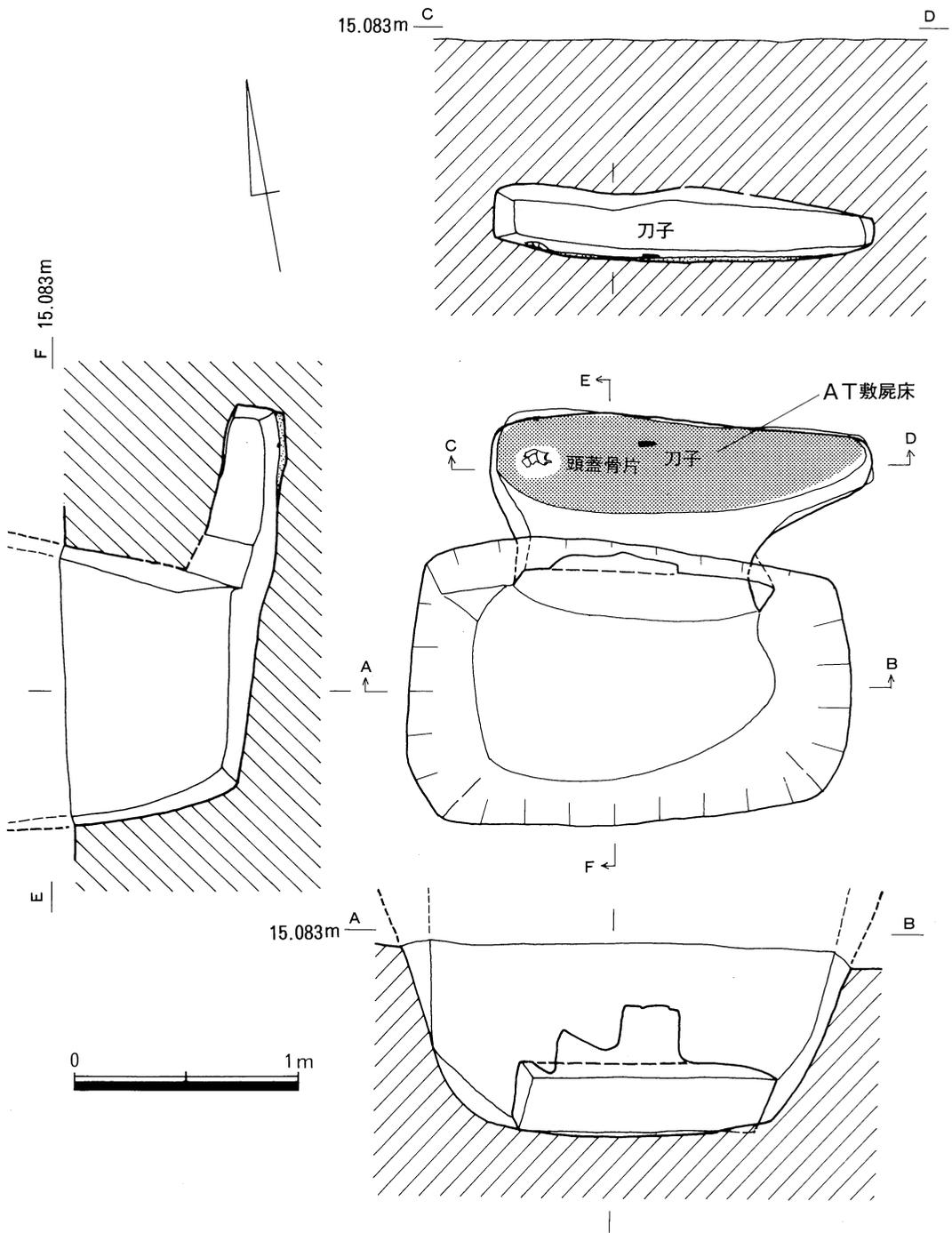


第8図 地下式横穴1号出土直刀・鉄鍬  
 (1/4)



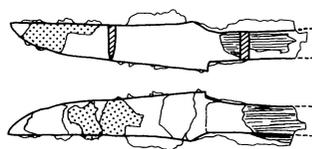
- (1): 暗褐色土に赤ホヤの大きなフロックが混じる
- (2): 暗褐色土に黒褐色土の大きなフロックが混じる
- (3): 黒褐色硬粘質土

第9図 地下式横穴2号竖坑平面図・断面見通図・土層図 (1/30)



第10图 地下式横穴2号平面图·断面見通图 (1/30)

埋め戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。



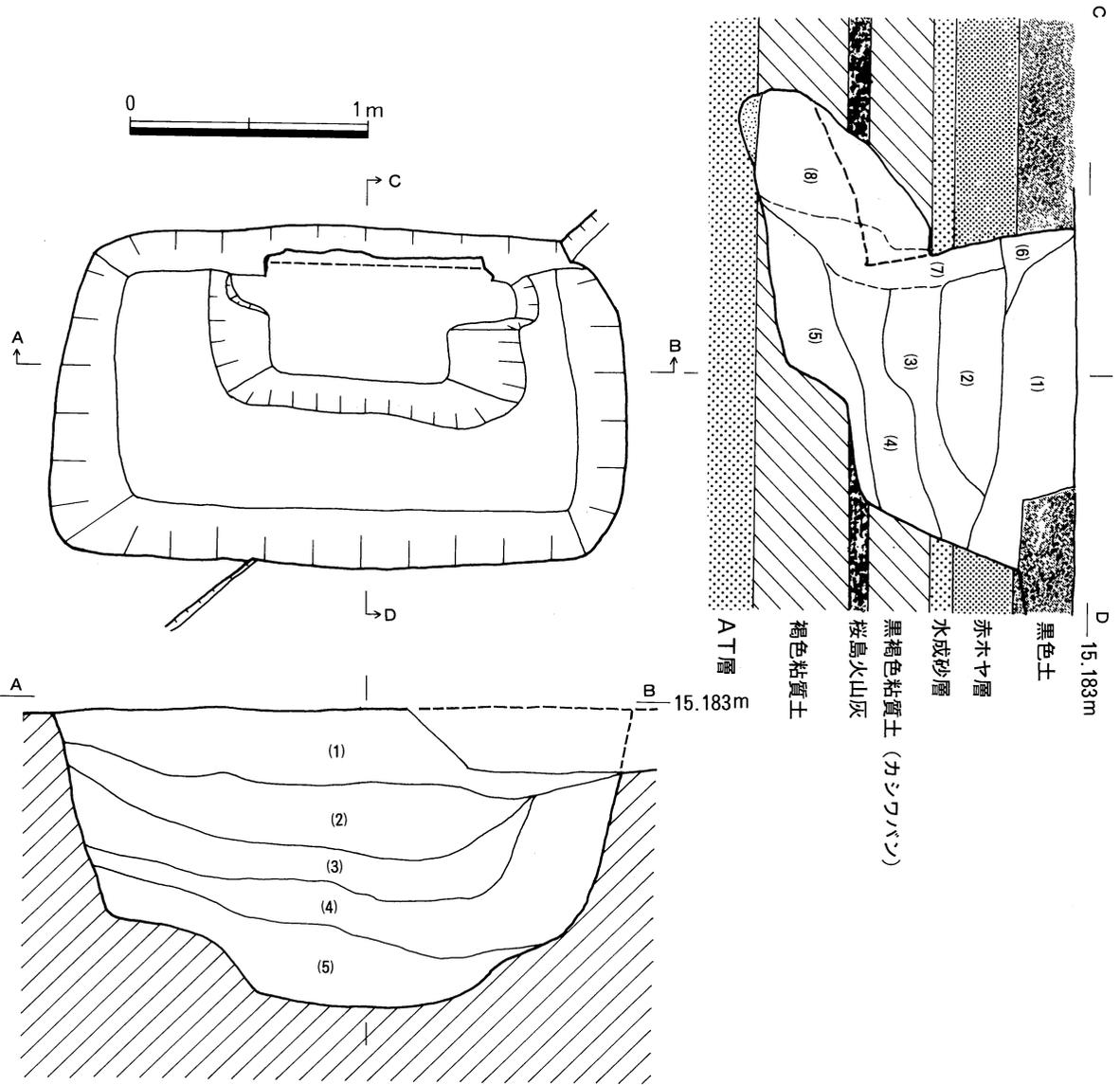
遺物（第11図、図版31） 玄室中央から幾分西で奥壁寄りの位置に刀子1口が、切先を足、刃を遺体側に向けて置かれていた。茎尻を欠損し

第11図 地下式横穴2号出土刀子（1/2）

ており、現存長7.9cm、刃部長5.2cm、最大刃部幅1.3cm、茎部幅0.8cmを計る。両関で刃部は直角、背部は斜角と見られる。茎部には木質が、刃部には錆化した布が遺存している。

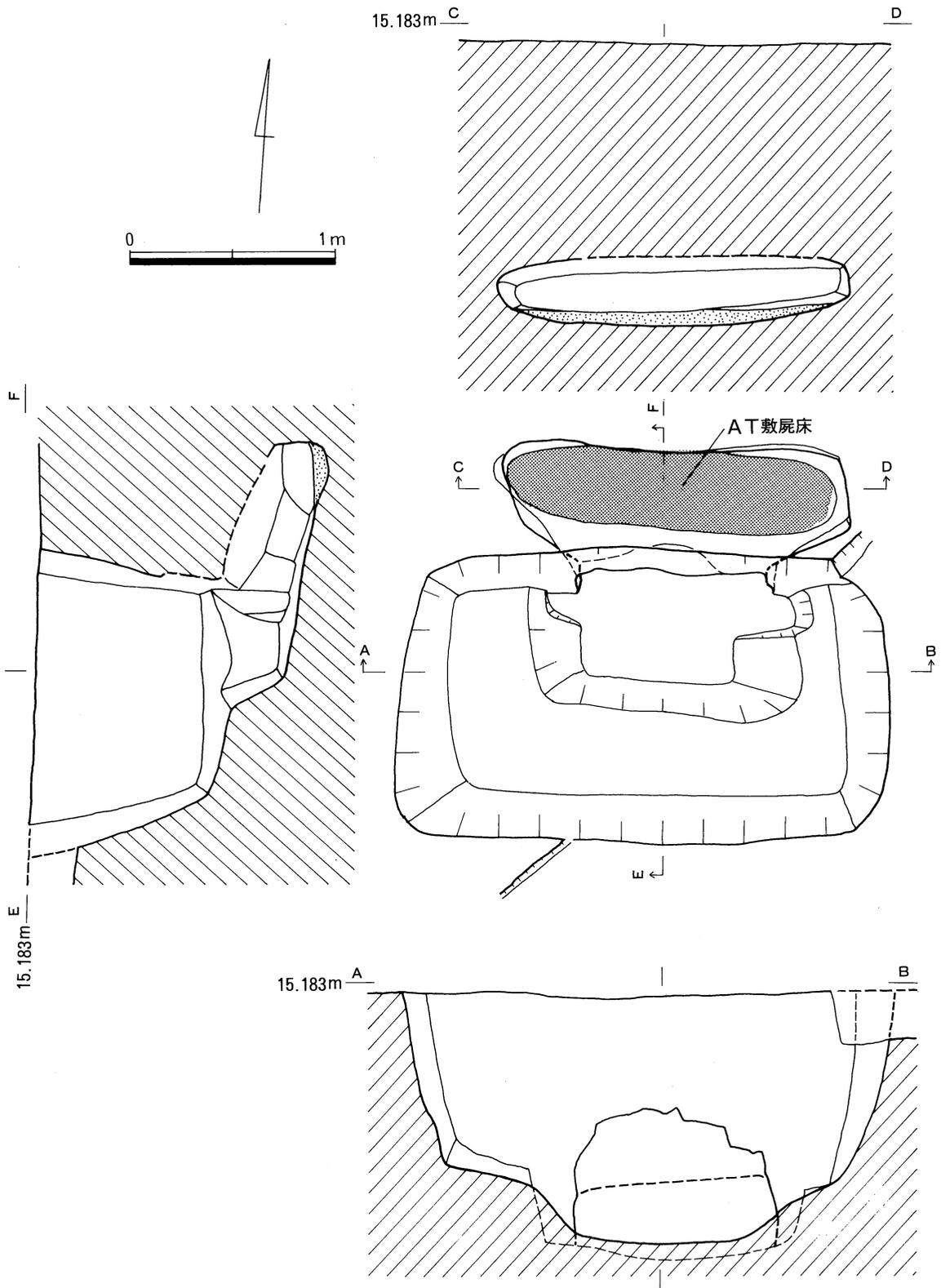
### 3. 地下式横穴3号（第12、13図、図版IV(3)、4(2)、5(1)、11、12、13(1)）

2号の東およそ6mの地点にある。調査した地下式横穴の内、玄室が南側に付く唯一のものである。本来の竪坑掘削面から調査できたので、竪坑規模はオリジナルに近い。竪坑の掘削は耕作土直下の黒色土から確認された。柔らかい赤ホヤ層や水成砂層を掘り抜き、堅い黒褐色土で竪坑一段目の底部とし、さらにその下の褐色粘質土を竪坑二段目底部と羨道とする。玄室の壁と天井もこの層位に掘られている。玄室の床面はAT上面まで掘り下げる。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、幅100cm、長さ192cm、深さ94cmの規模を持つ。（竪坑二段目までの深さは約137cmである。）長軸方向の方位はN-94°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にかけてさらに一段掘り込みがある。長さ140cm、幅60cm、深さ約30cmの掘り込みの床面は、そのまま玄室へ下りながら続いている。二段目の掘り込みの羨門部側左右に、長さ18cm、幅10cm、深さ40cmほどの張り出しが見られた。板もしくは丸太など木質の閉塞施設の下端を差込む溝と考えられる。羨門部の立面形状は、崩落のためはっきりしないが、略長方形を呈していたと推定される。羨門は推定で幅100cm、高さ40cm、羨道の奥行16cmの規模を持つ。羨道は開きぎみに玄室に接続していて、右袖部では羨道と玄室の区別が明瞭ではない。玄室は竪坑の南側に平入りで設けられている。床面平面形は略長方形を呈し、幅60cm、長さ166cm、高さ32cmの規模を持つ。長軸方向の方位はN-93°-Wである。床面には幅40cm、長さ160cm程の長楕円形にAT火山灰層上面が露出されていた。AT火山灰は深さ8cm程柔らかい部分があり、屍床として掘り込まれた可能性が高い。玄室の天井部は崩落が見られたがゆるやかに湾曲していたと考えられる。奥壁、両側壁、及び天井長軸方向は湾曲して掘削されていた。竪坑の埋め戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。木質の閉塞施設の腐食によると見られる上部および側面からの土の流入が観察された。



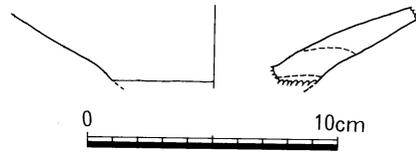
- (1): 暗褐色土
- (2): 黒褐色土に赤ホヤ細粒が混じる
- (3): 黒褐色土に赤ホヤブロックと黒色土が混じる
- (4): 黒褐色土に赤ホヤブロックと暗褐色粘質土の大きなブロックが混じる
- (5): 暗褐色粘質土
- (6): 黒褐色土
- (7): 2～4層の細粒が流入
- (8): 天井崩壊土と竪坑埋土流入土

第12図 地下式横穴3号竪坑平面図・土層図 (1/30)



第13图 地下式横穴3号平面图・断面見通图 (1/30)

遺物(第14図 図版32) 確かに3号に伴うとは限らないが、竪坑外西側から高坏の受け部から口縁部にかけての破片が出土した。出土層位は竪坑が掘りこまれたと想定される、黒色土と褐色土の境付近である。口縁部と受け部の接合面で変換点を持つと思われ、比較的古い様相を持つと考えられるが、小破片であり、はっきりした時期は不明である。

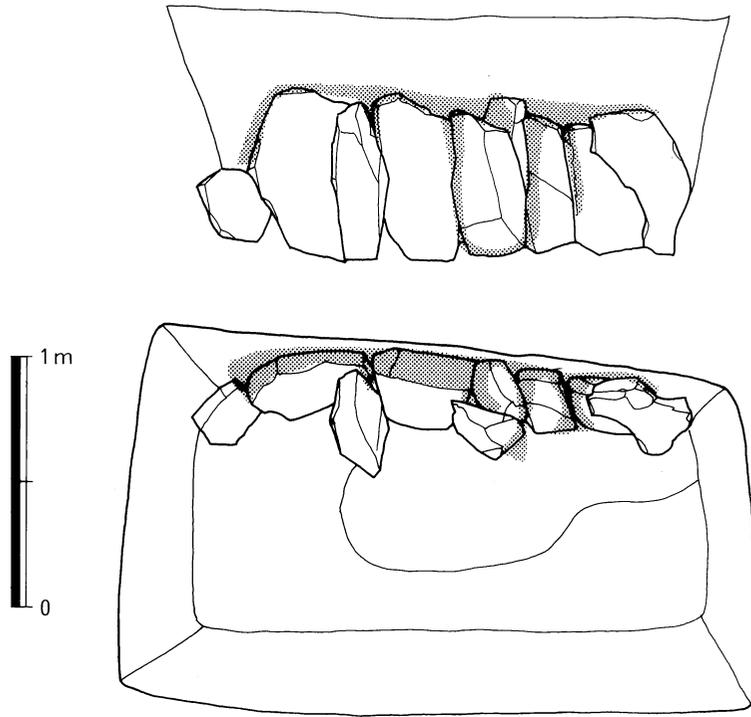


第14図 地下式横穴3号  
周辺出土高坏(1/3)

#### 4. 地下式横穴4号(第15~17図、図版Ⅲ(4)~(6)、Ⅳ(4)、5(1)、13(2)、(3)、14~16(1))

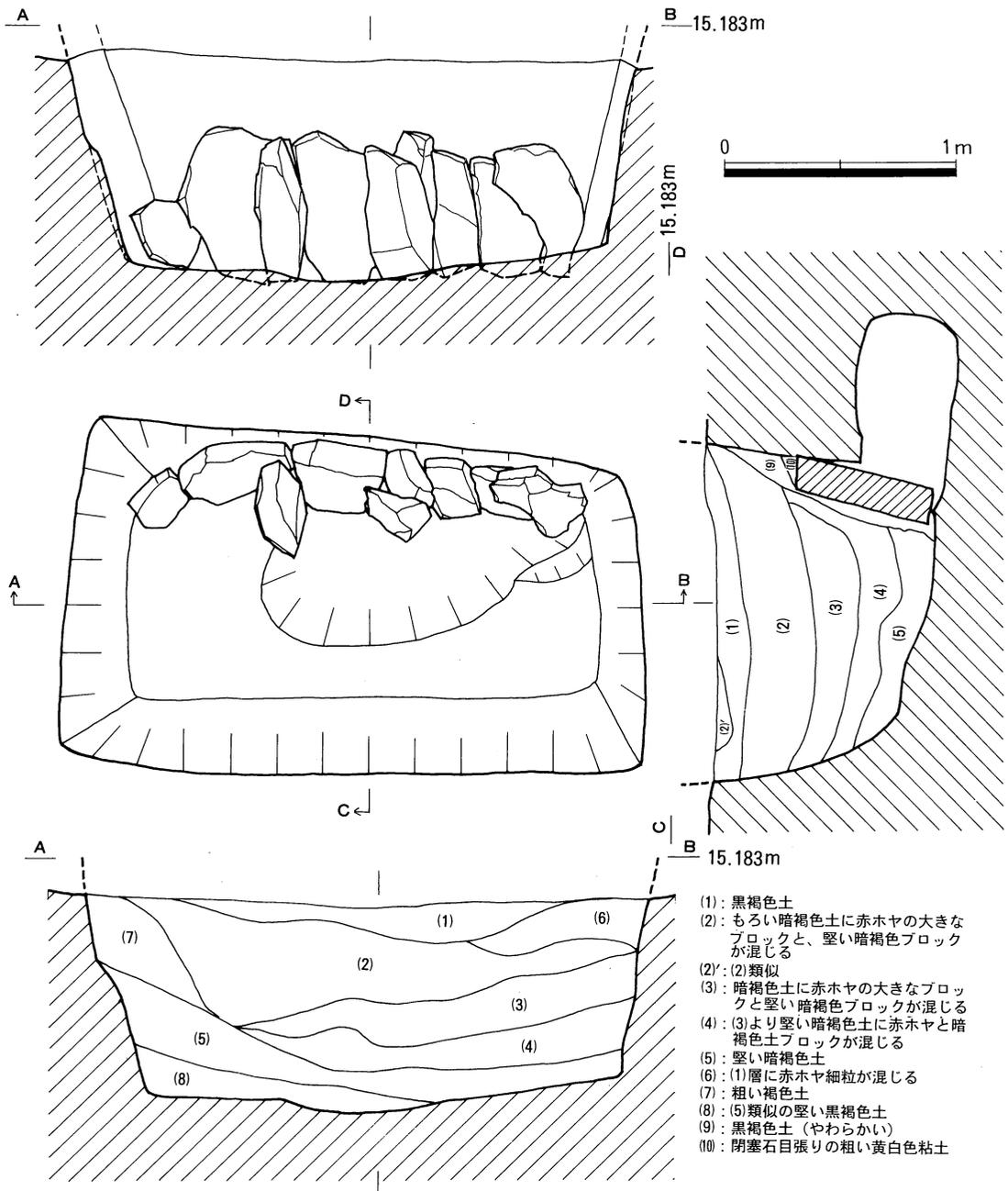
3号の北およそ3mの地点にある。竪坑の平面形は長方形を呈しているが東側が西側にくらべて20cmほど幅が狭い。竪坑は遺構検出面である赤ホヤ層上面で幅150cm、長さ250cm、深さ86cmの規模を持つ。(本来の竪坑掘削面と考えられる黒色土からの深さはおよそ110cm前後と見られる。)長軸方向の方位はN-108°-Wである。四隅の稜線は比較的明瞭である。竪坑の中央部から羨門部にかけて斜に一段落ちており、さらに羨道部で8cm程下がりそのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状は略長方形を呈しているが左側が10cm程高い。羨門は幅122cm、高さ中央で36cm、羨道の奥行28cmの規模を持つ。羨道は開きぎみに玄室に接続していて、左袖部では羨道と玄室の区別が明瞭ではない。羨門部は幅25~50cm、長さ40cm~60cmほどの板石7枚を縦位置に並べて閉塞されその隙間を塞ぐ形でさらに2枚の板石が置かれていた。閉塞石は、精選のそれほど良好でない白色粘土で目張りされていた。閉塞石の両端は、壁際の溝に下端部が収っていた。この溝は、左側が幅約10cm、長さ約60cm、竪坑底部からの深さ約15cm、右側が幅約30cm、長さ約30cm、竪坑底部からの深さ約15cmの規模を持つ。その形状は、木材と考えられる閉塞施設下部に掘られる溝とほぼ同一であり、閉塞石と溝を合わせ持つ地下式横穴は4号だけである。あるいは当初は木材による閉塞が予定されていたのかもしれない。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられている。床面平面形は長方形を呈し、幅44cm、長さ188cm、高さ44cmの規模を持つ。玄室は、羨道部から見て足許である東側が長く、幅も狭い。その部分では主軸方向より幾分外側に向いている。長軸方向の方位はN-106°-Wである。床面には幅45cm、長さ175cm程の、西側で長方形、東側で長楕円形を呈するAT火山灰層上面の露出が見られた。AT面は、深さ3cm程が柔らかく、屍床として掘り込まれた可能性がある。発掘した人骨のうち、最も残りの良い遺体は頭位を西にしてAT上に安置されていた。副葬の刀子一口はこのAT上面で左体側腰骨下に置かれていた。玄室天井及び壁は幅4.7cmの刃部が真っ直ぐな、鉄斧と推定される掘削具の掘削痕が一面に残っていた。奥壁及び天井軸方向は湾曲して掘削されて

15.183m —



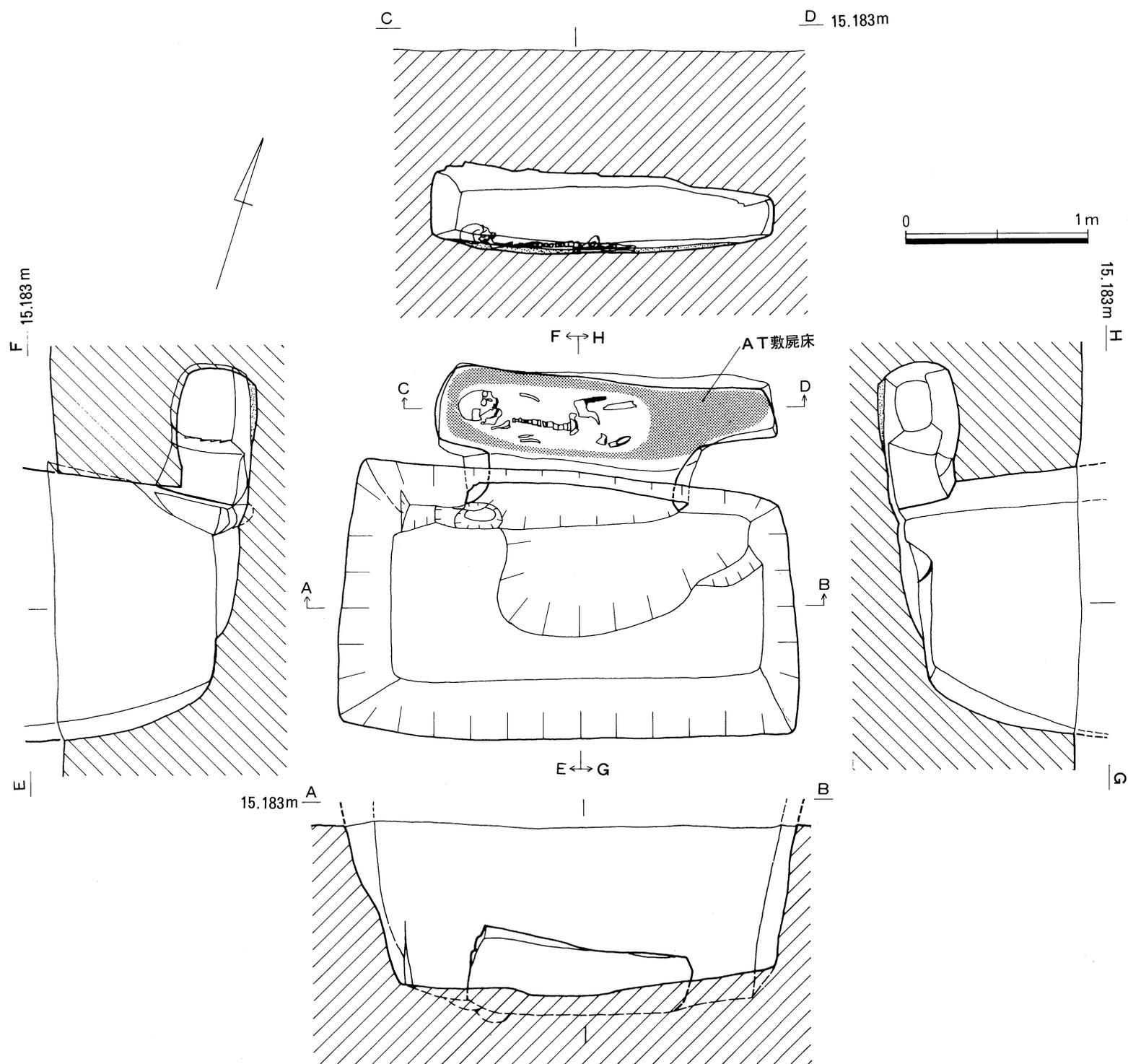
第15図 地下式横穴4号竪坑平面図・羨門閉塞図（1/30）  
（※アミかけ部は粘土による目張り）

いたが、天井部長軸方向は直線的ではあるが幾つかの段差を持って整形されている。掘削の方向は、玄室の中央から両端に向っている。壁は床面と平行に削られていた。竪坑の埋め戻しは、まず閉塞石を掘削当時の柔らかい黒褐色土で覆った後、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。



- (1): 黒褐色土
- (2): もろい暗褐色土に赤ホヤの大きなブロックと、堅い暗褐色ブロックが混じる
- (2)′: (2)類似
- (3): 暗褐色土に赤ホヤの大きなブロックと堅い暗褐色ブロックが混じる
- (4): (3)より堅い暗褐色土に赤ホヤと暗褐色土ブロックが混じる
- (5): 堅い暗褐色土
- (6): (1)層に赤ホヤ細粒が混じる
- (7): 粗い褐色土
- (8): (5)類似の堅い黒褐色土
- (9): 黒褐色土 (やわらかい)
- (10): 閉塞石目張りの粗い黄白色粘土

第16図 地下式横穴4号竪坑平面図・断面見通図・土層断面図 (1/30)



第17図 地下式横穴4号平面図・断面見通図(1/30)

遺物(第18図、図版31) 玄室のほぼ中央部、左側腰骨の下に、切先を足方向に刃部を外側に  
 に向けて置かれていた。茎尻と切先を欠損しており、現存長は13.8cmである。推定刃部長10cm最大  
 刃部幅は関部で2.3cm計る。両関で背刃共に斜行している。身は関部へ緩く外反して広がっ  
 ている。茎部は狭まりながら茎尻に至る。刃部には銹化した布の付着が見られ、茎部には紐状  
 のものが巻かれている痕跡が認められる。



## 5. 地下式横穴 5号

(第19図、図版IV(1)、16(2)、17、18(1))

4号の北東およそ6mの地点にある。  
 竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、遺構  
 検出面である赤ホヤ層上面で、幅108cm、  
 長さ182cm、深さ50cmの規模を持つ。(本  
 来の竪坑掘削面と考えられる黒色土から  
 の深さは約70cm程である。)長軸方向の



第18図 地下式横穴4号出土刀子(1/2)

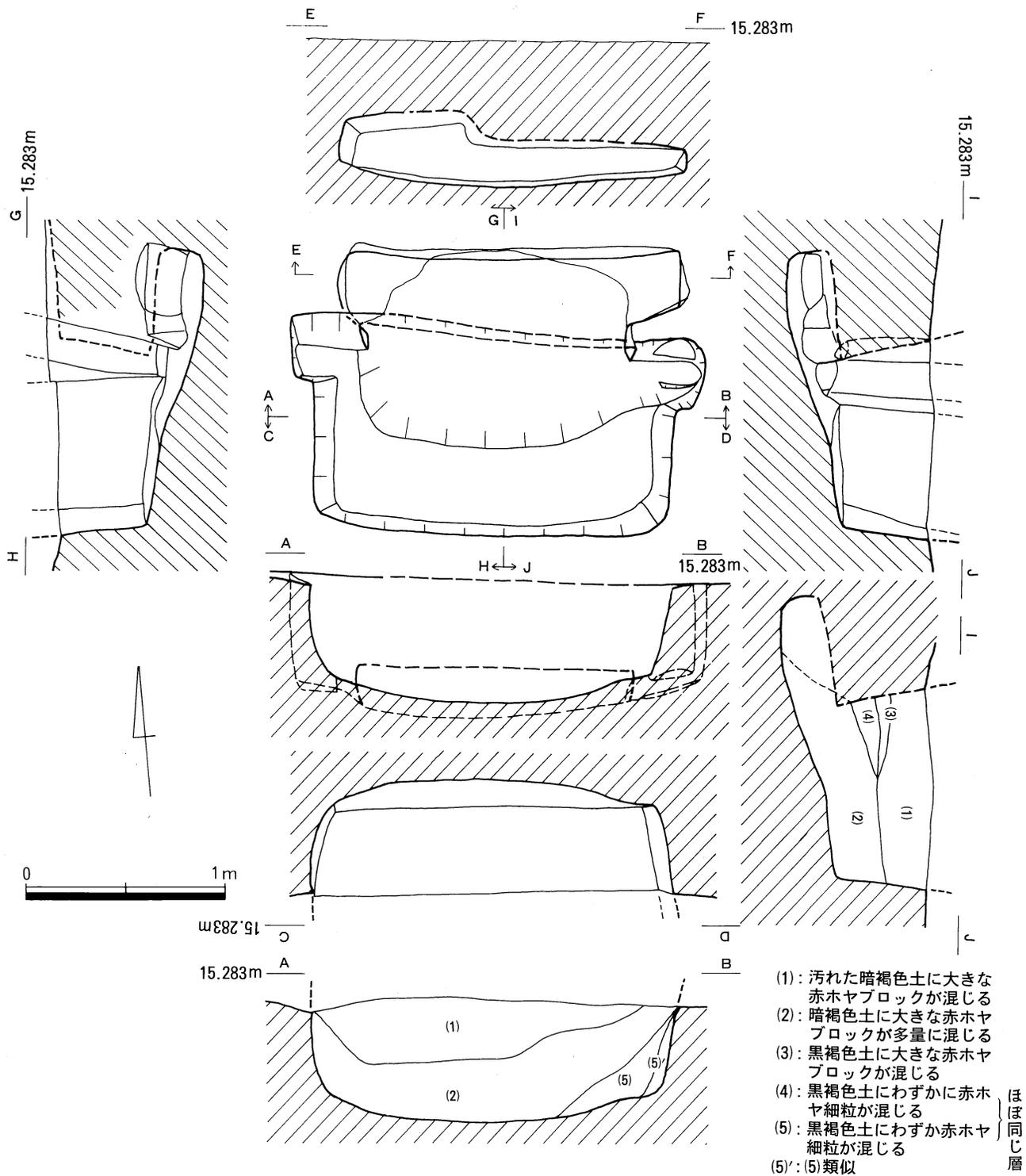
方位はN-84°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にか  
 けて斜に一段落ちており、そのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状はすでに崩壊して  
 いたためははっきりしないが、略長方形を呈していたと考えられ、その復元規模は幅140cm、高  
 さ24cm、羨道の奥行16cm程度である。竪坑の北壁部では閉塞施設である溝が両端に掘削されて  
 いるが、検出面での幅30~36cmのこの溝は竪坑床面より深くは掘削されておらず、竪坑より横  
 10~15cm張り出すことで、閉塞材の押えの機能を確保している。羨道は右袖部で開きぎみに玄  
 室に接続していて、羨道と玄室の区別が明瞭ではない。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられ  
 ている。床面平面形は略長方形を呈し、幅40cm、長さ172cm、高さは天井部がかなり崩壊して  
 いたので推定値になるが、西で約36cm、中央部で22cm、東側で16cm程の規模を持つ。長軸方向  
 の方位はN-86°-Wである。玄室は羨道から見て東側が長く狭い。その部分では主軸方向よ  
 り幾分外に振って掘られている。この地下式横穴では、玄室内に屍床を掘込んだり、特別に火  
 山灰を敷いた痕跡は認められなかった。奥壁、両側壁、及び天井長軸方向の掘削はそれほど湾  
 曲しておらず、ほぼ直線的に掘削されていた。天井部短軸方向は崩壊のため判然としない。玄  
 室の掘削には、刃部幅7cmほどの直線的な刃先を持つ鉄斧と思われる工具が使用され、掘削の  
 痕跡が明瞭に認められた。玄室天井は、現状では東から中央にかけてほぼ水平で、西側で一段  
 高くなっているが、その部分には掘削痕が無く、天井が直線的であった可能性もある。竪坑の  
 埋め戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入  
 していると考えられる。遺体の遺存は無く、副葬品等も皆無であった。

## 6. 地下式横穴 6号 (第20図、図版18(2)、19、20、21(1))

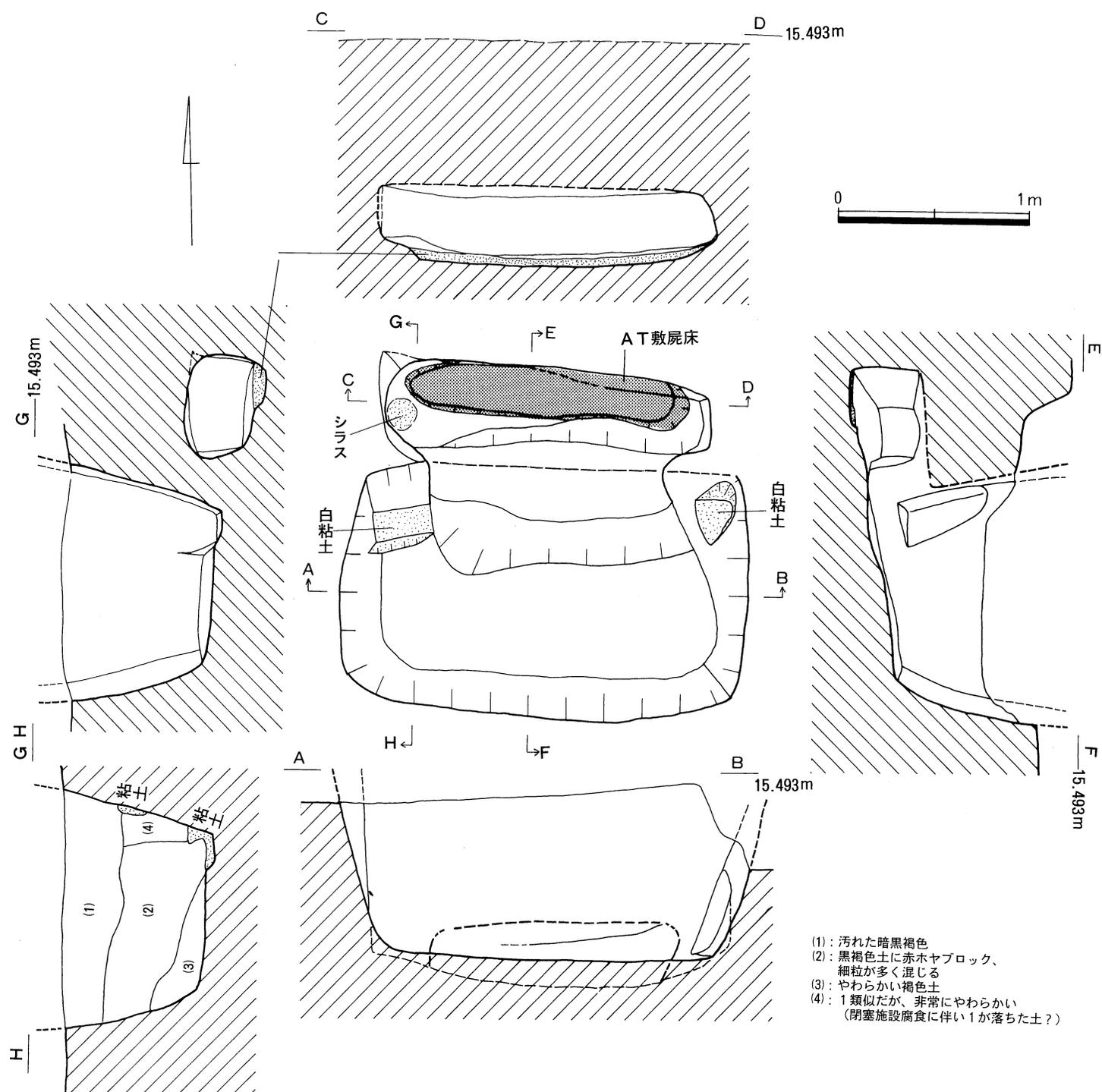
5号の北およそ8mの地点にある。玄室の天井部は半分崩壊していた。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、遺構検出面である赤ホヤ層上面で、幅130cm、長さ215cm、深さ94cmの規模を持つ。(本来の竪坑掘削面と考えられる黒色土からの深さは、およそ125cm程である。)長軸方向の方位はN-88°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にかけて斜めに一段落ちており、そのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状は崩壊のためはっきりしないが、おそらく、略長方形を呈しているだろうと思われる。羨門の幅124cm、高さは推定24cm、羨道の奥行24cmの規模を持つ。木蓋をはめ込んだと思われる閉塞施設の溝が竪坑羨門西側壁際では竪坑掘り込みで、東側では竪坑壁掘り込みとして掘削されていた。この中には目張りと思われる白色粘土が充満していた。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられている。床面平面形は略長方形を呈しているが西側では丸くなっている。玄室は幅44cm、長さ172cm、高さ40cmの規模を持つ。長軸方向の方位はN-87°-Wである。玄室は羨道から見て、東側が長く狭い。床面には幅28cm、長さ150cm程の長楕円形AT火山灰層上面が露出していた。この部分は深さ2~6cm程が柔らかく、屍床として掘削された可能性が高い。玄室西端の屍床外にシラスの散布が認められた。奥壁、両側壁、及び天井長軸方向はほぼ直線的に掘削されていたが、西側天井部短軸方向では湾曲して整形されている。竪坑の埋め戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられるが、木蓋の腐朽したと見られる痕には上部の埋土がスカスカの状態で落ち込んでいた。また竪坑羨道側の壁には目張りと思われる白色粘土が一部遺存していた。遺体の遺存は無く、副葬供献遺物も見られなかった。

## 7. 地下式横穴 7号 (第21図、図版Ⅲ(7)、IV(5)、5(2)、21(2)、22(1))

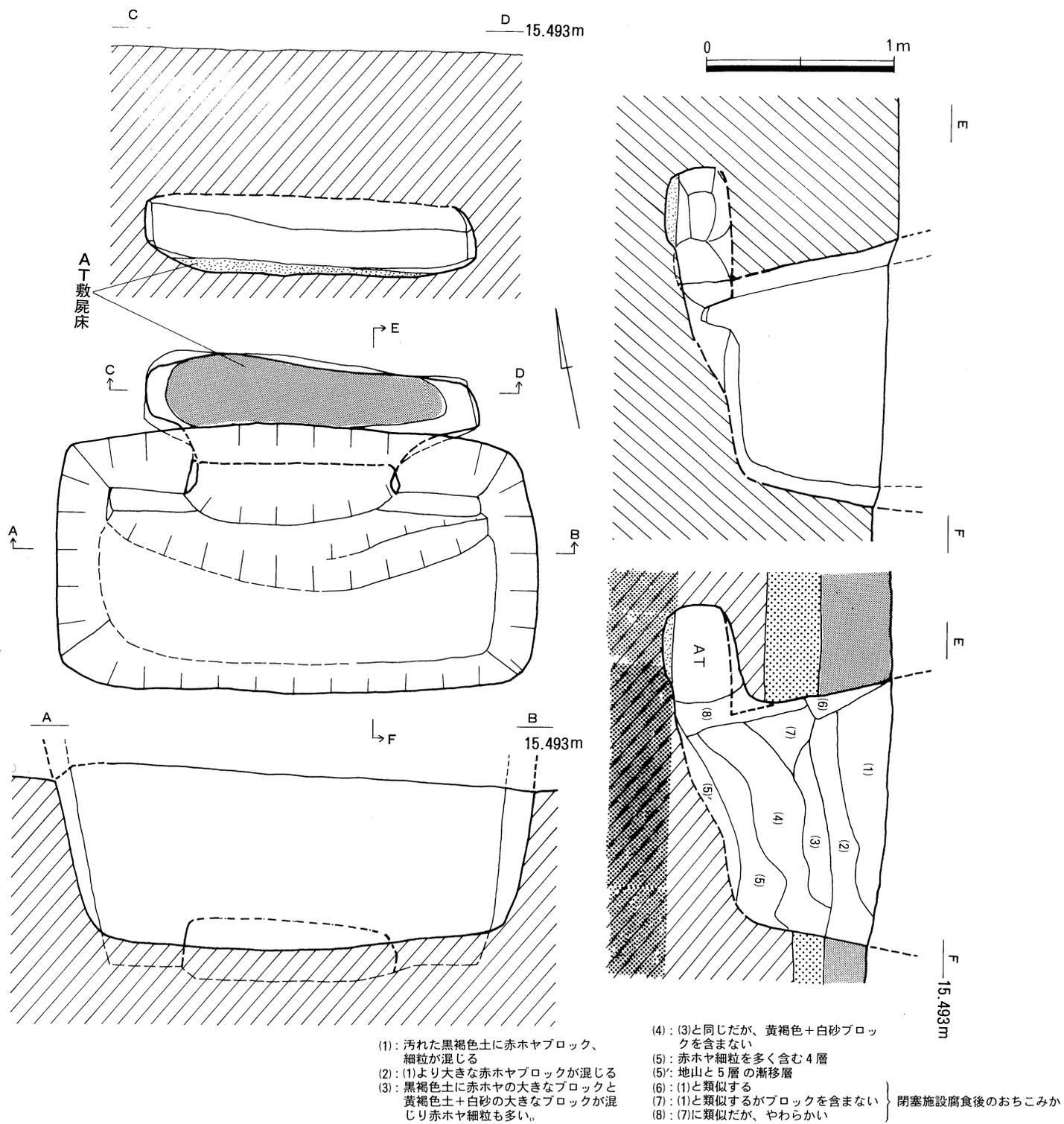
6号の東およそ7mの地点にある。竪坑は柔らかい黒色土や赤ホヤ層を掘り抜き、褐色粘質土を底面としている。羨道、玄室もこの層位に掘られている。玄室床面はAT層まで掘られていた。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、遺構検出面である赤ホヤ層上面で、幅145cm、長さ257cm、深さ82cmの規模を持つ。(本来の竪坑掘削面と考えられる黒色土からの深さは、およそ100cm前後である。)長軸方向の方位N-78°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にかけて孤状に、斜に一段落ちており、そのまま玄室へ続いている。羨門部の上部は崩落していたが、推定立面形状は略長方形を呈していたと思われる。羨門は幅112cm、推定高さ32cm、羨道の奥行16cmの規模を持つ。羨道は左袖部では開きぎみに玄室に接続していて、羨道と玄室の区別が明瞭ではない。羨門部の閉塞は丸太あるいは割板等の



第19図 地下式横穴5号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)



第20図 地下式横穴6号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)

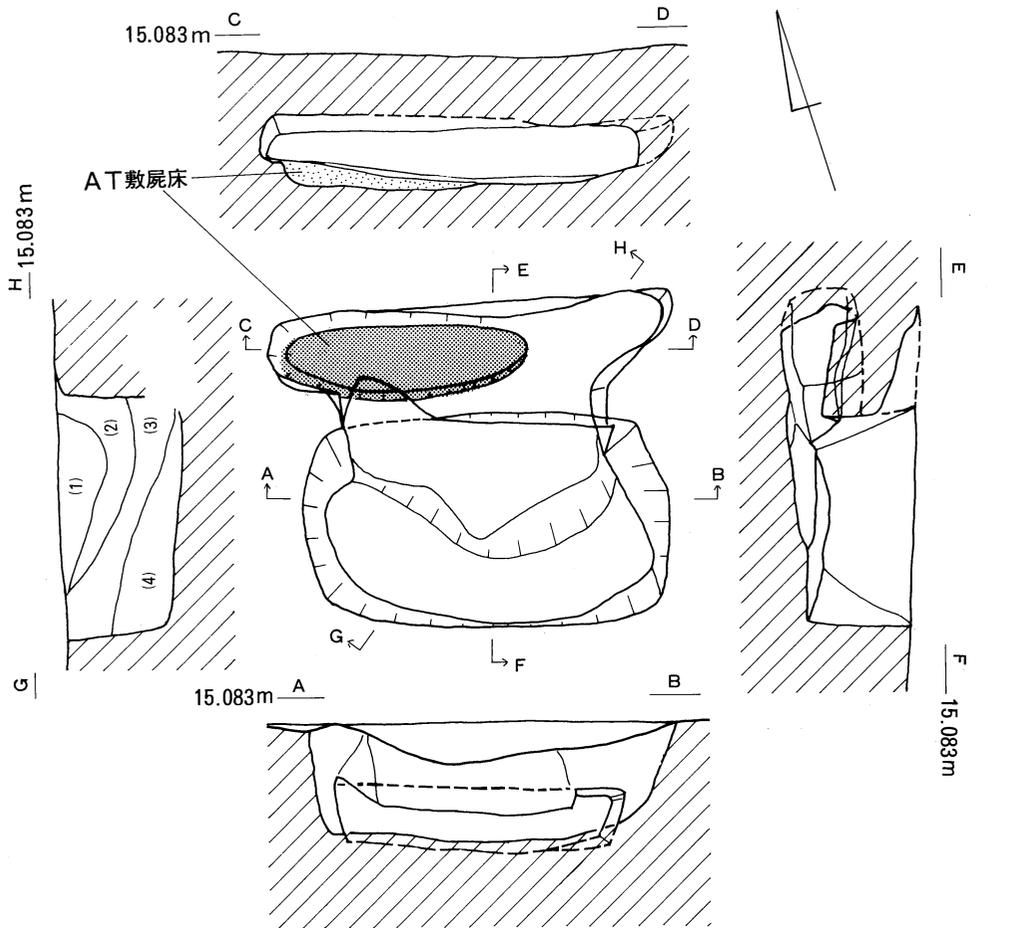


第21図 地下式横穴7号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)

木材と思われ、竪坑羨門側の壁際には、それらをはめ込んだと見られる、幅15cm、長さ50cm、深さ15cm程の溝が掘削されていた。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられている。床面平面形は西側が幾分広い略長方形を呈し、幅50cm、長さ176cm、高さ44cm程度の規模を持つ。長軸方向の方位はN-77°-Wである。床面には幅36cm、長さ150cm程の長楕円形を呈するAT火山灰層上面の露出が見られ、AT面は深さ2~6cm程度が柔らかく、屍床として掘られた可能性がある。奥壁、東側壁、及び天井東西端は湾曲して掘削されていたが、天井部長短軸方向は幾分崩落が見られ、はっきりした形状はわからない。ほぼ直線的に掘削されていると見られるが、奥壁の上部稜線が西端部から中央にかけた斜に下がり、そこから水平に東端部に続いているので、西側天井部が高かった可能性もある。玄室は、羨道から見て東側が長く狭い。竪坑の埋め戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。閉塞材のあったと推定される部分は、材の腐朽に伴って落込んだと見られる上部埋土類似の土が縦方向に堆積していた。遺体の遺存は無く、副葬供献遺物は皆無であった。

## 8. 地下式横穴 8号 (第22図、図版IV(1)、22(2)、(3))

1号の北西およそ3m、9号の東4mの地点にある。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈しているが短辺は胴張りで丸い。竪坑は、遺構検出面である赤ホヤ層上面で、幅86cm、長さ146cm、深さ42cmで調査した地下式横穴の中で最小の規模を持つ。(本来の竪坑掘削面と見られる黒色土からの深さは約60cmである。)長軸方向の方位はN-72°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にかけて5~6cmほど一段落ちており、羨道部で幾分高くなって玄室へ続いている。羨門部の立面形状は略長方形を呈していると考えられるが、現状は土圧によって中央部がずり落ちている。羨門部は幅103cm、高さ24cm、羨道の奥行22cmの規模を持つ。羨門部は木材によって閉塞されていたと思われるが、閉塞施設に伴う溝などは検出できなかった。玄室は竪坑の北側に平入りで設けられている。床面平面形は長楕円形を呈し、羨道から見て、東側が長く狭い。その部分では、長軸方向とは角度をもって掘削されている。玄室は幅34cm、長さ158cm、高さ30cmと調査地下式横穴中最小の規模を持つ。長軸方向の方位はN-77°-Wである。床面には幅30cm、長さ97cm、深さおよそ10cm程の長楕円形を呈する屍床が掘りこまれていてそこにAT火山灰が敷かれていた。玄室は奥壁、西側壁及び天井は直線的に掘られていたが、東側壁は湾曲していた。竪坑の埋め戻しは、自然層序に近い順序で埋土の層位が見られるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられる。玄室、竪坑共、供献副葬遺物は皆無であった。



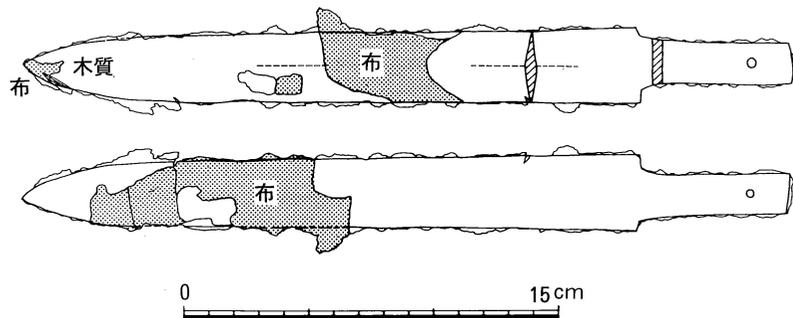
- (1): よごれた暗褐色土
- (2): 黒褐色土に赤ホヤブロックが混じる
- (3): 褐色土に赤ホヤブロックが混じる
- (4): 水成砂と黒褐色土の混じった土

第22図 地下式横穴 8号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)

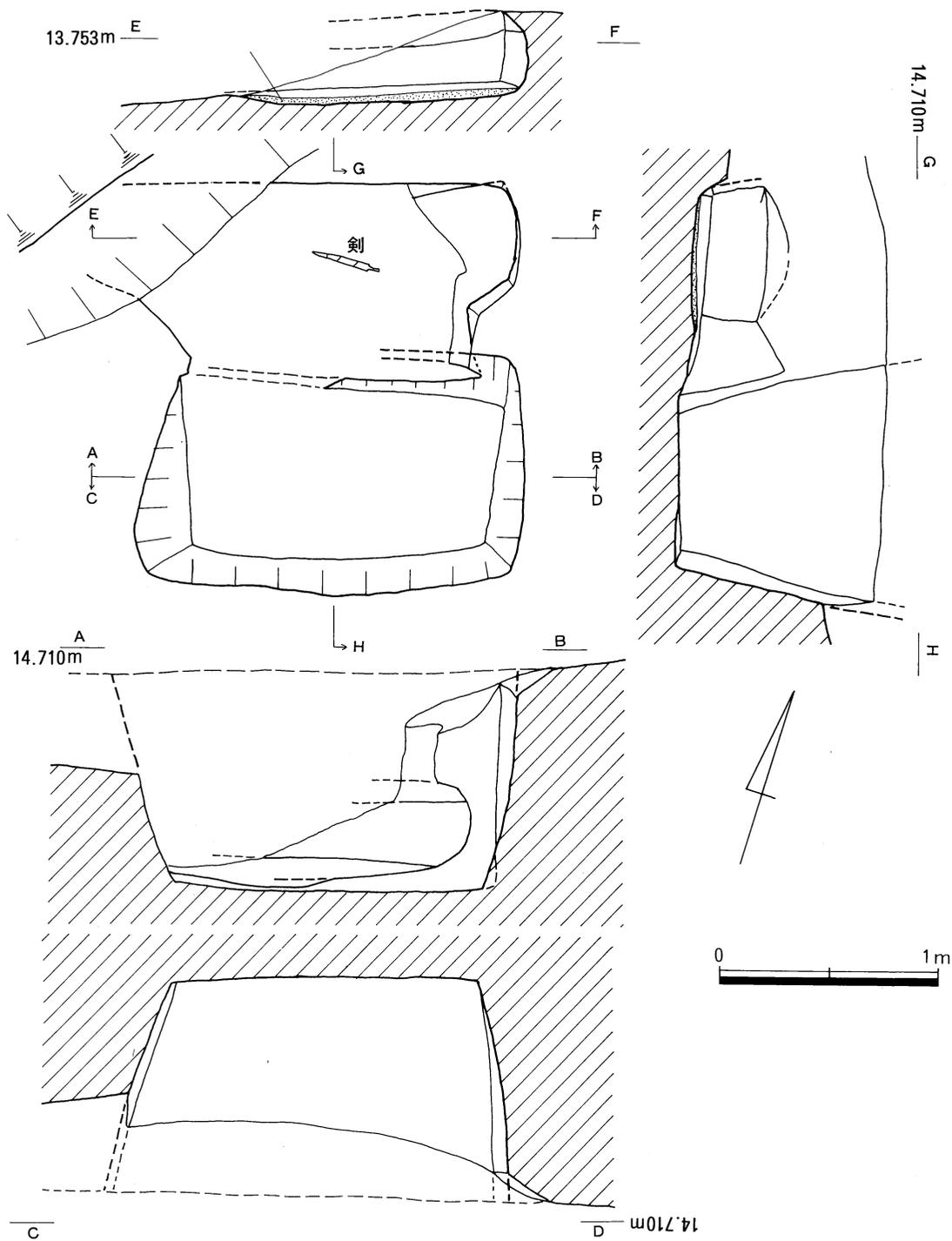
## 9. 地下式横穴 9号 (第24図、図版IV(6)、23)

検出された最西端の地下式横穴で、8号の西およそ4mの地点にある。玄室のかなりの部分が既に削平されていた地下式横穴である。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈していたと推定され、遺構検出面である赤ホヤ層上面で、幅105cm、長さ173cm、深さ94cmの推定規模を持つ。(本来の竪坑掘削面と見られる黒色土からの深さは、およそ115cm前後と考えられる。)長軸方向の方位はN-107°-Wである。四隅の稜線は比較的明瞭である。竪坑の床面は他の地下式横穴と異なり、斜の一段落ちが無く、逆に羨道部が斜に高くなり、そのまま玄室へ続いている。羨門部の立面形状は削平のためはっきりしないが、東側に僅かに残存していた部分から推測すれば、両端が胴ぶくれした略長方形を呈するものと思われる。その推定規模は幅およそ130cm、高さ40cm、羨道の奥行34cmの程度のものである。羨道と玄室は西側部分で削平のため形状がわからない。閉塞施設はおそらく木材が使用されたと考えられるが、閉塞施設に伴う溝等の掘り込みは見られなかった。玄室は竪坑の北側に平入りで設けている。床面平面形は東側残存部では長方形を呈し、方位は幾分外側に振っている。幅54cm、長さ170cm以上、推定高さ約44cmの規模を持つ。長軸方向の方位はN-107°-Wである。床面には長楕円形を呈するAT火山灰が見られたが、これが敷かれたものか、あるいは火山灰層の上面なのか、調査期間の初期であったため気付かなかった。東側天井短軸方向は湾曲して掘削されていたが、その他の部位では不明である。

遺物 (第23図、図版31) 玄室のほぼ中央に主軸と幾分斜行して鉄剣1口が、切先を西に向けてAT上面に置かれていた。玄室の崩壊が大きく、原位置を保っていない可能性もある。全長30.7cm、身幅は中央で2.7cm、刃部長24.7cm、厚さ0.5cm、茎部長6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを計る。鍔は明瞭ではなく、断面レンズ状を呈している。関は斜角で茎尻はほぼ一文字を呈する。X線観察により、茎尻から1.6cmの位置に目釘穴が一つあいていることを確認した。切先にわずかに木質が遺存し、剣身を覆う錆化した布の付着もみとめられ、織り方の異なる2種類の布が観察される。



第23図 地下式横穴9号出土剣(1/3)



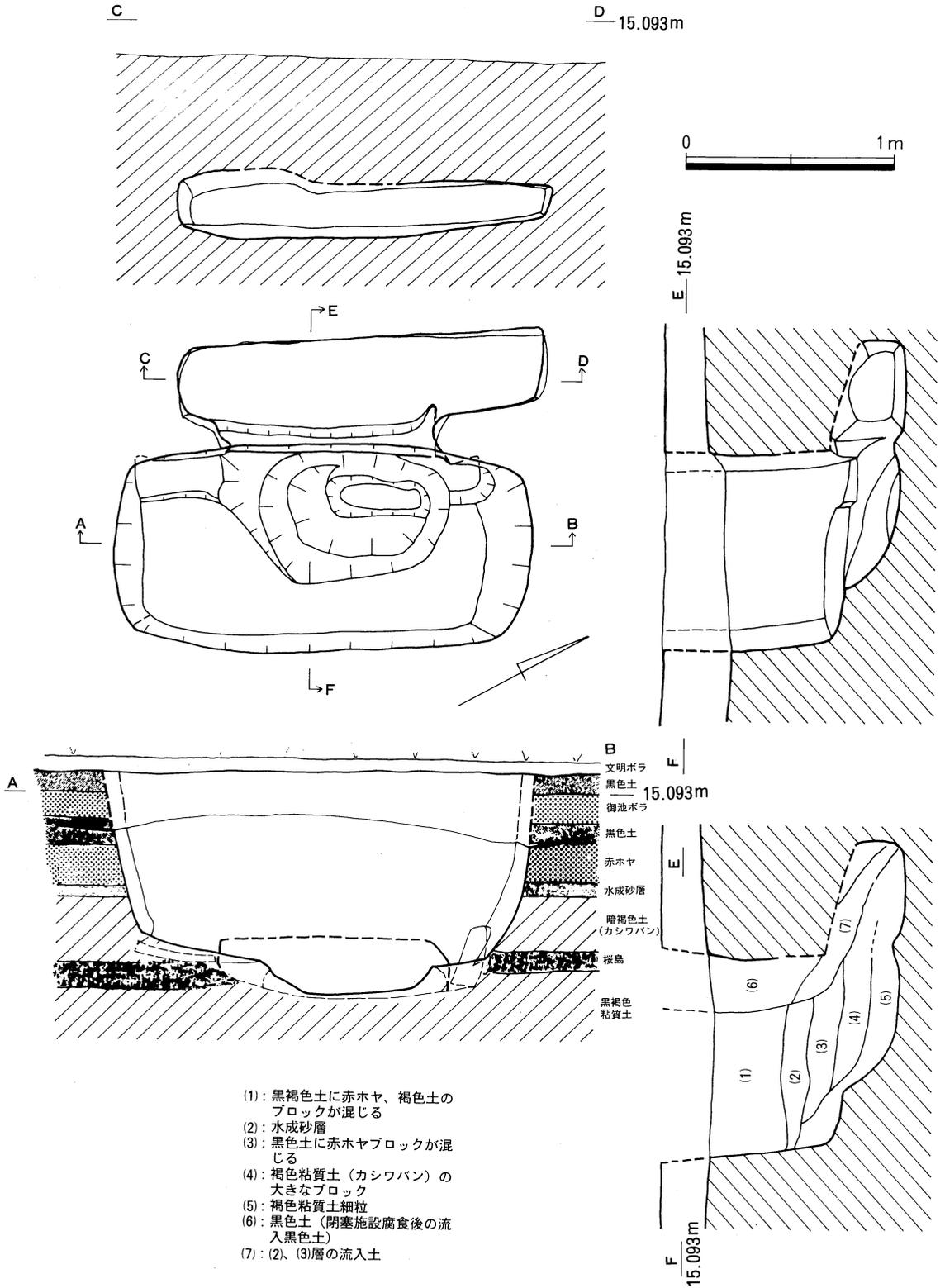
第24図 地下式横穴9号平面図・断面見通図 (1/30)

## 10. 地下式横穴10号 (第25図、図版Ⅲ(8)、24、25)

玄室の取り付け方向が西にある唯一の地下式横穴で、7号の南およそ7mの地点にある。竪坑は柔らかい赤ホヤ層などを掘り抜き、暗褐色の堅い土層（カシワバンと思われる）を底部とし、羨道、玄室もこの層に掘られていた。竪坑の平面形は隅丸長方形を呈し、遺構検出面である赤ホヤ層上面で幅100cm、長さ200cm、深さ86cmの規模を持つ。（実際は御池ボラ面でわずかに土の変化が認められ、本来の竪坑掘削面はその上の黒色土中と考えられることから、この数値はさらに大きくなると思われる。その場合の竪坑の深さは約110cmになる。）長軸方向の方位はN-151°-Wである。四隅の稜線はそれほど明瞭ではない。竪坑の中央部から羨門部にかけて長径92cm、短径62cm、深さ28cm程の長楕円の掘り込みがあり、羨門部で4cmほど敷居状に一段高くなった後、下降して玄室へ続いている。調査中に崩壊した羨門部の立面形状は略長方形を呈し、幅110cm、高さ30cm、羨道の奥行20cmの規模を持つ。羨道は開きぎみに玄室に接続している。羨門部は木材で閉塞されたと考えられ、竪坑羨門側壁際に木材等を差込む溝が掘られていた。西側の溝は幅20cm、長さ40cm、深さ10cm程、東側の溝は幅24cm、長さ22cm、深さ30cm程度の大きさで、平面形は長方形を呈している。左右の深さは20cm以上のレベル差が存在する。玄室は竪坑の北西側に平入りで設けられていて北東方向に長く、その部分では幾分外に振られている。床面平面形はほぼ長方形を呈しているが、北東側が若干幅が狭い。玄室は幅40cm、長さ174cm、高さ34cmの規模を持つ。長軸方向の方位はN-155°-Wである。玄室床面で屍床あるいはAT火山灰見られなかった唯一の地下式横穴である。奥壁、両側壁、及び天井短軸方向は、ほぼ直線的に掘削されていた。中央部では天井の崩落が認められたので、斜に緩やかであったのか、明瞭に段を持つのか不明確だが、天井部長軸方向では北東部分が一段高く掘削されていたのは、掘削の鉄斧と思われる工具痕が見られたことにより確実である。竪坑の埋戻しは、自然層序に近い順番で埋土の層位がみられるため、掘り上げた土をそのまま投入していると考えられ、閉塞材腐朽時に上部から落込んだと見られる黒色土が竪坑羨門部側で認められた。遺体の遺存はなく、副葬供献遺物も皆無である。

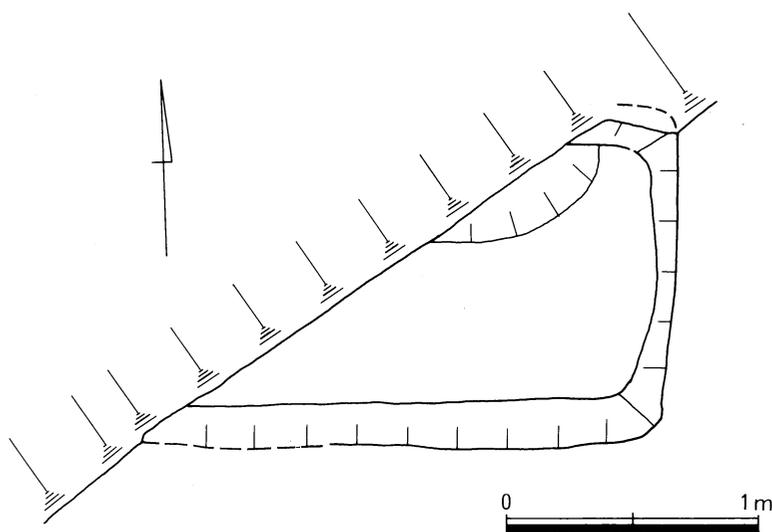
## 11. 地下式横穴11号 (第26図、図版26(1))

検出した地下式横穴の内最東端にあり、10号からおよそ9m北に位置する。善田原から七ツ橋に下る農道によって、すでに大部分が削平されており、確実に地下式横穴であると断言できないが、周囲の地下式横穴との比較から、地下式横穴の竪坑と判断した。斜に半分ほど残存していた竪坑の平面形は長方形を呈しており、幅108cm、現存長215cm、深さ50cmの規模を持つ。竪坑部だけに限れば、崩先地下式横穴群で最大の規模である。竪坑長軸方向の方位はN-89°-W

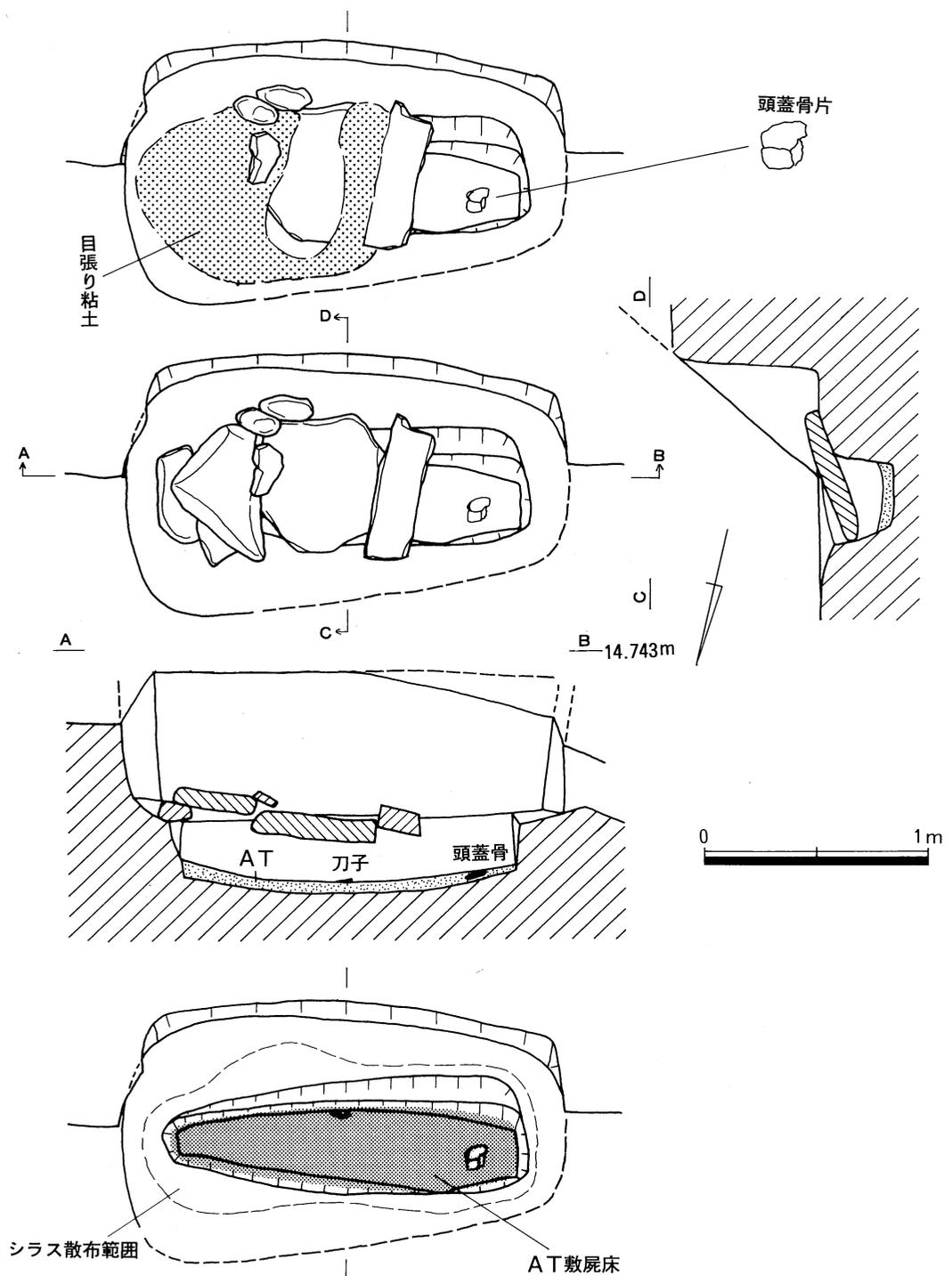


第25図 地下式横穴10号平面図・断面見通図・土層図 (1/30)

とほぼ東西である。玄室位置は豎坑の北側で平入りと推定される。豎坑遺存部に供献土器等は認められなかった。



第26図 地下式横穴11号豎坑平面図 (1/30)



第27図 石蓋土墳墓平面図・断面見通図 (1/30)

## 第IV章 その他の遺構と遺物

### 1. 石蓋土墳墓 (第27図、図版IV(7)、26(2)、27、28)

9号地下式横穴から南西におよそ13mの地点、A地区の西端部で道路法面工事中に、石蓋土墳墓を検出した。墓壙は二段掘りで、上段の掘り方は検出面で長さ約2m、幅はすでにユンボで壊されていてはっきりしない。深さは2段目のテラスまでで約70cmを計る。一段目の壙底は長さ約2m、推定幅1.1mありそのほぼ中央に、二段目の墓壙が掘りこまれている。二段目の埋葬壙は上場で長さ1.6mあり、幅は東端で20cm、中央で40cm、西端で36cmの規模を持ち、深さはテラスからおよそ35cmを測る。二段目の墓壙は、長さ25~60cm、幅20~55cm、厚さ10cm程度の日南層群の砂岩で蓋をされているが、重機が何枚かの蓋石を除去しており、西側では墓壙が剥き出しになっていた。蓋石は重機の圧力で墓壙の肩にめり込んでいるものがあり、西端の石は検出時にずれていた。蓋石の隙間を埋めるため、粗い白色粘土で目張りが施されていた。壙底にはA T火山灰が敷かれていた。壙底西端から20cmの位置で頭蓋骨片を検出し、壙底ほぼ中央の南壁際に刀子一本が副葬されていた。墓壙の長軸方向がN-99°-Wであるので、頭位はほぼ西にある。これらはA T直上に安置され、その上を場所によっては2cm程の厚さのシラスが覆っていた。シラスは蓋石の下でも検出され、遺体を安置した後にシラスを撒き、蓋石が閉じられた状況が伺える。

**遺物 (第28図、図版31)** 墓壙のほぼ中央部壁際に切先を足方向、刃部を体側に向けて置かれていた。全長10.3cm、刃部長6.9cm、身幅は関部で1.4cm、茎部幅1.0cmを計る。刃部だけの片関で斜行している。背はほぼ真直ぐ、刃は関に向って外反して広くなる。茎尻は栗尻である。刃部に銹化した布が付着し、茎部には紐状のものを巻きつけた痕跡が認められる。

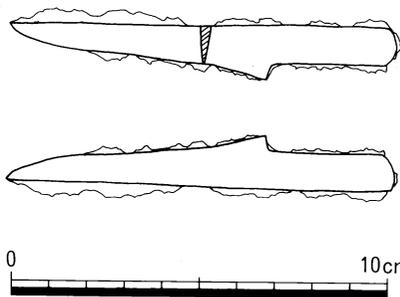
### 2. 円形土墳 (第30図、図版29(1))

2号と4号地下式横穴に隣接する位置に検出した。径約3mの略円形を呈し、検出面であるアカホヤ層上面から床面までの深さはおよそ30cm程である。中央に1m×60cm程の大きさで、床面からの深さ約10cmの楕円形ピットがある。土墳の南東壁際に基部の幅70cm、長さ88cm、高さ10cm程の内側に突出した高まりが見られた。柱穴やその他の施設は、精査したにもかかわらず検出できなかった。この土墳の性格として、中央ピットや突出壁類似の高まりが見られることで花卉状住居の一種とも考えられるが、柱穴が無い、床面積が小さいことなどこれまでに知

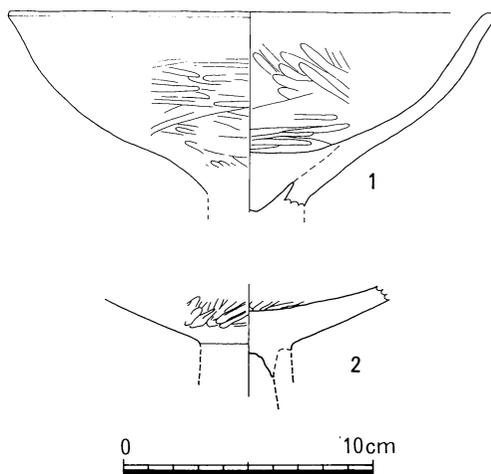
られている花卉状住居の特質からはずれる点も多く、土器等遺物の出土が皆無であったことも考慮して、時期、性格不明の円形土壇としておく。

### 3. 土師器 (第29図、図版32)

地下式横穴に伴う土器は、竪坑埋土から検出された土師器の小破片以外検出できなかったが、A地区の西端部法面掘削工事の排土から高坏の坏部2点が採集された。おそらく地下式横穴群西端部にあったと思われる地下式横穴もしくは石蓋土壇墓などの竪坑上部供献土器ではないかと思われる。第29図1は口径がほぼ推定できる大きな坏部で復元径19.4cm、坏部内法高5.6cmを計る。口縁部と、受け部の境に稜は見られず、口縁部でわずかに外反する。端部は丸く収められている。調整は内外ともヘラミガキである。坏部と脚部の接合は円盤充填されている。2は坏部の受け部のみの破片で、内面が丁寧なナデ、外面がミガキ調整されている。坏部と脚部は別々に作られ接合されている。



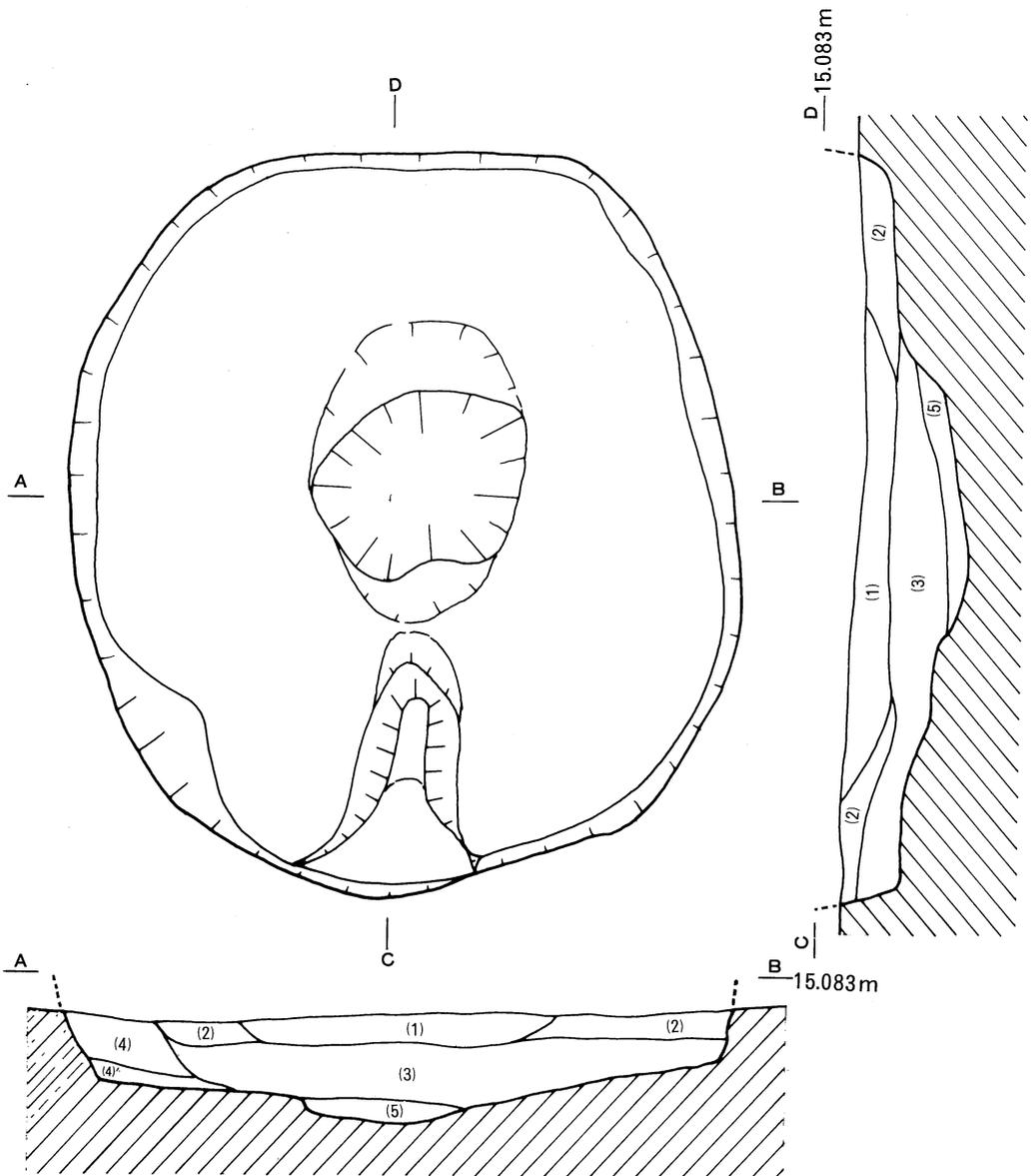
第28図 石蓋土壇墓出土刀子 (1/2)



第29図 崩先遺跡A地区出土高坏 (1/3)

### 4. 包含層出土の縄文土器・弥生土器 (第31図 図版32)

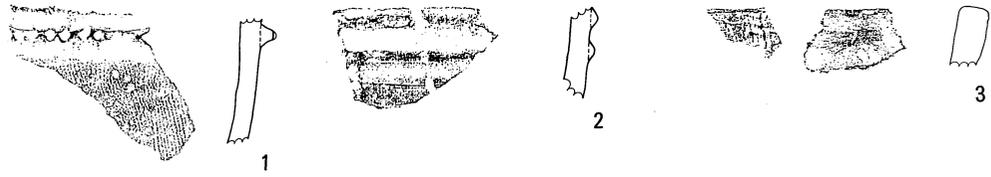
A～C調査区で縄文時代、弥生時代の遺構は全く検出できなかったが、数点の縄文土器と弥生土器が包含層中から検出された。第31図3はB地区で出土した唯一の縄文土器で、貝殻文が施されている。早期の土器と考えられる。1はA地区西端部から出土した押圧キザミ目突帯が巡る甕の胴部片で弥生時代中期から後期にかけての時期に比定される下城式もしくは中溝式と考えられるが、胎土にいわゆる金雲母が見られ、南部地方特有のありかたを示している。2は多重突帯を施し甕で、山ノ口式あたりに比定できる中期後半のものと思われる。4は充実した脚を持つ山ノ口式前後に比定できる甕の底部である。



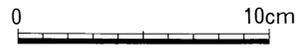
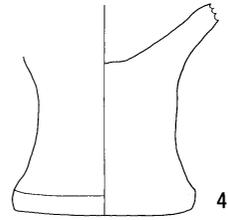
- (1): 暗褐色土
- (2): 汚れた黒褐色にわずか赤ホヤがまじる
- (3): 汚れた黒褐色土に多量の赤ホヤブロックが混じる
- (4): 汚れた黒褐色土に大きな赤ホヤブロックが混じる
- (4): あるいは地山か?
- (5): 黒褐色土に小さな赤ホヤブロックが混じる

0 1m

第30図 円形土坑平面図・土層図 (1/30)



1 : A地区    3 : B地区  
 2 : C地区    4 : 台地下水田

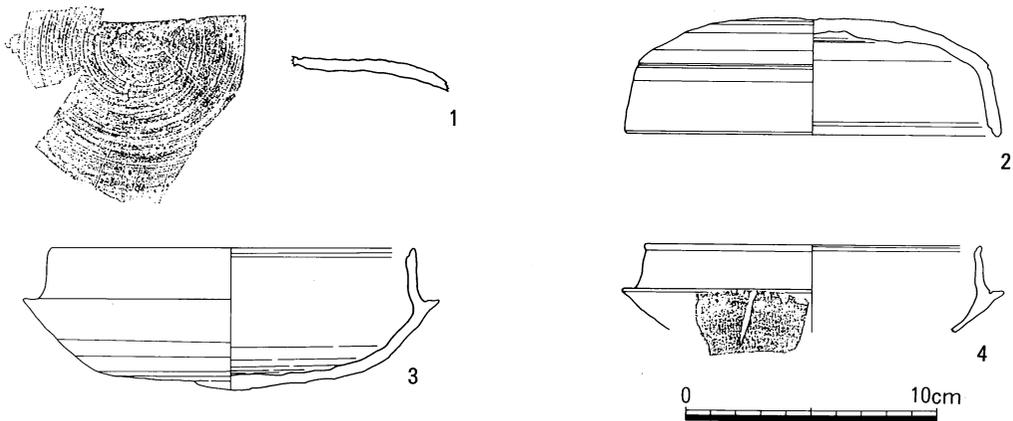


第31図 崩先遺跡出土縄文・弥生土器 (1 / 3)

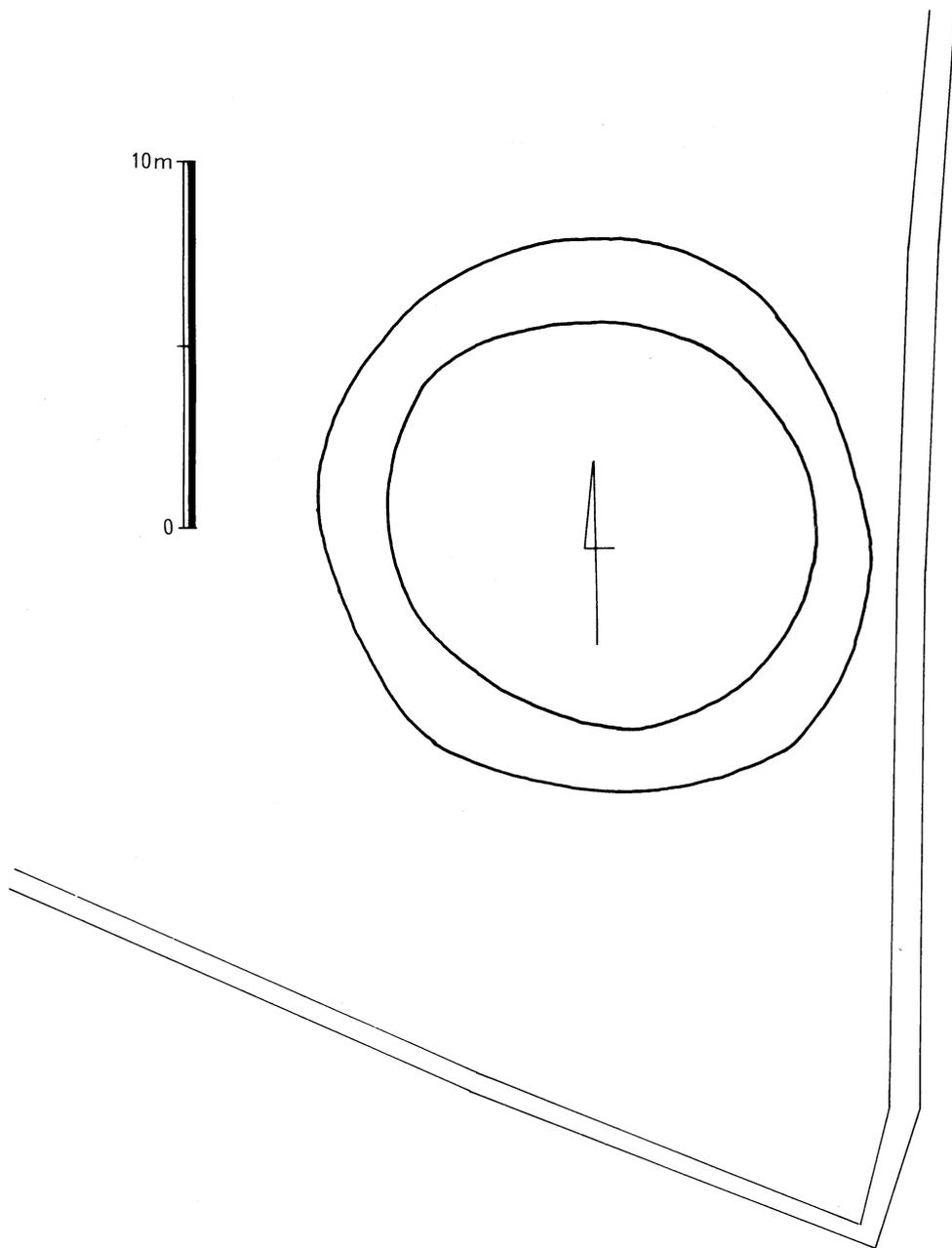
## 第V章 崩先1号墳の所在確認調査

### 1. 1号墳の周溝と周溝出土須恵器 (第32、33図 図版29(2)、30、33)

善田原の広域農道建設予定地周辺には五つの古墳が知られている。(第1図、表1)。そのうち崩先1、2号墳は既に墳丘が削平されており、確かな所在が判らなくなっていた。広域農道が開通すれば善田原台地の開発も進展することが予想され、所在を確認しておく必要があった。12月14、15日の両日の試掘調査の結果、1号墳は地元の人々の指摘する、七ツ橋から善田原を南北に通る既存の農道がJR日南線の踏切と交差する直前の北側畑の中に所在した。調査期間の最終末にあたり、位置図を作成する余裕は無かったが、周溝の平面図だけは作成できた。周溝を含めた円墳の直径は約15m、周溝幅約2m、周溝内側の径は東西に12.5m、南北に11mを計る。耕作土を除去しただけで、それ以上の調査は行わなかった。主体部は既に削平されていた。周溝埋土上部の黒色土から検出した須恵器は図化できるもの4個体分で、第33図1は坏蓋の天井部でかなり歪んでいる。削り方向は時計廻りで範囲も広い。天井中央部に1本、稜方向に3本のヘラ記号が施されている。2はかろうじて実測復元できる坏蓋で径約15cm、器高4.7cmを計る。削りは時計廻りで、稜近くまで施されている。稜は沈線ぎみに甘い。口縁端部に稜を持つが甘い。3は完形近く復元できた坏身で口径14.5cm、器高5.6cmを計る。削りは時計廻りで範囲も広く施されている。立上がり部は直立ぎみで端部に稜を持つが甘い。4は同一個体と思われる破片が幾つか見られるものの接合しない。推定復元形は13.5cm程である。立上がり端部は外反しわずかに稜を持つ。受け部下面にヘラ記号が施されている。これらの須恵器はMT15からTK10型式に比定できる。



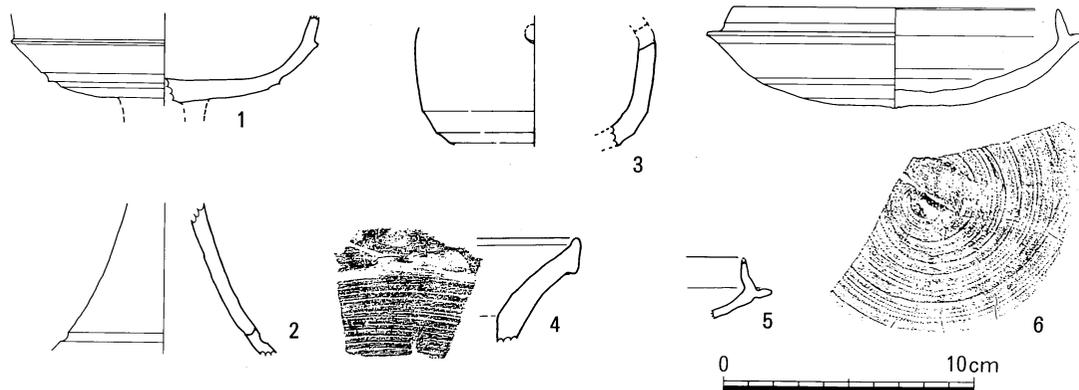
第32図 崩先1号墳周溝出土須恵器 (1/3)



第33图 崩先1号墳周溝 (1/200)

## 2. 牛舎横の畑で表採した須恵器 (第34図 図版33)

C調査区の北東端南側隣接地に牛舎がある。その東に農道に面した畑があり耕作土が削平され小山をなしていた。その表面に須恵器の破片が散乱していた。これらの破片には黒色土が付着しており、耕作土下の遺構に伴っていたものと判断される。串間市の遺跡詳細分布調査報告書によれば、この畑は崩先2号墳推定地の一角にあたり、あるいはここに崩先2号墳が存在している可能性がある。第34図1、2は長脚二段三方透の無蓋高坏片で3は甬の体部片である。4は甕口縁部の小破片と思われる。5、6は坏身で6は半分近く遺存していて底部中央にヘラ記号が施されている。これらの須恵器はおおよそMT85型式と考えられる。



第34図 崩先遺跡牛舎横畑表採須恵器 (1 / 3)

## 第Ⅵ章 ま と め

### 1. 若干の考察 (表2)

#### (1) 閉塞石の採石地

地下式横穴1号、2号、4号及び石蓋土墳墓に使用されている閉塞石と蓋石の石材には砂岩が使用されていた。この砂岩は、厚さが約10cm前後と均一なこと、底痕が見られること等の特徴から、日南層群の互層を形成している砂岩に起因するものと判断される。シラス大地である善田原台地ではこの岩石は採取できないので、周辺の山塊がそもそもの原産地と考えられる。閉塞石、蓋石はローリングを受けて、角が丸くなっているので、川で流下した砂岩もしくは海岸で浸食された砂岩がその第一候補として有力である。遺跡の下を流れる善田川を遡って調査した結果、中流域より上流ではまだローリングが顕著には認められず厚さも遺跡のものより厚かった。厚さが10cm程で、閉塞石程度に角がとれているものは下流域の遺跡周辺のものに限られる。閉塞石の一部に見られる表面の穴は風食によるものと考えられ、その石が海岸に有ったことを示している。これらのことを考慮すれば、崩先地下式横穴、石蓋土墳墓の閉塞石、蓋石に使用された砂岩は、善田川を流下し、河口もしくは海岸に散在したものを採取したか、海岸に露出した日南層群の崩石を採取した蓋然性が強い。まだ殆ど角が摩滅していない閉塞石も一部に見られるので、後者であった可能性の方が高いと判断される。古墳時代当時、遺跡の周辺は海もしくは汽水域と考えられるので、遺跡周辺で採取されたと判断できる。

(この項は特別調査員穴戸章氏の御教示による所が多い。)

#### (2) 桜島とAT、シラスとベンガラ

玄室床面に、楕円形のAT火山灰面が検出された地下式横穴は1～9号で、石蓋土墳墓の墳底にもATが見られた。このうち、自然層のATを利用しているのが、1、3、4、7号で、2、5、8号は屍床にATを敷いている。6、9号、石蓋土墳墓はそのどちらとも確認していない。自然層を利用している1、3号の玄室床面標高は13.7m前後、4、7号は13.9～14mであり、ATを敷いている5、8号は14.2～14.4mである。標高14mを境にしてそれより上位にある玄室にはAT火山灰が敷かれていることがわかる。従って、14.5mの6号はATが敷かれ、13.7m以下の9号と石蓋土墳墓は自然層をそのまま利用した可能性が強い。そのまま利用する、敷くといった違いはあるにせよ、AT火山灰を屍床とすることに固執する原因として、現状では黄色い色、柔らかさ、汚れないといった程度しか思いつかないが、玄室の床面を長楕円形に、AT層上面に合せて掘り込むためには、土の層の堆積について熟知していなければならない。

御池ボラの卓越する都城盆地などを除いて、地下式横穴が、赤ホヤ層下の堅いカシワバンなどの層位に掘り込まれているのはよく知られたことであるが、地下式横穴を造営した人々は、ただ闇雲に堅い層を選んで、玄室を掘り込む訳ではなかったとすれば、地下式横穴の各部位を掘削する目安としても、土の違いを利用していただろうか。総ての地下式横穴について自然層を記録したわけではないので、ここでは2つを例示するにとどまるが、3、10号では竖坑の床面が、桜島（薩摩）火山灰層で一旦テラスを形成した後、羨門そして玄室へと掘削されている状況が認められる。崩先遺跡において、桜島（薩摩）火山灰層はカシワバンの上面からおよそ26cm程度下に、10cm程度の厚さを持って堆積しているが、その附近に竖坑床面を持つ地下式横穴には、他に1、7号が有り、これらも桜島を目安に掘られた可能性が有る。

土の違いといえば、シラスの利用についても注目すべき点がある。1号玄室に於けるシラス塊配置と6号玄室のシラス散布、石蓋土壙墓に見る遺体安置後のシラス散布である。地下式横穴と古墳とを問わず、一般に墓壙や墓室、棺に塗付、散布されるのはベンガラや朱といった赤色顔料である。崩先でも、1号ではシラスと共にベンガラが散布されていたが、普遍的な葬法に卓越してシラスの使用が見られることは、独自の葬送儀礼がとり行なわれたことを示すものと思われる。

### (3) 頭位と副葬品の配置

人骨の依存していたのは、地下式横穴2号、4号と石蓋土壙墓である。その頭位方向はすべて西にあった。頭位の明確なこれらの玄室は、頭位部分で広く、足方向で狭い。又、足方向に長く、その部分では外方向に袖部が角度を持つ傾向にある。平入りで単体もしくは小規模複葬の地下式横穴の類例を検討すれば、串間市域では徳山地下式横穴4号に同様な特徴が見られ、志布志湾沿岸では塚崎2号<sup>(2)</sup>、神領4号<sup>(3)</sup>、にその例がある。宮崎県の地下式横穴では都城市の菓子野57-5号<sup>(4)</sup>、高崎町の縄瀬10号<sup>(5)</sup>、高原町の旭台第9号<sup>(6)</sup>、野尻町の大萩F3号、F5号、F9号<sup>(7)</sup>、須木村の上ノ原2号、8号<sup>(8)</sup>、えびの市の久見迫4号<sup>(9)</sup>、広畑ST-05号、ST-13号<sup>(10)</sup>と、平入り玄室の卓越する諸県地方に多くの類例を見ることができる。逆に、長い方の袖部に頭位を持つ例として、宮崎市の柿木原56-1号<sup>(11)</sup>があるが、類例は少ない。前記の3つの特徴から頭位方向が推定できるとすれば、崩先地下式横穴群のうち、3号、5号、6号、7号、8号は頭位が西にある可能性が高い。9号は玄室西側が破壊されているので確実ではないが、東袖部が外に振っているので、これも西頭位の可能性がある。1号は東西袖部の幅、長さがほぼ等しいが、A T面の屍床の幅は西に広く、西端に置かれたシラスの塊は枕とも考えられるので西頭位の可能性もある。袖の方向で頭位を見てみると、3号以外は、頭位が南と推定される10号を含めて、右袖もしくは右袖と推定される。このように、僅かの例外を除いて、崩先地下式横穴群の頭位は西、右袖という規範の下にあったと推定できるが、西頭位の規制は、単位造墓集団を越えて、

他の集団をも包括する性格のものではなかった事は、徳山のほぼ同一形態を持つ地下式横穴群の頭位が、すべて南北方向と推定されることより明らかである。

崩先に見るような狭小な平入りの玄室では、玄室での中での遺体安置作業が不可能で、羨門から押込むしか方法が無い。その場合、羨門の幅が最低100cm、最大160cm、平均121cmなのに対し、遺体の平均身長は、低身長である山間部で男約158cm、女148cm<sup>(12)</sup>、海岸部はそれよりも幾分高身長なので、真横にスライドさせて納めることは不可能であり、玄室の高さ30cmから45cmという低さに妨げられて、遺体を屈ませることも無理がある。従って、羨門から斜に足許奥に突っ込んだ後、上体を玄室に納めることが必要となる。足部の袖が外に振り、長いという傾向は、このような遺体安置の手順に規定されたもので、しかも、遺体は足から先に玄室に納めるといふ風習が存在したと推定される。

副葬品の武器のあった1号、2号、4号、9号では、頭位が西もしくは西にあった可能性を推定したが、その場合、副葬品の位置は左体側であり、剣、直刀、鉄鏃といった武器は切先が頭位方向に、刀子は足方向に切先がある。武器は遺体からはずして体足に置き、刀子はその腰に隣接した位置から腰に着装した状況が推測される。これは右体側にある石蓋土壙墓の刀子でも同じ状況が見られ、刀子は純粋な副葬品というよりも、着装品と捉えたほうが適切と考えられる。

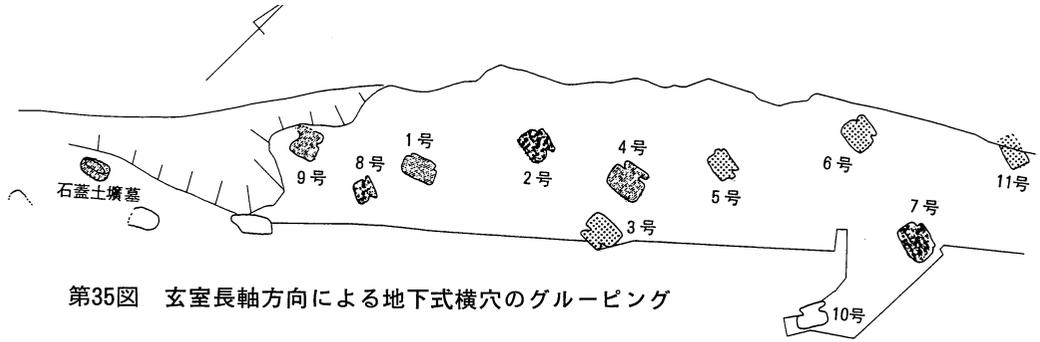
#### (4) 地下式横穴分布の特徴 (第35、36図)

墳墓群内部小単位の追及は、通常、空間的配置、時期、構造等を勘案して試みられる。崩先地下式横穴群では、基本的な構造がほぼ同一であり、空間的配置、時期別に区分することも難しいが、頭位方向、閉塞施設、副葬(着装)品保有の差異に、わずかにその手掛かりが見出せる。

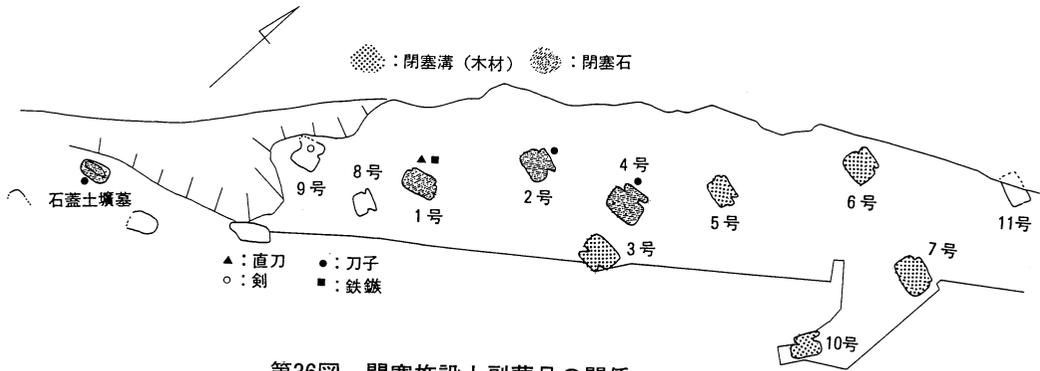
崩先地下式横穴群は、10号を除いて、前節において頭位方向を西もしくは西と推定したが、玄室の長軸方向はN-110°-WからN-77°-Wの範囲に収まっている。およそ30°の幅の中でも77°附近の2、7、8号、86°~93°の範囲に収る3、5、6、11号(4号は、竪坑から見た玄室方向が他の地下式横穴とは反対なので、あるいは別のグループとすべきかもしれないが、ここでは第二のグループとする)、106°~110°の幅にある1、4、9号、155°の10号という4つのグループに分けられる。この区分から読取れる事は、第2グループは東に第3グループは西に分布するという事と、第1グループ、第3グループは北東-南西、第2グループは南北に直線的な分布を示すことである。

閉塞施設には板石閉塞と、羨門部両側の溝で示される木材閉塞が有る。板石閉塞である1、2、4号は西に、木材差込み溝を持つ3、5、6、7、10号は東に、明確に分かれて分布する。

副葬(着装)品を持つ1、2、4、9号はすべて西側に分布し、持たない地下式横穴は8号を除いて東側に分布する。副葬(着装)品を持つ地下式横穴は、9号を除いてすべて板石閉塞



第35図 玄室長軸方向による地下式横穴のグルーピング



第36図 閉塞施設と副葬品の関係

であり、木材閉塞と推定される地下式横穴は、副葬（着装）品を持たないという状況が有り、閉塞施設と副葬（着装）品の有無には密接な関係が認められる。副葬品を持つ被葬者が持たない者より有力だとすれば、板石閉塞が上位の墓に採用され、木材閉塞はその下位にランク付けられる。厚葬の地下式横穴は、その分布もまた直線的であり、西側に集中するといえる。

3つのパラメータを総合的に検討すれば、大きくは西側の厚葬グループと総体的に薄葬の東側グループに区分でき、直線的な造営原理が、漠然とではあるが指摘できると思われる。玄室方位区分では、第3グループが有力グループと指摘できる。石蓋土墳墓も又、方位、厚葬の点から第3グループに含まれる可能性が高い。この区分が、同時期の階層差なのか、各グループの有力者が第3グループを形成するのか、あるいは、ある時期に地下式横穴が厚葬の傾向を見せるのかといった本質的な部分については、造営時期の不明確さに妨げられて言及不可能である。

無論この分析は部分発掘資料という限界を持ち、崩先地下式横穴群全体に適用できるかどうかは、あくまで推論の域を出ない。たとえ分析が妥当性を持ったとしても、造墓集団の意識していた造墓単位と整合するかということとは、別問題であることは言うまでも無い。

# 串間市の地下式横穴

【表2】

遺構名	竪坑形	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	位置(N-W)	深さ(cm)	方位(N-W)	羨道形	幅(cm)	高さ(cm)	奥行(cm)	閉塞施設	閉塞位置	玄室形	玄室長(cm)	玄室幅(cm)
崩先1号	長方形	235	111	158	84	111	10	長方形	10	32	10	板石、粘土	羨道入口	長方形	186	44
崩先2号	長方形	198	128	110	84	80	20	長方形	20	30	20	板石	羨道入口	長方形	170	44
崩先3号	長方形	237	145	100	(94)	94	16	長方形	16	40	16	抉り、木	羨道入口	長方形	166	60
崩先4号	長方形	249	147	122	86	108	28	長方形	28	36	28	板石、抉り、粘土	羨道入口	長方形	188	44
崩先5号	長方形	182	108	140	50	84	16	長方形	16	24	16	抉り、木	羨道入口	長方形	172	40
崩先6号	長方形	215	130	124	94	88	24	長方形?	24	24	24	抉り、木、粘土	羨道入口	長方形	172	44
崩先7号	長方形	257	145	112	82	78	16	長方形	16	32	16	抉り、木	羨道入口	長方形	176	50
崩先8号	長方形	146	86	103	42	72	24	長方形	24	24	22	木?	羨道入口	長方形	158	34
崩先9号	長方形	173	105	130	94	107	34	長方形	34	40	34	木?	羨道入口	長方形	180	54
崩先10号	長方形	200	100	110	(86)	151	20	長方形	20	30	20	抉り、木	羨道入口	長方形	174	40
崩先11号	長方形	<210>	133		50	89										
崩先石蓋土壙墓												板石、粘土		長方形	160	40
徳山1号		<175>	<100>	155	(135)		20	長方形?	20	50	20	木?	羨道入口?	長方形?	195	50
徳山2号		<210>	<113>		(185)		14		14	49				長方形?	190	55
徳山3号																
徳山4号	長方形	255	130	122	(135)	320	18	長方形	18	50	18	木、粘土	羨道入口	長方形?	194	68

※竪坑深さの( )は掘込面からの深さ、( )は地表面からの深さ ※竪坑長さ、幅の( )は推定値、《 》は竪坑底部の数値

玄室高さ(cm)	玄室方位(N-W)	位置	屍	床	被葬者	性別	頭位方位	副葬品	備考
40	110	平入り、北	長楕円、A T面	A T面			西?	直刀1、鉄鏃1	玄室シラス配置、赤色顔料散布
28	78	平入り、北	長楕円、A T面	A T面	1		西	刀子1	鉄斧掘削
32	93	平入り、南	長楕円、A T面	A T面			西?	無	
44	106	平入り、北	長楕円、A T面	A T面	1	成人男	西	刀子1	鉄斧掘削
28	86	平入り、北	A T面	A T面			西?	無	
40	87	平入り、北	長楕円、A T面?	A T面?			西?	無	
44	77	平入り、北	長楕円、A T面	A T面			西?	無	頭部シラス散布?
30	77	平入り、北	長楕円、A T面	A T面			西?	無	
44	107	平入り、北	A T面?	A T面?			西?	剣1	玄室破壊
34	155	平入り、西					南?	無	鉄斧掘削
		平入り?、北							羨道、玄室破壊
36	99		A T面?	A T面?	1		西	刀子1	埋葬後シラス散布
44		平入り、東?			1			剣1	竪坑破壊、玄室南北
46		平入り、東?			1		南	無	竪坑破壊、玄室南北
									ほとんど破壊
37	319	平入り、西			1		北	鉄鏃	

## 2. ま と め

道路幅の調査なので遺跡の一部を調査したに過ぎないが、幅約10m、長さおよそ60mの範囲で地下式横穴11基、石蓋土壙墓1基を調査し、他に道路掘削法面等で地下式横穴もしくは石蓋土壙墓約5基を確認した。

玄室まで遺存していた10基の地下式横穴は、すべて平入りで、玄室の規模は竪坑の半分以下という特徴がある。竪坑、玄室の平面形及び羨門の側面形は基本的に長方形である。底面での竪坑の規模はおよそ長さ120cmから210cm、幅50cmから110cm、アカホヤ上面からの深さ40cmから95cm、羨門の幅100cmから160cm、高さ24cmから40cm、羨道の長さ10cmから35cmほどである。玄室は長さ150cmから190cm、幅30cmから60cm、高さ30cmから45cmの規模を持つ。閉塞施設は羨門部にあり、板石閉塞と木材閉塞の二種類が認められ、板石閉塞が上位の墓に採用されたと見られる。板石による閉塞は1号、2号、4号地下式横穴に認められる。板石は日南層群の砂岩が使用されており、その形状から遺跡付近の河口もしくは海岸で採取されたと見られる。木材による閉塞施設には、木材をはめ込む抉り部の溝あるものもある。これらの閉塞施設の一部で、粘土の目張りが確認された。

埋葬は、人骨の遺存しているものは単体であり、その他のものも、玄室の規模やAT火山灰の長楕円の屍床から見て単体埋葬と推定される。玄室の向きは、1基を除いておよそ東西方向にあり、遺体の頭位方向はほとんどが西にあると推定される。

一基だけ確認された石蓋土壙墓は、1m以上の深さに一段目の隅丸長方形墓壙を掘り下げ、更に棺に相当する二段目の遺体収容壙を形成したものである。壙底にはATが敷かれ、その上の、西方寄りに頭蓋骨片が検出された。二段目の墓壙は砂岩の板石が蓋として置かれ、白粘土で目張りされていた。AT火山灰で埋葬床を整えるありかたや、頭位、蓋石に日南層群の砂岩を使用する点、副葬品などの葬法の類似から、地下式横穴と同じ時期に造営された可能性が高い。その場合、同一時期で同一の墓域に、異なる種類の墓に葬られた人物の性格、例えば出自、性別、階層などの検討が今後の課題として残されることになる。

出土遺物について、本来の竪坑掘りこみ面を重機で除去したために、竪坑上部における供献遺物は明らかではない。高坏等若干の土師器片が排土から採集できたが、須恵器は確認できなかった。竪坑内にも、若干の土師器細片を除いて、供献遺物は認められなかった。副葬品は、四つの地下式横穴と一つの石蓋土壙墓で鉄製の武器（刀子は多目的の利器だが）が検出された。地下式1号横穴では直刀1振、鉄鏃（圭頭鏃）1本の2点、9号地下式横穴には剣1振が、2号、4号地下式横穴、石蓋土壙墓にはそれぞれ刀子1本が副葬されていた。

崩先地下式横穴群の造営は、明確ではないもののおよそ6世紀代と考えられる。この調査によって、徳山の地下式横穴群の調査以来、あまり知られていなかった、志布志湾沿岸部の串間

市域における、平入りで小規模な単体埋葬の玄室を持ち、ほぼ同一の型式だけで構成された地下式横穴群の状況が追認できた。

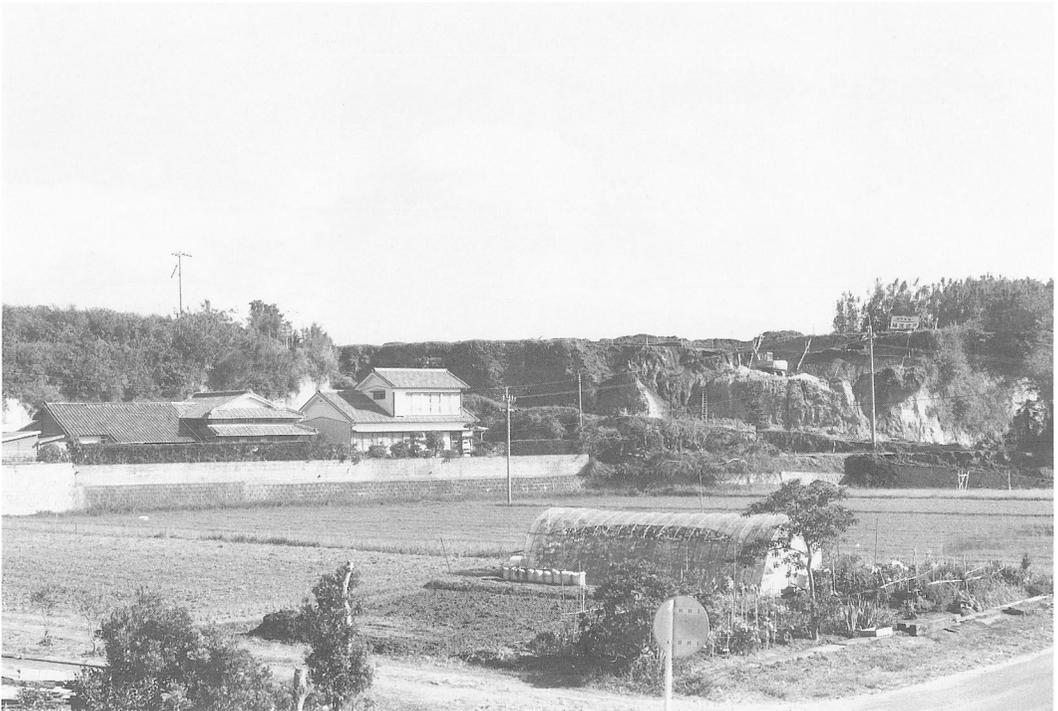
(註)

- (1) 石川恒太郎 「串間市徳山の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書 第16集』  
宮崎県教育委員会 1972
- (2) 寺師見国 「鹿児島県下の地下式土壇」『鹿児島県文化財調査報告書 第4集』  
鹿児島県教育委員会 1957
- (3) 中村耕治 「大崎町神領古墳群(地下式横穴3号・4号)」『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報  
—昭和58年度—』 鹿児島県教育委員会 1984
- (4) 矢部喜多夫 「菓子野地下式横穴」『都城市文化財調査報告 第4集』 都城市教育委員会 1986
- (5) 石川恒太郎 「高崎町繩瀬小学校々庭の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書 第16集』  
宮崎県教育委員会 1972
- (6) 石川恒太郎他 「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書 第19集』  
宮崎県教育委員会 1977
- (7) 石川恒太郎 「地下式古墳群」『大萩遺跡(1)』 宮崎県教育委員会 1974
- (8) 岩永哲夫・茂山護 「上ノ原地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書 第23集』  
宮崎県教育委員会 1981
- (9) 石川恒太郎 「久見迫・馬頭遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』  
宮崎県教育委員会 1972
- (10) 中野和浩 『広畑遺跡』(『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第7集』)  
えびの市教育委員会 1991
- (11) 野間重孝 「柿木原地下式横穴墓56-1号」『柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡』  
宮崎市教育委員会 1989
- (12) 松下孝幸 「南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究」『長崎医学会雑誌』  
65巻4号 1990

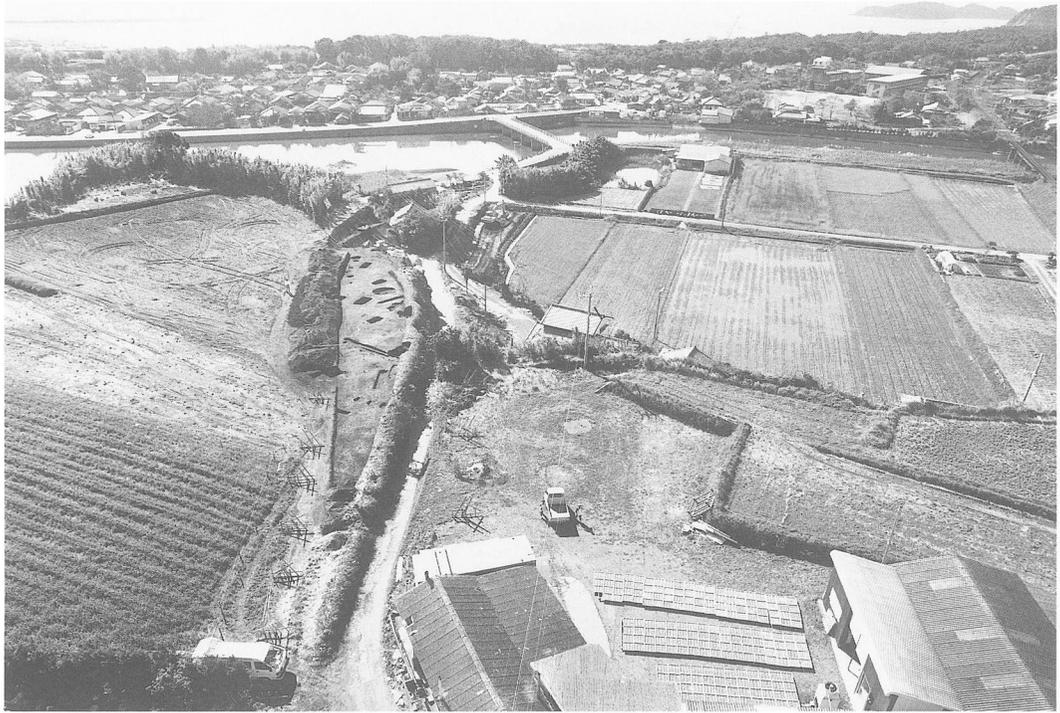
# 圖 版



(1) A地区（地下式横穴群）発掘調査前全景（東から）



(2) A地区遠景（台地下から）



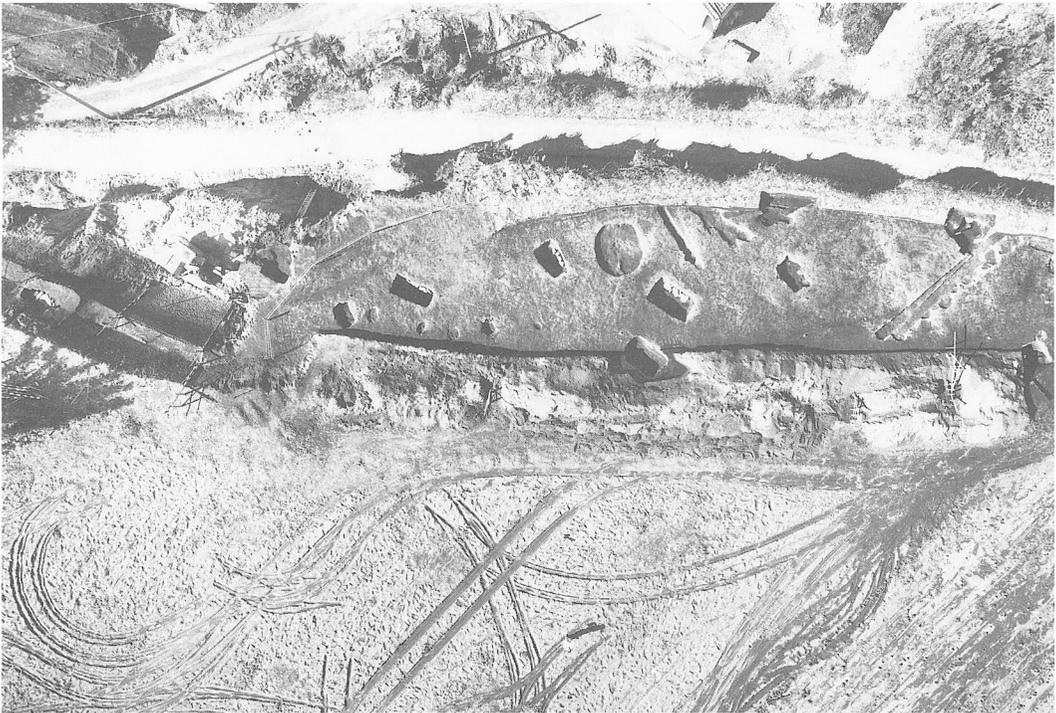
(1) 地下式横穴群全景（東から 上は善田川と志布志湾）



(2) 地下式横穴群全景（北から）



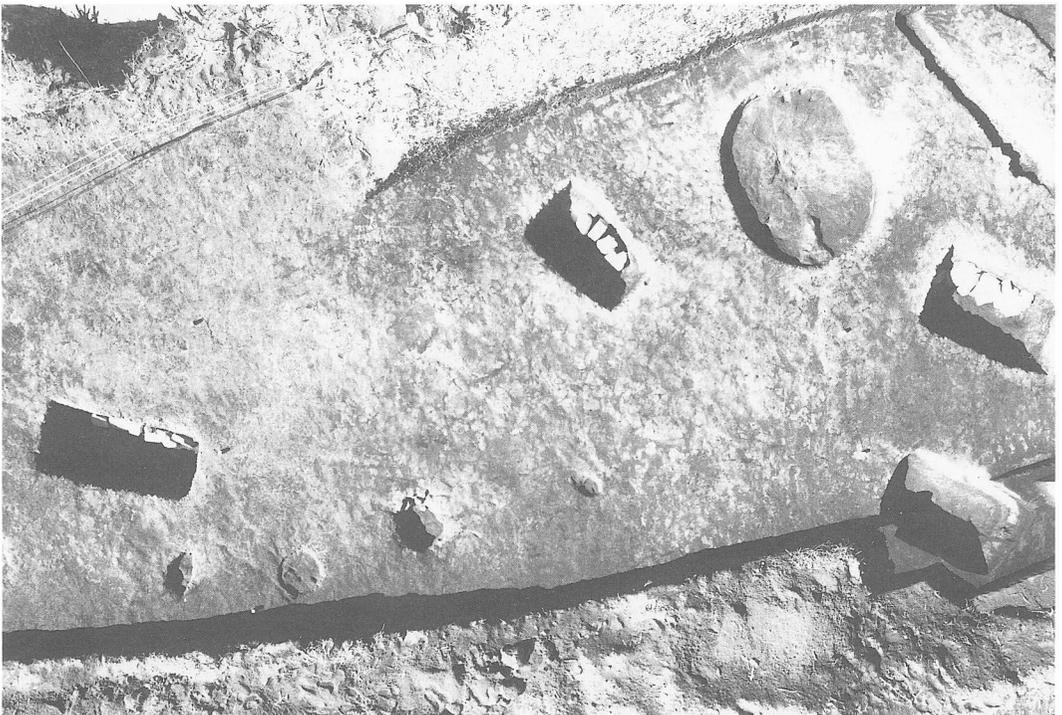
(1) 地下式横穴群全景（南東から 左は善田川）



(2) 地下式横穴群全景（真上から）



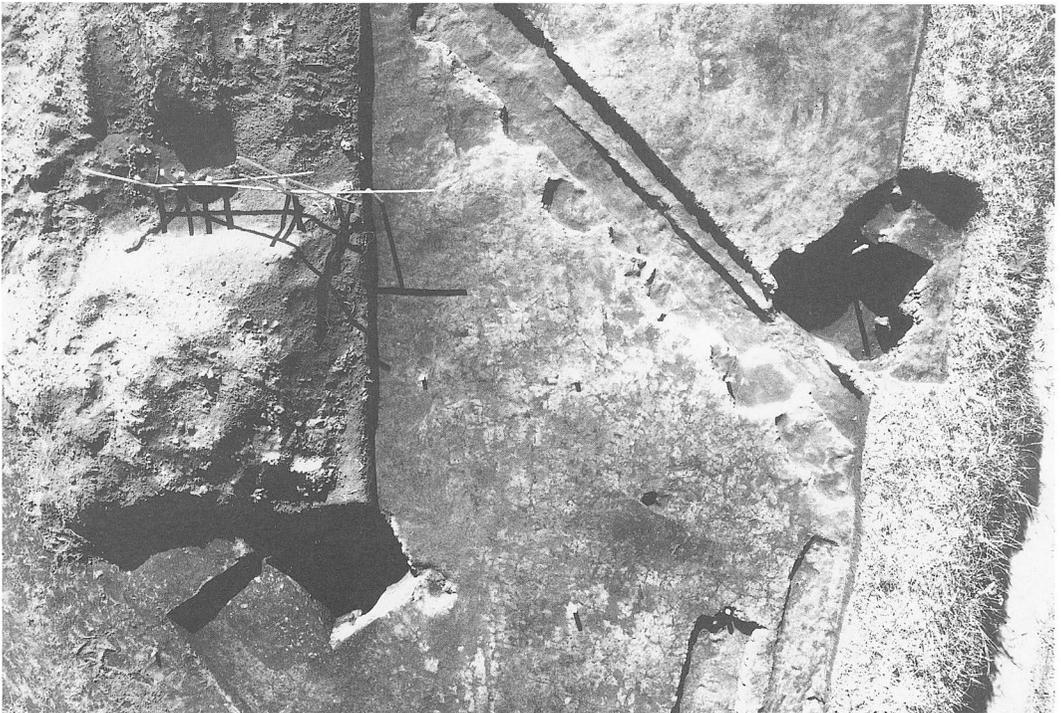
(1) 地下式横穴 9号・8号・1号 (左から)



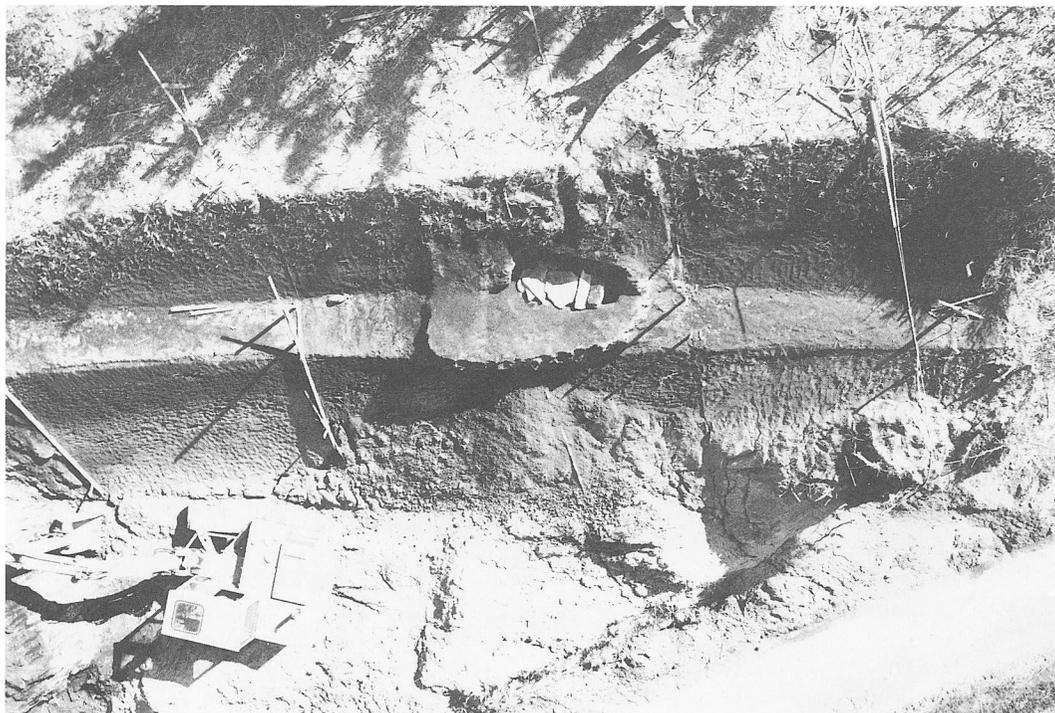
(2) 地下式横穴 1号・2号・3号・4号 (左から)



(1) 地下式横穴 3号・4号・5号 (左から)



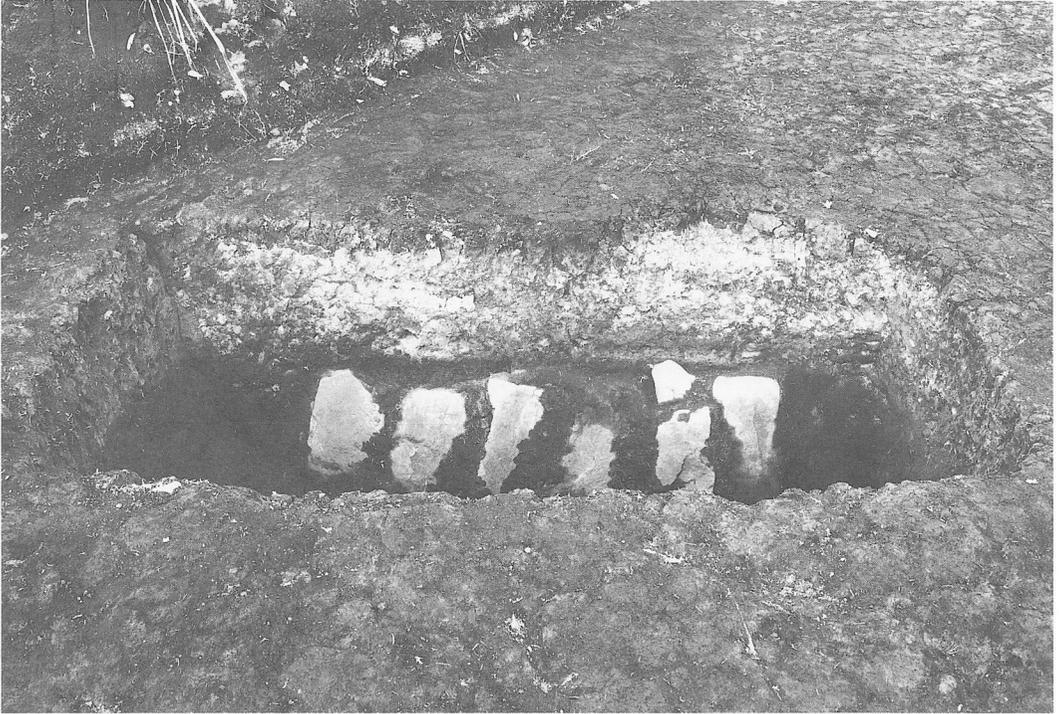
(2) 地下式横穴 7号・6号 (左から)



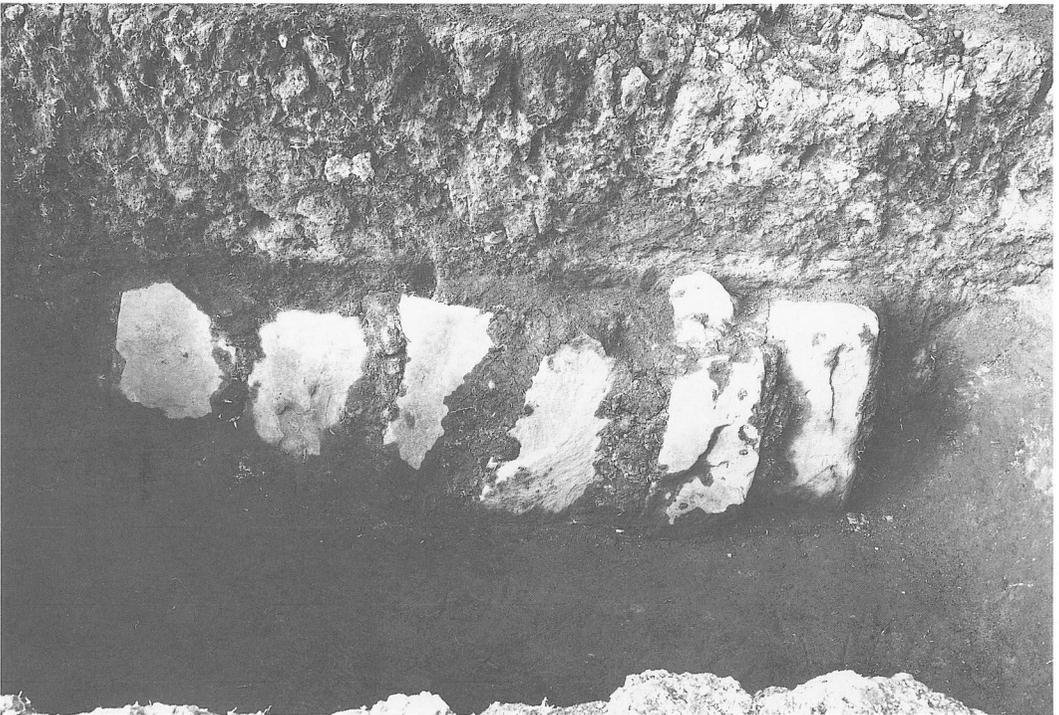
(1) 石蓋土墳墓 (北から)



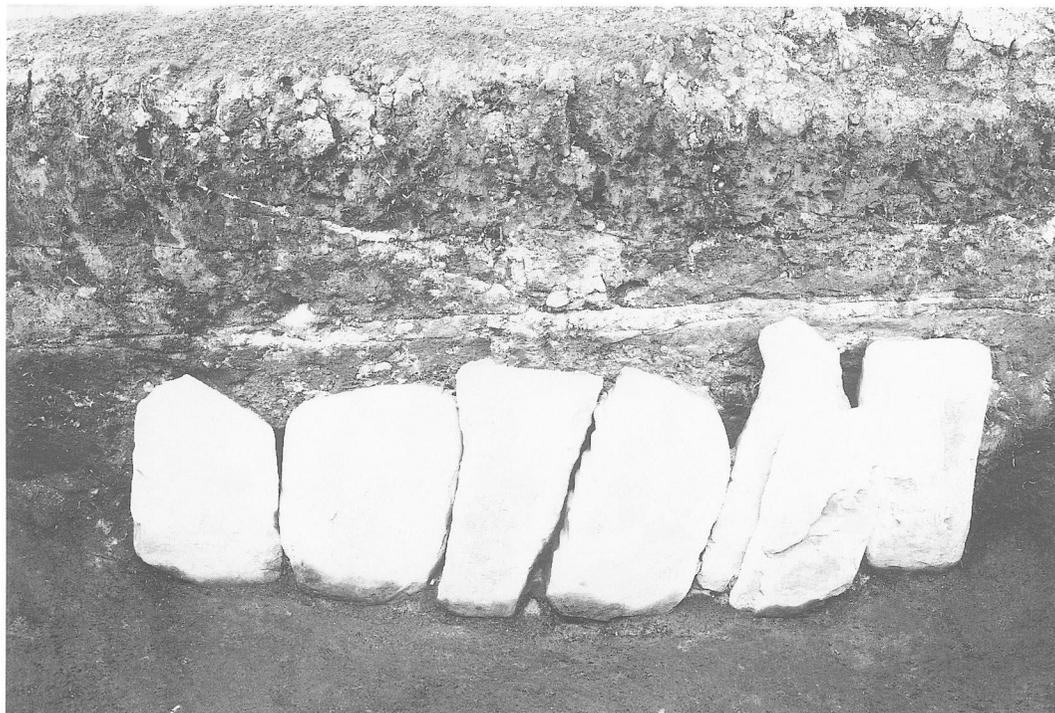
(2) 地下式横穴群全景 (西から)



(1) 地下式横穴 1号竪坑 (南から)



(2) 地下式横穴 1号羨門閉塞石検出状況



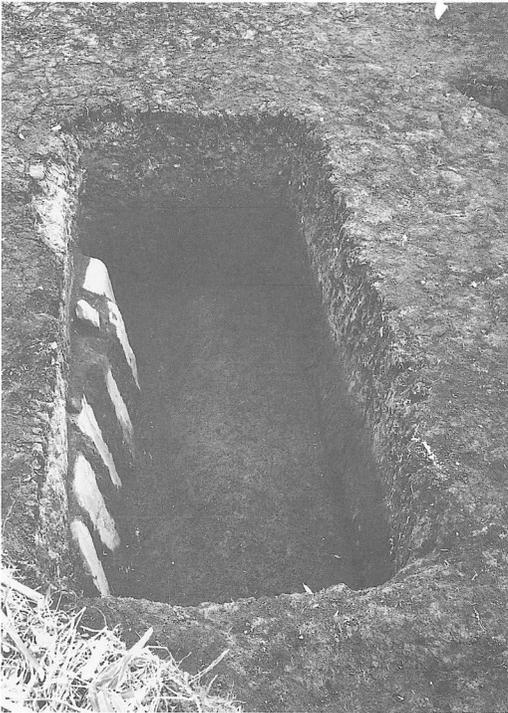
(1) 地下式横穴1号羨門閉塞石目張粘土除去後



(2) 地下式横穴1号玄室（奥壁際に直刀・鉄鋸）



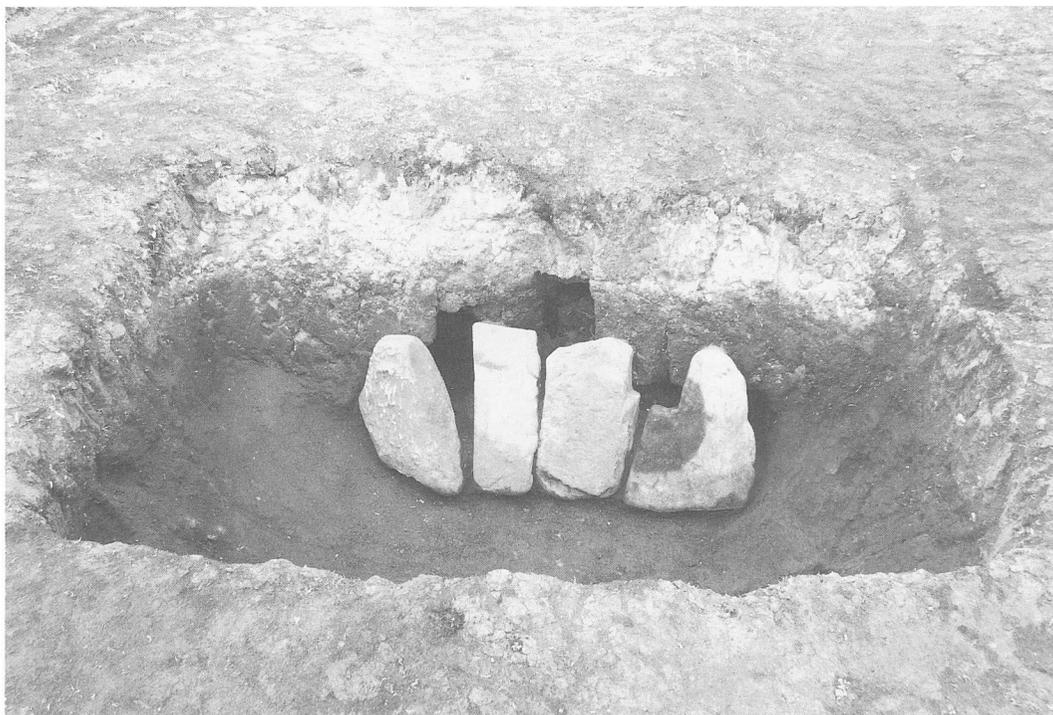
(1) 地下式横穴 1号直刀・鉄鍬副葬状況



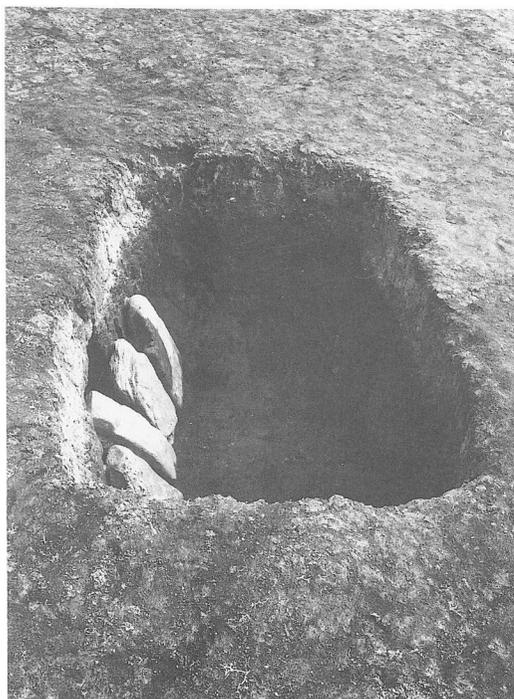
(2) 地下式横穴 1号竖坑 (西から)



(3) 地下式横穴 2号竖坑埋土と羨門閉塞石 (西から)



(1) 地下式横穴 2 号 竪坑・羨門閉塞石 (南から)



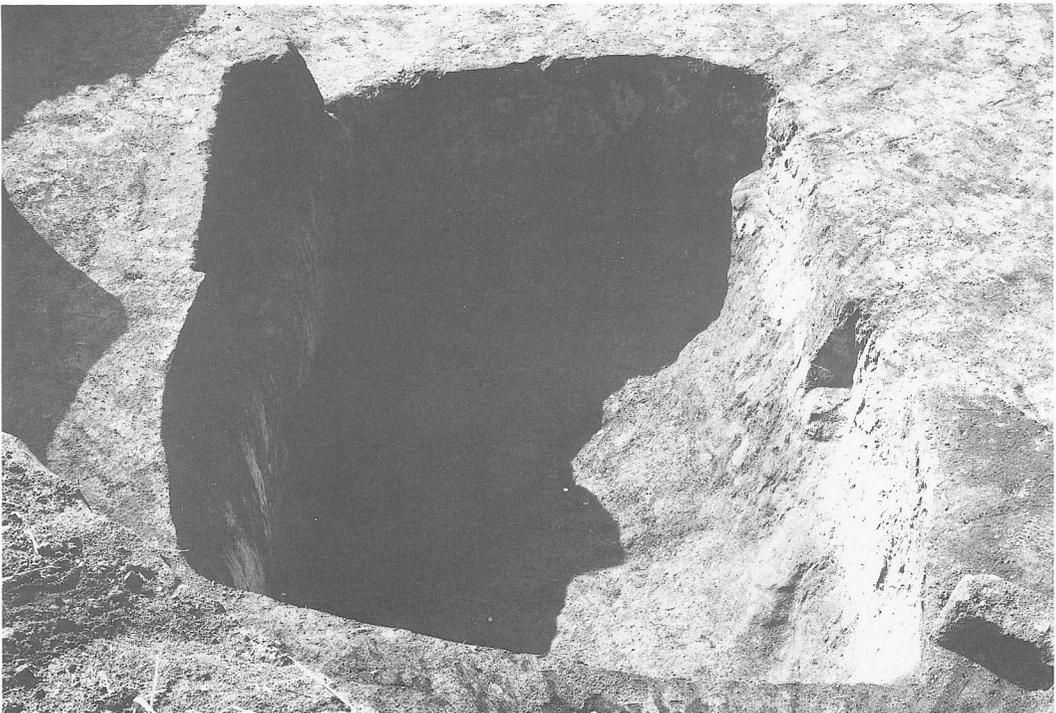
(2) 地下式横穴 2 号 竪坑・羨門閉塞石 (西から)



(3) 地下式横穴 2 号 玄室 (天井部除去後 西から)



(1) 地下式横穴 3号竖坑 (北から)



(2) 地下式横穴 3号竖坑 (東から)



(1) 地下式横穴 3号竖坑・羨門



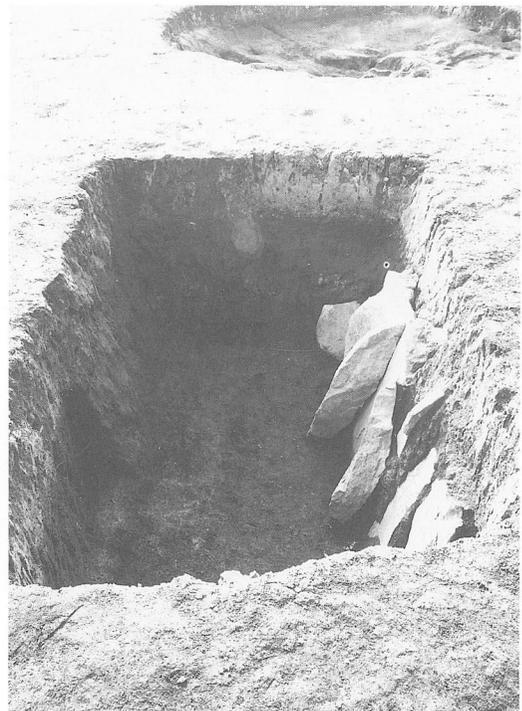
(2) 地下式横穴 3号玄室 (天井部除去後)



(1) 地下式横穴3号竖坑・羨道・玄室（天井部除去後 東から）



(2) 地下式横穴4号竖坑埋土と  
羨門閉塞石検出状況（西から）



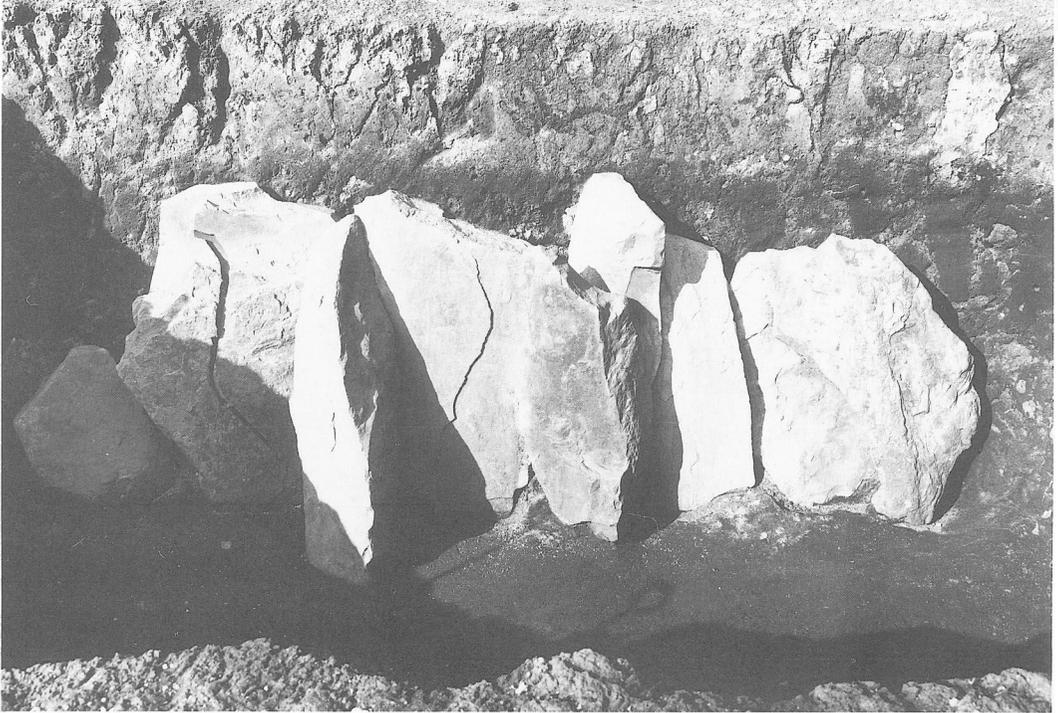
(3) 地下式横穴4号竖坑・羨門閉塞石（東から）



(1) 地下式横穴4号竪坑・羨門閉塞石（南から）



(2) 地下式横穴4号羨門閉塞石検出状況



(1) 地下式横穴 4 号羨門閉塞石 (目張粘土除去後)



(2) 地下式横穴 4 号玄室人骨検出状況



(1) 地下式横穴 4号玄室・刀子副葬状況 (天井部除去後)



(2) 地下式横穴 5号竪坑・羨門 (南から)